

EVOLinGATE 転生エボルが特地に行くそうです(一時凍結中)

エターナルドーパント

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレな死に方をした少年は、宇宙で目を覚ました。

【コブラ！ライダーシステム！】

【エヴォリューションツ！！】

彼は、己の気に入らない物を——破壊する。

【フツハツハツハツハツハツハツハ！！】

「さあ、始めるか」

目次

覚醒・殲滅	1
特地 in エボル！ブルルラアア！！	9
自衛隊	15
教育	21
イタリカ	29
イタリカ・2	36
ベルばら騎士団	42
交流／暗躍	49
ブラックホール	56
コラボ・戦姫絶唱エボリユーション！	
戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（+5人）	63 ①
戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（+5人）	73 ②
戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（+5人）	85 ③
戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（+5人）	100 ④
戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（+5人）	115 ⑤
戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（+5人）	131 終

覚醒・殲滅

(?サイド)

「・・・ナアニコレエ」

うん、状況を整理しよう。今、俺は宇宙空間らしき所に浮いてる。そしてきつきまで俺は・・・確か・・・通販でなけなしの金叩いて買ったエボルドライバー（トリガー付き）開封して小躍りして・・・興奮冷まず為に夜の散歩に繰り出して・・・あ。

「トラック、突っ込んできた・・・」

・・・そうだよ！居眠り運転か何かのトラックが歩道に突っ込んできたんだよ！

「うっそだろオイ」

『歩道歩いてても死ぬ時は死ぬ』って親父が言ってたけど、ホントに死ぬじまったよ・・・オカンはロードスターで転けて車高3分の2くらいにべっこんでもピンピンしてたつてのに・・・

「つか何で俺生きて・・・は?」

待て、俺の目には今、有り得ない物が映っている。何で・・・何で・・・何で、パンドラボックスが?」

俺の後ろに、あの緑色のパンドラボックスがプカプカ浮いてやがる！何で・・・

「・・・まさか俺・・・エボルト?もしくはブラッド族?」

そう思えば、真空の宇宙空間で生きていられるのも納得だが・・・もしかして・・・

「ぬんっ!」

物は試しと、俺は胸に手を突っ込んでみる。すると、思った通り手首までスッポリとめり込んだではないか。そして少しまさぐってみれば、指に硬い感触がある。俺の推測が正しければコレは・・・

「・・・やっぱりコレだったか・・・エボルドライバー」

手を引っこ抜くと、俺の手にはワイनレットを基本に、金、青などで装飾されている機械——エボルドライバーが握られていた。

「ハイ確定く。俺エボルトもしくはブラッド族く」

取り敢えず、腰に着けてみようか。ハザードレベルが足りなかったら装着されないかも知れないし、知っておかないと。

【エボル・ドライバー！】

うん、変身可能っぽいな。じゃあパンドラボックス開けて・・・お
お！

「レジエンド系も含めたフルボトル全部に・・・これまでであったか」

俺が何よりも目を引かれたのは、白と黒というシンプルなカラーリングながらも、何処か危険な雰囲気のあるツール——エボルトリガーだった。

「まあ、ブラックホールじゃないと星間航行出来ないらしいし、当然だわな」

さて、となれば、やる事は一つだな。

「むんっ・・・やっぱコレも、念じれば出て来るんだな」

俺は手元に出現した2つのボトル——コブラエボルボトルとライダーエボルボトルを手の中で転がして眩く。さて、やるとしますか！

「祝え。新たな破壊者の誕生を・・・なんてな」

【コブラ！ライダーシステム！】

俺はそう言いながらドライバーにボトルを装填する。

【エヴォリューションッ!!】

すると認証音声が流れ、待機音も流れ始めた。そして俺は右側のグリップを掴み、ハンドルを勢い良く回す。すると、ベーターベンの交響曲第九番第四楽章に酷似した音声が鳴り、E V | B Hライドビルダーがエボルドライバーを中心に、俺の前後に現れる。

ーテ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチューン！ー

【ARE YOU READY?】

そして俺の前後に靄に包まれたランナーパーツとリングが精製され・・・

「変身！」

両手をクロスした俺の言葉でE V | B Hライドビルダーが一気に迫り、合体。腕を前に伸ばす俺を挟み込む。

【コオブラア・・・コオブラア！エボル・コオブラア〜!!】

そして、リングが縦横に激しく回転。かかっていた靄をエネルギーのスパークで吹き飛ばした。

【フツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ!!】

—ガララララツガチンツ—

最後に、胸のアーミリアクター、肩のEVOライドシールドが回転、固定され、額のマスタープラミスフィアが周囲の天体を投影する。これで・・・

「変身完了・・・そうだな、どうせなら」

あの台詞で絞めようか。

『んっんん、よし・・・エボル・フェーズ1、完了だア』

やっぱり、ここはエボル^金トボイス^尾に限るな♪

『だが、コレだけだと星間航行は・・・待てよ？もしかして、あのベストマッチなら!』

俺はすぐさまパンドラボックスを開き、ある2つのボトルを取り出した。

『コイツなら、きつと宇宙空間での移動が可能な筈だ!』

俺は早速、取り出したボトルをドライバーのエボルボトルと取り換える。

【パンダ！ロケット！エボルマッチ!】

そして、再びハンドルを回転し・・・

—テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン—

『ARE YOU READY?』

「エボル・アップ!ってな♪」

そう言い俺はまたクロスした腕を前に伸ばした。

【ロケット・パンダ!・・・ヌアハハハハ!】

『つと、エボル・マッチの時はマッドローグになるのか。良い事を知った』

マッドローグになった俺は、すぐさまパンダのタケノコサーチ機能を使う。コレなら、竹という植物が存在する惑星に行けるはずだ・・・よし、見つけた!絶対いらねえだろ・・・と思つてた機能だが、意外

な形で大いに役立ってくれたぜ♪

『じゃ、全速力で行きますかっ!』

そう言つて俺はまたハンドルを回す。

―テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン! ヴイチュン!―

【READY GO!! エボルテック・アタアック! Cia o♪】

その音声と共にフォーゼのロケットモジュールソックリのアタッチメントを両腕に出現させ、俺は地球に向かった。

―ぱっ^{30分}ぽー―

いやー驚いた驚いた。まさかイタクアやミルゴなんかとすれ違ふとはなあ。そしてそれらを目の当たりにしてもSANが黒字確定な辺り、流石はエボルトボディだ。恐らく、クトウルフの神性達とも対等以上に戦えるだろう。

『と、見えてきたあ♪』

俺は取り敢えずエボルに戻り、またパンドラボックスから別のボトルを取り出す。因みに、何か東方のゆかりんのスキマみたいな亜空間が創れたから、そこにエボルトリガーと一緒にパンドラボックスを収納している。

『ブラックホールは、出来るだけ温存しないとな。身体の負担も心配だし・・・』

そう言いまたボトルをドライバーに装填する。

【亀! ライダーシステム! クリエイション!!】

そしてハンドルをグルグルグル!

―テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン! ヴイチュン!―

【READY GO! 亀・フィニッシュ! Cia o♪】

シユールな音声だなどと考えながら、俺はブラカワニのように甲羅型のバリアを生成し、大気圏に突っ込む。さて、都合良く真下は日本っぽいぞ!

【へりコプター! ライダーシステム! クリエイション!】

―テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン! ヴイチュン!―

【READY GO! へりコプター・フィニッシュ! Cia o♪】

そしてへりコプターで少しずつ降りていく。現在、高度44561

m・・・めんどくせえ！

『落ちよう』

そう言って俺はヘリコプターのプロペラを下に向けた。すると当然、揚力は下向きに働くから・・・

『ウツヒョオオー！こりやあたまらんぜー！』

気分は絶叫マシンの下りだ。ってもう高度10000mって速すぎだろ!?!って、ん？

『何でワイバーンが？』

しかも、なんか中世の兵士みたいなのが一般人を襲ってる・・・よし、殺そう☆(鈴音感)

(NOサイド)

東京・銀座。普段は人で賑わい、ごった返している場所だが、今日は違う。

「キヤアアアツ!!」

「た、助けてくれえええ!!」

いや、ある意味賑わっていた。恐怖と混乱で。何故なら、突然現れた門のような構造物から現れた兵士や竜、オークやゴブリンといったケダモノ共が、市民を蹂躪しているからだ。

「ウアアアアアッ!!おかあさくん・・・」

そしてこの少女も、ケダモノに目を着けられてしまった。

「(ほう?ガキか。ワイバーンの餌に丁度良い)」

そう言い、兵士はその子を掴み揚げた。

「いやっ！離してえ！」

少女も暴れるが、兵士の腕はびくともしない。

(誰か・・・誰か助けて・・・)

少女の祈りも虚しく、ワイバーンの牙がその肌に迫る・・・その時だった。

―ドゴオオンツ!!―

「(な、何だ!?)」

兵士は驚いて少女を落とす、ワイバーンも硬直する。そしてこんな音がすれば当然だが、周りの者達もその場に釘付けになった。

『・・・あくクソクソクソクソク、くっあ、く、実戦向きじゃない・・・』
そんな声と共に土煙から出て来た存在に、全員が固まった。本能的に悟ったのだ。目の前のコレに戦いを挑めば、間違い無く死ぬと。

『オイお嬢ちゃん、大丈夫か?』

そんなケダモノ共を無視し、その存在——エボルは少女に歩み寄った。

「・・・宇宙人・・・さん?」

少女は思わずそう零した。まあ、当然だろう。天空義や正座早見版など、宇宙を連想させるモノが装飾として大量に着いているエボルは、ぶつちやけ子供に宇宙人だと言って見せても通用するような外見だ。

『おおー！ビンゴオー！そうだよ、俺は宇宙人なんだ』

そう言いながら嬉しそうに少女の頭を優しく撫でるエボル。その場違いな空気に、兵士達はポカンとしていた。

『さてと、お嬢ちゃん。君を今から、安全な所に送ってあげよう』

そう言うや否や、エボルトは赤紫の残像を引きながら超高速で移動し始めた。もちろん、ケダモノ共は驚く。空から降ってきたおかしなヤツが、今度は目にも留まらぬ速さで動いたのだから。

「(き、消えた!?)」

一部には消えたように見えた者もいたようだ。そしてケダモノ共は、今逃げ出さなかった事を後悔することになる。

(エボルサイド)

『つと、ここだな』

俺は女の子を抱えて皇居に向かった。生体反応が多かったからな。

「な、何だお前!」

と、何かTシャツ着たちよび髭男に驚かれた。まあ当然か。

『丁度良い。この子を頼んだぜ。俺はあのケダモノ共相手に、チヨイと準備運動して来る』

「はあ!?!」

俺はその男に女の子を押し付けて、またさっきの場所に向かう。

『お前等、今日は良く来てくれたな!』

俺は目の前のケダモノ共に対して叫ぶ。さつきとは違い、皆が皆武器を向けて来やがった。ま、そうでなくっちゃあな。

「ギイイイ!!」

何かオークみたいなのが剣で斬りつけて来るが・・・

―バキンッ!―

『効かねえよ』

当然、へし折れる。そんな屑鉄程度では、このEVOオムニバースーツにダメージは与えられる訳がない。

『お前等は・・・ここで滅びろ』

俺は集団の中に突っ込み、殴る、蹴る、手刀で切り裂くなどを繰り返す。俺の手足が動く毎に、その衝撃波で近くにいただけの兵すら手足が面白いように吹っ飛んで一瞬で物言わぬ肉塊と化し、手足が無事な者も大きく吹き飛ばされて建物の壁に激突。大きな赤い染みになった。

『おっと、そう言えば弓兵や騎竜兵もいたな』

そしてまたボトルを取り出し、ドライバーに装填。ハンドルを回転する。

【機関砲!ライダーシステム!クリエイション!】

―テレテレテレレ♪ヴウンヴウン!ヴィチュン!―

【READY GO!】

そして俺は出現したドラムマガジン拳銃『ホークガトリンガー』のマガジンを手で撫でるように回す。

へテン!トウウエンテイ!サーテイ!フォーテイ!ファイファイ!シツクステイ!セブンテイ!エイテイ!ナインテイ!ワウン・ハンドレット!フルバレット!〜

【機関砲・フィニッシュ!Ciaoo!】

チャージが終わったガトリンガーを、空に向けて放つ。すると鷹の形をしたエネルギー弾が100発発射され、弓兵や上空の騎竜兵に殺到した。そして次々に着弾し、一発一発が鎧など初めから無かったかのように奴等を貫き、炸裂して轢き潰し、瞬く間に肉塊に変えていく。
「(ば、化け物だああ!!)」

「(逃げるな！おい戦え！)」

ありや、撤退か？まあ・・・

ーテ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！ー

【READY GO！】

『逃がさねえけどな』

レバーを回すと、俺の足下に正座早見版のようなエネルギーフィールドが発生する。そしてそこを中心に、前方の空間を歪曲・圧縮・崩壊させて・・・

【エボルテック・フィニッシュ！Ciao♪】

その空間崩壊の衝撃波を抑え込み、更に右足のミドルキックで無理矢理指向性を付け、足の延長線に向けて撃ち放った。

——着弾、衝撃波、轟音。

この攻撃はガオガイガーのソール11遊星主の1柱、ピーヴァータのパイルドライバーと同じような原理の攻撃だ。そんな色々可笑しな威力の攻撃の余波をまともに喰らった奴等は当然、チリさえ残す事も無くこの世から消滅。俺の宣言通り、完全に滅びた。

『つうか、人間を殺しといて何も感じないんだな。流石はエボルトだ』

さてと、この死体の山は毒を噴射して根刮ぎ掃除するとして・・・

これからどうしようか・・・

特地 in エボル！ブルルラアア！！

(エボルトサイド)

さて問題です！俺は今、どこにいるでしょうか！

カチカチカチカチカチカチカチ・ゴーン！ライダ〜タ〜イム！
なんちって

正解はく……こうこでえーす！……こここく！……ここでごぎいま〜
す！正解はですねえ、門の向こう側にあつたの森の、木の上に登つて
ました〜♪因みにあの門の前でスタンバつてた兵士共は半分逝ツテ
イーヨ！しましたよ〜♪

「……何やってんだろ俺……」

そう呟きながら、スルスルと木から降りる。因みに人間態だ。姿は
まんま石動惣一。にしても何であんな某珍獣ハンターみたいな事
を……しかも今は夜だから暗いし。疲れてんのかな……と。

『出て来いよ……見てんのは解つてるぜ？』

俺はこの国の言葉（&金尾ボイス）でさつきから覗き見してる趣味
悪いヤツに話し掛ける。言葉はさつき覚えた。ブラッド族の憑依能
力を使つて、チマチマー時間ぐらいかけてな。エボルトボディって便
利。

「あらあ？バレてたのかしらあ？」

そう言つて出て来たのは、バカでつかいハルバードを持った黒ゴス
ロリの少女だった。だが、雰囲気的にタダ者じゃねえな。

「俺は、生命体の気配には敏感でね。で？お前さんは何モンだ？おつ
と、俺は石動惣司だ。名乗らずに聴くのは、失礼だったな」

流石に石動惣一そのままじゃあな、と思つてもじつてみた。前世の
名前も思い出せないしな。

「あらあ、紳士的なのねえ。私はロウリイ・マーキュリー。暗黒の神工
ムロイの使徒をやっているわあ」

ほお、神官のもうちよい上つて所か。

「で、ロウリイ。お前さんは何モンだ？」

「あらあ？今言つたわよ？」

ふっ、よく言うぜ。

「とぼけんなよ。お前さんからは、未知のエネルギーが発せられている。こんなのは、人間が発する事は出来ない。つまり、お前さんは人間じゃあないってこった」

もしかして、俺と同じ人外か？

「…ふっ。スゴいわねえ、ソウジは。そうよお。私は元人間の『亜神』。まあ、神様になりかけみたいなモノねえ」
「なるほどな」

キリストやユダヤで言えば、セラフ以上神未満って所か。

「で、俺と戦いたいのか？」

「あら、そんな事も解るのお？」

当然だ。さつきから観察してみれば、右足を引いて前に出した左足は踵に、右足は爪先に体重を乗せているし、適度に緊張している。飛び退く事も、飛び込む事も瞬時に出来るベストな状態だ。

「まあな。それに、俺も退屈してた所だ」

【エボル・ドライバー！】

「暇潰しには丁度良い」

【コブラ！ライダーシステム！エヴォリューションツ！】

俺はロウリイに向き直り、装着したドライバーにボトルを装填。そして…

ーテ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！ー

【ARE YOU READY?】

「変身！」

【コオブラア…コオブラア！エボル・コオブラア…】

フツハツハツハツハツハツハツハツハ！！

ーガララララツガチンツ！ー

エボル・コブラフォームに変身した。スパークと共に靄が晴れ、コブラを横から見たような形をとったワインレッドの複眼が妖しく輝く。

『じゃあ…始めるのでしょうか、ロウリイ！』

そう言い、俺は駆け出すのだった。

(Noサイド)

—ガキンツッ!ギャリツッ!—

森の中で、鋭く重い金属音が鳴り響く。それと共に、木が薙ぎ倒され、空気が切り裂かれている。その元は言うまでもなく、エボルとロウリーの暇潰^戦しだ。いや、戦いというのは正確ではない。何故なら……

「ああ〜もう!何で当たらないし効かないのよお!!」

ロウリーは本気でハルバードを振るい、マジで首を取ろうとしているのだが、一方エボルは……

『オイオイどうした?この程度なのかよ亜神ってのは』

全て軽く避けたり流したりと、遊びにすらなっていないからだ。それもそのハズ、エボルはパンチ47t以上、キック53,7t以上のビルド・タンクタンクフォームで漸く何とか互角に戦えるのだ。幾らロウリーが化け物でも、たかが時速60〜80kmで振るわれたハルバード如きでは、エボルの顔を歪めるのは不可能と言っても良いだろう。

「くう〜っ!悔しい〜!」

『はあ〜……まだやるかい?』

地団駄を踏むロウリーと、もうウンザリという様子で溜め息を吐くエボル。正直もう少し楽しめると思っていたのだ。

「どうかあ、あなたまだ1回も攻撃してないわよお?どおし〜」

—パアンツ!!…ギリギリギリ……ドオン—

『……で?何か言ったか?』

「いえ、何も」

エボルはロウリーの言葉を遮るようなタイミングで、隣にあった木にゆる〜くパンチした。その結果どうなったか……拳が当たった部分が消えた。流石のロウリーもコレには顔をひきつらせる。因みに何故消えたかと言うと、エボルのグローブとシューズには触れた物質を自由自在に分解・再構築する機能が備わっていおり、それを使って触れた部分を分子レベルまで分解したのだ。

『つか、あと2〜3時間でもう夜明けだな〜』

「ただ戦ってただよコイツ等。」

『所で・・・あそこには盗賊っぽいのがいるな』

「そうねえ。それがどうしたの?」

『よし殺そう☆』

とんでもない事を言い始めた。しかも本家ボイスで。

「どっから出したのよお今の声え」

『ハハハ!良い声してんだろ?声の仕事は得意なんだよ♪』

知っているネタはドンドン使っていくスタイルのエボルである。

「でもお・・・まあ、丁度いいわねえ」

『やっぱりな』

(惣司サイド)

『やっぱ便利だな、この毒』

俺は殺した盗賊の死体をステイングヴァイパーで消滅させながら
呟く。にしても、本当躊躇無く人殺しが出来るようになった
なあ・・・ま、良いか。もう人間じゃねえし。

「せつかくだからあ、ヤつとけばあ?」

オイオイロウリイ、そりや無いだろ。死人だぜ?あ、死体愛好なん

て性癖もあつたつけ・・・

「改心する!これからは真面目に働くから!」

『・・・不様だなあ、お前』

本当に、本つ当に・・・気持ち悪い事この上無しだ。

「主神は善悪に関わらず、人殺しを罪だとは言わないわあ。それだけに、動機や覚悟は重要なのよお」

『それにお前、「これからは真面目に働く」つつつたな。つまり、仕事の選択肢はあつたんだ。それを蹴ってまで、殺される覚悟も無しに盗賊なんかになり下がった過去の己自身を恨みな』

殺す覚悟も死ぬ覚悟も無い癖に、殺しを生業とする盗賊なんかになるからこうなるんだよ。

「本当に見苦しい・・・殺しが嫌なら最悪、物乞いにでもなれば良かったんだわあ。男として、存在価値ナシ」

『おお恐w』

一瞬ゾワツとしちまったよ。

「あの3人のお墓、掘ってあげなさい」

「ほ、掘るって、道具が何も——」

「お母様から貰った、その両手があるでしょう？」

そして、男は手で地面を掘り始める。当然、そんな事をすれば爪も指の皮も剥がれてボロボロになるが、手が止まる度に俺が足下の石ころをステイングヴァイパーで消滅させて続行させる。そして夜が明けける頃……

「これで……いいか……?」

男は母、娘、父の墓を作り終えた。その手はもうズタボロで、恐らく感覚も無いだろう。そしてロウリイは、死んだ親子に祈っていた。さてと……

『じゃ、殺すか』

俺はステインヴァイパーを男に向けて伸ばす。

「え……ちよっ！言われたことやった……やりましたよ！」

『などと、意味不明な供述をしておりますが……』

ロウリイを見ると、彼女はイイ笑顔で親指を立て、そのまま首を掻き斬る仕草をした。という事は……

『逝って良い……ってさ』

「やめて！た、助けて！やめろオオ！」

——ドスツブシュウウウ——

男は、最期まで情け無い面のまま消滅した。そして俺は変身解除し、人間態に戻る。

「ふあああ……」

「あああ、雰囲気変わるわねえ」

「そおか？」

まあ良いか……ん？

「どうかしたあ？」

「……エンジン音？」

かなり遠いが、間違い無い。もう直ぐ目視出来るはず……!!
「あれは！」

俺が見た物は・・・自動車・・・それも、軍が使うような、ゴツい
オフロード車だった。

自衛隊

(惣司サイド)

「成る程なあ・・・」

完璧に、理解したぜ。取り敢えず、アイツ等が向かってる方向に先回りするか。

「ねえねえソウジく、あれ何なのお？」

ん、説明するか。

「あれは自動車つつつてな。門の向こう側に普及している乗り物さ。石油から精製したガソリンって油を燃やして・・・というか小規模の爆発を起こし続けて、その力で車輪を回して走るんだ。乗り心地も良いし、何より馬車よりずっと速い」

「セキユ？」

おっと、知らなかったか・・・

「ま、でき方は石炭とほぼ変わらねえな。太古の生物の死骸が、長い時間をかけて地下の圧力で液状の油に変化したものだ。ガソリンってのは、その中に含まれる油の一つでな。石油、というかそれを汲み上げただけの原油は、沸騰する温度の違う数種類の油が混ざった混合物だ。当然原油のままじゃ使えねえから、それを蒸留酒みたいに沸点・・・沸騰する温度別に分けて、それぞれの用途にあったモノを使うんだよ。向こうじゃ、シルクとかの代用品にもなってるぜ」

俺が歩きながら説明すると、ロウリイも付いて来て聞く。

「ふうくん。何となくわかったわあ。にしても、凄く詳しいのねえ」

一応、地球じゃ中学生ぐらいで習うんだがな・・・

「ま、俺が喰ってきた星にも、石油を扱う知的生命体があったのがあったからな。そんな時に覚えたんだよ」

「・・・え？もう一回言ってくれる？」

ん？聞こえなかったのか？

「人間以外にも石油使うヤツがいたから——」

「その前よお！」

え？ええくつと・・・

「俺が喰って来た星の中にも、って所か？」

「そうよお！星って、あの夜空の星でしょお!？」

うん、正解とも言えるし、間違いとも言えるな。

「知らなかったのか？ここも、宇宙つつう空間に浮かぶ星の一つだけ？」

「ええ？」

うん、まだちよつと難しかったか・・・

「また今度、ジツクリ教えてやるよ」

これは、恐らく万有引力から教えなきやいけねえからな。

「と、奴さん等も俺達に気付いたみたいだな」

車から2人降りて、こつちに歩いて来た。つか、あの格好は完全に自衛隊だなあ。

「あノーすいません。オ2人は・・・えくつと」

片言だなあ。まだなれてねえんだろ。

「へあゝ、日本語で大丈夫だぜ？」

「へえ!？」

まあ、そりや驚くわなあ。急に日本語話せば。

「へ取り敢えずゝあれだ。あんた等の車の所で話そうや。そうすりゃ、あんた等が気になつてるロウリイロウリイの事もわかるだろ」

チラツと見れば、ロウリイが啞然としている。ふふ、愉快愉快w

「へえく・・・では、来てください」

「へありがとな」ロウリイ、あの車ん所行くぞ」

「ええ？ソウジク、何話したのお？」

「あの車の所で話そうつったのさ」

そう言つて俺は自衛官2人に続いて歩く。その後ろにロウリイも続いた。

「つああゝ！偶には、吹きっ晒しつても悪く無いな♪」

俺は今、車の屋根の上に座っている。風が気持ち良いねえ。因みに、ロウリイは最前車の助手席に無理矢理乗り込んだ。俺が乗つてるのは、そこから3台後ろの車だ。

「・・・」

—コンコンコン—

俺は窓ガラスをノックする。どうやら——

「どうしました?」

「全車両に伝達、戦闘準備だ」

——馬鹿デカい、招かれざるお客が来たらしい。

「っ……取り敢えず、警戒するよう呼び掛けます」

「ああ、ありがとよ」

乗ってた自衛官も、俺の真面目な顔で察してくれたようだ。

「さて、と……」

【エボル・ドライバー!】

俺が重い腰を上げドライバーを装着した、その時だった。

「ほお……」

デカイドラゴンが、俺達に影を落としたのは……

「か、各車両!戦闘配備!」

ようやく、判断材料が揃ったらしい。

「オイ!あのドラゴンは俺が倒す。お前等は逃げに撤してろ!」

「え?!ちよ、まっ」

俺は車から飛び降り、ドラゴンの元に駆け出した。

(Noサイド)

——混乱——

今の状態を表すには、この一言で十分だった。当然だろう。大行列のすぐ近くに、天災とも言われる炎龍が現れたのだから。だが……「よっ」

この男、石動惣司は別だった。炎龍に駆け寄り、挙げ句の果てには挨拶さえする始末だ。

「グルルル……」

炎龍も混乱していた。今まで人間は、自分を見れば逃げ惑い、最後は自分に喰われるだけの存在だった。それが今、逆に自分から近付いて来たのだ。当然といえば当然だろう。

「悪いが、お前さんは死ぬべきだ。聞いた所じゃ、喰わねえ奴まで喜んで焼き殺したんだって?頂けねえなあ」

そう言い、惣司は黒と青のエボルボトル構える。

「今こそ——」

『——審判の時だ』

「グッ!？」

惣司は声を変え、炎龍を威圧する。そして炎龍の方は、その余りの威圧感に思わず後ずさった。

【ドラゴンーライダーシステムーエヴォリューションツー!】

炎龍は、これまで圧倒的な負けというものを知らなかった。故に、その威圧感の正体に気付かなかった。そして炎龍は、惣司に向かって爪を振るう。

——テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン! ヴイチュン!——

【ARE YOU READY?】

『変身!』

【ドラゴンードラゴン! エボル・ドラゴオオオンツ!!】

その行動が——

【フツハツハツハツハツハツハ!】

——ガララララツ! ガチンツ!——

——自身の死因になることにも、気付かないまま……

(惣司サイド)

俺はドラゴンエボルボトルを使い、エボル・ドラゴンフォームに変身した。そして振るわれた爪を……

『ムンツ!』

両腕で受け止め、

『おおらよつとオー!』

軽々と弾き返す。さて、遅れちゃったが……

『エボル・フェーズ2、完了だ。今日が、お前の命日だぜ?』

俺は宣言する。コイツの運命^死を。

「グオオオオオオツ!!」

と、ブレスか。ま、この程度の炎じゃ……

『俺を苦しめる事は出来んぞ?』

こんなのよりも、太陽間近で浴びる文字通りの直射日光の方がよっ

ほど熱いわ……ん？何でこんな事知ってるんだ？俺……

『取り敢えず……被害は最小限に、だな』

幸いと言うべきか、俺だけに意識を割いてるから、マシンガンで撃ってる自衛隊に見向きもしねえ。俺は収納空間に手をつ込み、ある物を取り出す。それは……

【トランスチームガン！】

トランスチームガンだ。もしかしてと思って車の上で確認したら、やっぱり入ってた。

『ドラゴン君！ミサイルは、お好きかな？』

【フル・ボトル！スチーム・アタック！】

俺はトランスチームガンにロケットボトルを装填し、この赤蜥蜴に向かって撃ち放つ。するとロケットの形をしたエネルギー弾は真っ直ぐ蜥蜴に……と思いきや……

——シユパン！ドドドドドドドツ！——

「ギャアアアアアアツ！！！」

『……マイクロミサイルなんて、俺聞いてない』

何と途中で100発まで分解し、その全てがホーミング弾として蜥蜴の左前足に命中、肩から先を千切り飛ばしたのだ。

「グアアアアアア！！」

すると蜥蜴野郎がなんか明後日の方向向いて……

——ブワアアアア！——

「！八つ当たりかよ！？」

何の関係もない難民の方に火炎放射しやがった！あくあ、燃えちまってるよ……やっぱり、コイツは気に入らねえな！

——テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！——

【READY GO!!】

俺は勢い良くハンドルを回し、身体を蒼炎で包み込む。そして蒼い龍のエネルギー体を背に……

『死ぬ』

【エボルテック・フィニッシュユ!!】

糞蜥蜴にライダーキックを叩き込んだ。合わせて放たれる火炎放

射で、糞蜥蜴の身体を内側から焼き焦がし、溶かしていく。

【Ciao♪】

最後に糞蜥蜴の身体を貫通し、その背後に555の如く着地した。そして右手でサムズアップして右に伸ばし・・・

『さあ、地獄を楽しみなア！』

それをひっくり返す。そのタイミングで、糞蜥蜴の死骸は轟音と共に崩れ落ちた。

教育

(惣司サイド)

『さあ、地獄を楽しみな』

俺は崩れ落ちた糞蜥蜴にサムズダウンし、決め台詞を言う。フン、あんなのは仮面ライダーや中の上クラス以上のライダー怪人なら簡単に殺せたな。

「グアアアアアア!!」

『んなあっ!?!』

コイツ、腹ぶち抜かれて内側から内臓焼かれたつてのに、まだ生きてやがったのか!?

『くそつたれ!なんて生命力だ!だったら今度こそ止めを——』

俺がハンドルのグリップに手を伸ばしたその時……

—ドシユン!ボドゴオオオンツ!!—

『……』

糞蜥蜴の頭が爆ぜた。

『……成る程、使い捨て式無反動対戦車榴弾砲か。確か名前は……パンツアーフアウスト、だったな』

何故かスラスラ出て来やがった。何なの?この身体……
『ま、良いか。大方、この身体の記憶か何かだろ』

取り敢えず、アレを撃った奴にや感謝だな。サムズアップしとこう。

『さて……糞蜥蜴の鱗や爪……棄てるには惜しいな』

俺はおもむろに蜥蜴の死骸に歩み寄り、鱗を一枚引き剥がす。ん、ソコソコ硬いな。こりゃあ使えそうだな♪

『丁度良いぜ』

【ビート・クローザー!】

俺は喚び出したビートクローザーを持ち、両手を平行に立てて構える。

『これより、炎龍の解体作業を開始する』

そして俺は鼻歌を歌いながら、炎龍の皮を切り裂き始めるのだっ

た。

(原作主人公サイド)

「な、何やってんだ・・・?」

俺は伊丹耀司。趣味に生きる為に働く、自他共に認めるオタク自衛官だ。で、今何に呆れてるかと言うと・・・

『BLACK・HOLE
フゥフゥフゥン ♪ フツフゥフゥフゥン ♪ フフフゥン ♪
終馬 ♪ 此処が』

何かノリノリで鼻歌を歌いながら手に持った剣でザツクザツクとドラゴンを解体している、目の前の特撮ヒーローモドキだ。呼び戻して来いと栗林に車から叩き出された。トホホ(泣)

『見て分からねえか? 解体してんだよ。分析した結果、このドラゴンの鱗や爪なんかはかなり良い素材らしいからな。殺した以上、出来る限り有効活用してやるのが礼儀ってモンだろ?』

「うへえ」

そう言ってる内に、コイツは粗方肉を削ぎ終わったらしい。さつきから何か空間の歪みみたいな所に肉片を放り込んでいる。何あれアイテムボックス?

『これは異空間格納庫、名前は未定だ。この中じゃ時間の概念が無いから、どんなものでも腐らないらしい。生きたモンは知らんがな』

「エスパーかよ!」

『お前さんがそんだけこつちを見てりや、何考えてるかぐらい解る』

アンタ一回も俺に視線向けてないんですがそれは・・・

「あ、そう言えばその格納庫の名前、まだ決まってないって言ったよな」

『ああ、どうかしたか?』

どんなものでも入るなら・・・

「①四次元ポケット、②王の財宝、③アイテムボックス。俺が挙げられる候補はこれくらいだが・・・どうだ?」

『よし、詰め込み完了。うくん・・・じゃ②をもじって、アーマリーオブバンドラ
バンドラの武器庫にするか(放り込む度に見たが、まだ何か入ってる・・・)』

「おお、厳つい名前だな・・・」

『と、そうだ。ホレ』

「おっと」

コイツが急に投げてきた物を、俺は何とかキャッチする。これって・・・

『それは、炎龍の鱗だ。ざっと調べたが、モース硬度は9なのに対し、同程度の硬度であるタングステンに比べて質量はその七分の一だ。オマケに同族同士のケンカに耐えられるように耐熱性能も抜群。いやはや恐ろしいねえ』

お前が言うなよ。それを前に一方的に無双したのは何処の何奴だ？

『ま、それはお前さん等の好きにしな』

「あはは・・・そうだ！俺まだお前の名前聞いてないや。俺は伊丹耀司だ」

危ね〜聞き逃す所だった。

『ん、そう言やあ言つてなかったつけか。俺の名は、仮面ライダーエボル。進EVOLUTION化・発展から取った、エボルだ』

何か無限進化しそう（小並感）

「さてと、待たせちまったな。作業終わったから行こうや」

そう言つてコイツは人間に人間!?

「あ、どつかで会ったと思つたら、俺が女の子押し付けた男、アレお前さんか」

「今更!？」

そんな事をだべりながら、俺とエボルは車に戻った。

「あ、人間態では石動惣司って呼んでくれ」

「先に言えよー!」

訂正。石動と車に戻った。

(惣司サイド)

さて、また車の上で吹きっ晒しだ。まあこれが落ち着くんだがな。ではでは・・・

「さあ、魔改造を始めようか」

俺がまず取り出したのはビートクローザー。

「こいつの刃に……」

—ヴオオオオン—

手から変質エネルギーのモヤモヤを放出し、まずは刃を変質させる。そして同時に加熱つと……

「うへえ、摂氏10000度でも融解しねえな。こりやたまげた」
で、その白熱化した刃に……

「鱗を溶かし込む！」

おお、ドンドン定着していくぞ〜♪やっぱり相性は良いらしいな。

「仕上げに……」

「フル・ボトル！ スチームアタック！」

俺はスチームガンを取り出し、冷蔵庫ボトルで液体窒素を作つてぶっかける。便利すぎだろこれ……

「よっ！」

—ドモンツ—

すると、ものすごい煙が出た。まあ当たり前だよなあ。

「ちよ！ 何してるんですか！」

おっと、運転手さんに怒られちゃった。

「いや〜スマンスマン。ちよつと剣を鍛えててな」

と言うか剣じゃなくて刀になったな。刃も真つ赤だし……

「エボルクローザー……だな。これは」

シルエットはもう完全に日本刀だ。刃はツルツルテカテカ、まるで水で濡れているみたいだ。なかなかの業物を産み出してしまったかも知れない。

「残りは……そうだ！ もしかしたら^{アーマリーオブバンドラ}パンドラの武器庫の中に……あつた！」

俺が取り出したのは、青色ベースに黄色、赤も所々入った、掌サイズのドラゴンロボット……言うまでもなく、クローズドラゴンだ。

「コイツに俺の遺伝子と蜥蜴野郎の鱗を溶かし込めば……」

ん、何か手応えアリ……

—キイイイン！ ヴオアン！—

来た！来た来た来た来た！

「遂に、覚醒したか!!」

クローズドラゴンは紅蓮の光とエネルギーを放出し、変質を始める。

「何してるんですかあなたさつきから!」

「ゴメンよく!これで最後だ!」

そして光が収まり、その中から進化したクローズドラゴンが姿を現す。カラーリングがワインレッドベースの金、蒼に変わっている。その名は――

「グレートクローズドラゴン!これからよろしくな!」

『ギョルルギヤ〜オ♪』

可 愛 い 。 癒 し 担 当 だ な コ レ は 。 間 違 い 無 い 。

「そろそろ着きますよ〜」

「おおそうか。分かった」

運転手さんの言う通り、何か仮設拠点みたいなのが見えてきた。

「さて、どうなるかな〜♪」

その後、伊丹は難民を勝手に受け入れた事でちよいとゴタゴタになっちまったらしい。で、俺は難民と一緒に住民登録だ。お、ロウリイが終わったから次俺だな。

「俺は外宇宙来知的生命体、エボルトだ。人間態では石動惣司で通してる」

「ハア?」

栗髪の小柄な女性自衛官が『何アホなこと言ってんだコイツ』って顔をする。ま、そりやそうだよな。だったら・・・

『証拠も見せようか。ほら』

俺は声を変え、右手をアメーバ状に変形させる。

「っ!」

おお、良い感じに驚いてるな♪

「ついでに、出血大サービスだ。行くぜ♥」

【エボル・ドライバー!】

俺はドライバーを装着し、エボルボトルを取り出して構える。

「コブラ！ライダーシステム！エヴォリューションッ！」

そしてボトルを装填して、ハンドルを回転。腕を胸の前でクロスするように構え……

——テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！——

「ARE YOU READY？」

『変……身ッ！』

「コブラア……コオブラア！エボル・コブラア〜！！フツハツハツハツハツハツハ！」

——ガラララララッガチンッ！——

コブラフォームに変身した。今回は構えの時に目を閉じ、『変身』の『身』の所で目をカッと見開く感じだ。

『エボル・フェーズ1』

そしてビルドの決めポーズで締める。

「……すっごい」

『H A H A H A！ありがとよ！』

『シユツ』と響鬼さんの敬礼ポーズをする。と言うか、最近ライダーネタを使っても違和感君が職務放棄しまくってくれちゃってる件について。取り敢えず変身解除っつと。

「あの……今のは、何なのだろうか」

「ん、興味あるのかい？お嬢ちゃん」

さつき15歳と言っていた、水色の髪のお嬢ちゃんが話しかけてくる。名前は確か……

「え〜つと、レレイ・ラ・レレーナだったな」

「そう。賢者を目指し志す者として、理解出来ない物を放っておけない」

ほう、随分と知的好奇心に溢れた子だな……良い事考えた♥

「よし、なら俺の事も教えてやる。だが、その前に自衛隊の使う車や銃武器の事を先に教えてあげよう」

「！本当だ!？」

おうおう目がキラッキラしてるな。こりやあ教え甲斐がありそう

だ♪

(レイサイド)

「と言う風に、ガソリンと圧縮空気がピストンの中で爆発を起こして・・・」

凄い。この人の知識は、今まで分からなかった部分にピッタリとはまり込む。

「するとタイヤの軸が回って、車が走る訳だ。解ったか？」

「凄く有意義だった。もっと教えて欲しい」

知れば知る程、次々に知りたい事が増えていく。

「ははは、レイは本当に可愛い生徒だ！なら、もう一つ良いものを見せてやろう」

そう言つてソウジは、また腰にあのへエボルドライバーというベルトを着けた。またあの鎧姿になる？

「じゃ、行くぜ！」

【ウィザード！ライダーシステム！クリエイション！】

！ソウジの掌に術式が！しかも何重にも重なって・・・逆さまな円錐形になっている？

「これは、一つ一つがさつき言った火薬と同じ現象を起こす事が出来る術式だ。そして、この先端にこうやって起爆すれば・・・」

ーテ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！ー

【READY GO！ウィザード・フィニッシュ！】

ードガガガゴゴオオオオオッ！！！！

【Ciao♪】

・・・見上げる程の火柱が現れた。轟音と共に出現したそれは空を裂き、やがて消えていった。

「今のが、円錐状起爆だ。円錐状に成形した炸薬の頂点から起爆する事で、爆豪によって生じたエネルギーが全て円錐の底面側に向かう。その結果、アホほど強い穿孔力が生じるって寸法だ。これをモンロー効果と言う」

「モンロー・・・効果・・・」

これを応用出来れば、全く新しい魔法を生み出せる！

「ただ爆発させれば、敵が浴びるエネルギーは爆豪全体のほんの一部だ。だが、これならエネルギーの九割九分を敵に伝える事が出来るんだぜ♪」

嬉しそうに言うソウジ。

「そしてコレの派生系だが、この爆裂円錐を丈夫な金属で覆って、円錐の底面側を薄い金属板で塞ぐ。そして起爆すると、その穿孔力と圧力で前方を覆っていた金属板がまるで液体のように振る舞うようになるんだ。例え鉄であってもな」

「鉄が、液体のように・・・」

俄には信じられない。が、見た訳でも無いので否定も出来ない。

「ああ。そしてこれをノイマン効果と言う。この液体として振る舞っている金属は、どんな装甲でも・・・例えば、炎龍の鱗だろうと簡単に貫く事が出来るんだ。ま、その分調合なんかが難しいけどな」

・・・ならば、それを私の魔法に置き換えれば、固有魔法のような物に・・・

「はい、今日の授業はここまでだ。モンロー効果やノイマン効果の実験がしたい時には俺に言うんだぞ？ありや下手すれば跡形も無くフツ飛んじまうからな。それと・・・」

ソウジは私を振り返った。どうしたんだろう？

「俺、近々喫茶店を開きたいんだ。だから俺の事は、出来れば『マスター』って呼んでくれ」

「キツサテン？」

開くというの・・・

「ま、カンタンな料理やお茶を飲み食いする店だよ」

「・・・分かった、マスター」

「お、嬉しいね♪それじゃ、チャオ♪」

マスターはヒラヒラと手を振って歩いて行った・・・喫茶店、か。店が出来たら、行ってみよう」

そう思いながら、私は自衛隊の施設を見て回るのだった。

その夜、マスターの事については丸ごと聞き忘れた事を思い出し、ベッドの中で少し悔しくなった。

イタリカ

(惣司サイド)

あの後、俺達は無事自衛隊の拠点に住む許可が下りた。で、レレイは日本語を勉強中。先生役は俺だ。レレイの吸収が良すぎて授業が予定の時間の半分で終わるなんて事はザラだったから、ついでに科学や生物学、物理学なんかもちよくちよく教えている。因みに、たまくにロウリイも入ってきて一緒に俺の授業を聞いたりしてる。万有引力と、此処が惑星というモノだと言うことは理解出来たらしい。順調に教育が進んで何よりだ。目下の問題は・・・

「さて、どうしたモンか・・・コーヒー」

そう、コーヒーだ。喫茶店を開くのは決めている。料理もそこそこ美味しく出来るつもりだ。だが、コーヒーはまだ確かめようがない。万が一、原点エボルトみたいなゲロ不味コーヒーだったら・・・

「取り敢えず、インスタントコーヒーから調達してみるか」

「で、これにお湯を注げば簡単に飲み物になるんだ」

「興味深い・・・」

自衛隊の皆から貰って回ってたら、途中からレレイも付いて来た。まあ好奇心旺盛なのは可愛いな♪

「じゃ、始めますか!」

俺は仮設住宅の自分の部屋に戻り、テーブルの上に貰い物を広げた。インスタントコーヒー以外にも、カフェオレやココアなんかも貰えたぜ。よっしゃラッキー♪

「じゃ、ココアから行ってみるか」

手鍋でミルクを沸かし、ココアパウダーの入ったマグカップに注ぎ込む。後は玉を潰して混ぜれば・・・

「ほれ、出来たぞ。飲んでみる」

そう言っただけで差し出されたマグカップを受け取ったレレイと共に、俺は試飲を始めた。

(5分後)

「・・・何で・・・コーヒーだけ・・・」

結論から言おう。コーヒー以外は普通だった。だが・・・コーヒーだけは・・・

「これは・・・恐らく、やりようによっては兵器に転用できるレベル」
この有様だ。つか流石にひでえよレイ。顔真つ青にして机に突っ伏してるから尚更刺さる。

「いやー俺は諦めない！挑戦し続ければ、必ず・・・必ず何時か、美味くなるはずだ！」

俺はガタツと立ち上がり、また湯を沸かす。

「マスター、頑張って」

おお、応援してくれるのかレイ・・・

「あんな物を出されたら・・・最悪、死人が出る」

「ウワアアアアア（OMO）!?!」

さ、SANが・・・削れた・・・神話生物、見た時は・・・何ともなかったのに・・・

「ふ・・・ッヘッヘッヘ・・・やつちやるやないかああああッ!!」

（3時間後）

「今度・・・こそ・・・」

俺は、もうこの液体を摂取したくないと訴え拒絶する身体に鞭打つて、何杯目か判らないコーヒーを注いだマグカップを掴む。レイは、自衛隊の炊事担当の所に食材の名前なんかを教わりに行った。此処には、もう俺しかない。早く、このコーヒーを吐きながら続ける悲しいマラソンを終わらせねば・・・さつきから不味すぎて、SANやら意識やら色々と吹っ飛び掛けてやがるからな。これ以上長引けば、最悪発狂するなんて事もあり得る・・・何だよコーヒーで発狂つて・・・

「・・・匂いは・・・問題無い・・・問題は・・・味だ・・・」

俺は覚悟を決め、震える手で握ったマグカップの中の液体を口に流し込み、咀嚼する。頼む・・・今度こそ・・・!!

「・・・美味・・・い?」

もう一口・・・やつぱり美味え!

「やつ……た……！やったツツ！遂にやったぞオ!!ヤツタアアアツ!!フオオオオオウツツ!!夜は焼き肉ツシヨオオ!!」

思わず焼き肉ポーズをしよう。その後、10分ほどは興奮が冷めなかったのは言うまでも無い。

「……ふあ？」

……どうやら、はしやぎ疲れて寝落ちしたみたいだ。まあ、問題無い。

「……さてと、これでNascita開店に近付いたな！」

と、そう言えばレイ何処だろう……

「……外行るか」

そう言っただけは仮設住宅から外に出た。

(10分後)

「お、レイ〜！何やってんだ〜？」

レイがいたのは、拠点の外の平原だった。何か翼竜の死骸仲間と一緒に集まってるな。

「ん、マスター。今、翼竜の鱗や爪を採っている。竜の素材は高値で売れるから」

「そうか、成る程……」

確かに、ワイバーンでもタダの人間にとつては脅威だからな。日本にはほぼ需要も無いから、自由に採らせてるんだろう。

「カトーお師匠の古い友人が店を出しているイタリカに売りに行く事になった」

「ほお〜」

で、その護衛を自衛隊に頼むのか。自衛隊を敵じゃないとアピール出来て、一石二鳥だな♪

「じゃ、そんな時にゃ呼んでくれ。適当に時間潰してるからよ」

「ん、分かった」

そう言っただけ俺達は別れ、俺は拠点に戻る。さて、面白いことになりそうな予感♥

(2時間後)

で、今俺は自衛隊のジープと併走している。バイクで。

「いや〜風が気持ちいいね〜♪」

これは、名付けて『マシンエヴォリユダー』。バイクとライダーシステムのクリエイションで作った、俺の専用バイクだ。見た目はディアンな感じ。しかも、エボルドライバーみたいに金や青の歯車や天空儀の装飾も着いてて、控え目に言って超カッコいい。

『なあマスター、今度そのバイク乗せてくれない？カッコいいし』

と、俺のインカムから伊丹の声が聞こえる。これは着けとけって言われて渡された物だ。

「そりゃ良いが・・・結構な暴れ馬だぜ？コイツ・・・」

いやマジで、馬力が馬鹿みたいに強い。俺の力で漸く抑え込めてるようなもんだ。

「・・・オイ伊丹、目的地と思わしき場所から立ち上る黒煙を目視で確認。どうぞ」

『ええ？ど〜いうことなの〜？』

『畑焼く煙、違う。季節じゃない。〈鍵〉？でも大き過ぎ・・・』

「何か、文字通り焦臭エな・・・後レイ、鍵じゃなくて〈火事〉な」

しかも、なんか城壁の上にデツカいバリスタ付いてるし・・・つか矢も装填済みでこつちに照準合わせてんじゃねえか・・・あ、流石にジープ止めたか。じゃ、俺も伊丹の乗ってる車の横に止めてつと。

「明らかに、戦闘後か何かだな。どうする？退くなら退くで良いが、ここで敵じゃないってアピールすれば、後々便利かもよ？」

「う〜ん、どうするかなあ・・・熱湯攻撃とかマジ勘弁なんだけど・・・」
「マスターの言う通り、ここで敵でないと伝えられれば良い。イタミ達は待っていて欲しい。私が話をつける。危険だけど、私は恩人であるイタミ達の評判を落とすたくない」

うひゃ〜度胸あるな〜レイは。だったら・・・

「俺も行こう。エボルの噂は有名な筈だぜ。目の前で変身すりゃ、攻撃したらどれだけヤバいか解るだろ」

この感じだと、面白いもの好きなロウリイも着いて行くな。なら、

エムロイの使徒と俺が並べば、かなりの存在感が出るはずだ。

「・・・分かった。私も行く。待つてね、今矢除けの加護を・・・」
テユカも来てくれるらしい。テユカが呪文を詠唱すると、何かエルフの魔法みたいなので俺達に風が纏わり着いた。ま、俺はそんなの無くてバリスタの矢なんぞEVOオムニバースーツやらで全く通らんだろうが・・・

「・・・ああもう！俺も行く！女の子にばつかり危険背負わせられるか！止めるなよ！」

「誰も行くなど言つてませんわ」

ハッハッハw伊丹、ドンマイ。

さて、行きますか。

(ピニヤサイド)

「誰か出て来たぞーッ！」

見張りの言葉に、妾は異界の荷車を見る。

「魔導師・・・しかもあの杖、リンドン派の正魔導師だ。それに金髪蒼眼のエルフ・・・何だあの服は？そして、紅い鉄の馬に乗っていた男・・・見た事も無い服だな。上は黒で、下は茶色・・・!?!」

次に目に飛び込んできたのは、荷車から出て来た身の丈を大きく越すハルバードを持った少女・・・

「ロウリイ・マーキユリー!?!」

「あれが噂の、死神ロウリイですか?」

「ああ。以前、国の祭事を見た」

妾は隣のグレイに返す。くつ、まさかあの方まで・・・

「このミュイ様と、大して変わりませんな」

「あれでも齡九百を超える文字通り一騎当千の化け物だぞ！」

あの面子では、もし敵ならば・・・

ードラゴン！ライダー！システム！エヴオリユーションッ！ー

!?!何の音だ!?!あの鉄の馬の男が腰に何か当てて・・・!!何だ、あの靄に包まれ、金の輪が付いた・・・壁?!

ードラゴン！ドラゴン!!エボル・ドラゴオオオン!!フツハッハッハッハッハッハ!!ー

!?あ、あれは・・・あの、金と赤の鎧・・・あの、蒼く大きな目・・・間違い無い・・・

「・・・エボル・・・」

噂に聞いた、炎龍の胸を易々と蹴り貫いたと言う謎の巫人！その姿ソツクリでは無いか！

「・・・し、しかし、エムロイの使徒が盗賊なんぞに加わりますかな？」

「あの方達ならやりかねんだ。あの恐ろしく気まぐれな神の一端たる巫神ならばな・・・」

「は？」

グレイがワケが解らぬと言いた気な顔をする。まあ致し方ないか。

「巫神たる使徒を含め、神とは人間には理解出来ぬモノなのだ。どれだけ偉い神官だろうとな。我々は信仰や崇拜という詐欺にかかつているかも知れない」

「し、小官は何も聞きませんでした」

（くっ、どうする！考えるピニャ！時間はない！決断しろ！）

「・・・ハアッ！」

妾は腹を括り、門の前に降りて門に手をかける。

「姫?!」

驚くグレイを無視し、門を外して門に手を着ける。あの怪物を2人も相手にすればこの町は少なくとも地図からは消えるだろう。ならばっ！

「（強引に仲間にするまでだっ!!）良く来てくれた!!」ガンツ！

そう言つて私は勢い良く門を押し開け・・・ん？殿打音ガンツ？

「「・・・」」

『ぶっ・・・クハハッw』

開け放たれた門の奥に見えたのは、口元に手を当てて笑うエボルト、黙つて妾の足元を見つめる女3人・・・そして妾も見てみれば・・・

「・・・あゝあゝっ・・・」

唸りながら仰向けに倒れる、緑の人・・・え？ま、まさか・・・

「・・・妾？」

「「うん」」

『クハハハハハハ W W!』

肯定する3人と、爆笑するエボル・・・うん。

さて、どうしたものかな (思考停止)

イタリカ・2

「何考えてるのよアナター！」

テユカが倒れている伊丹に水をぶっかけながらピニヤに怒鳴る。そしてその周りには、ニヤニヤしながら伊丹を膝枕するロウリイ、無表情だが呆れているレレイ、そして腹を抱えて悶えるエボル・・・というかなりカオスな空間が出来上がっていた。主にエボルのせい。エボルが厳ついドラゴンフォームに変身しながら大笑いしていることも、そのカオスさに一層拍車を掛けている。

「大変申し訳無いつー！」

腰を折って謝罪するピニヤ。顔は蒼白になっており、危機感に溢れていた。まあ文字通り一騎当千の化け物と、炎龍を簡単に屠つたと言われる神の如き戦士の仲間に対して、押し開けた城門でど突いて気絶させる、などという大ポカでは済まない事をやらかしてしまえば当然だが。

「フハハツwいや、大丈夫さ。思いの外頑丈だからな、コイツ」

そう言って手をピラピラと振るエボル。心配はないらしい。

「んん・・・わっ」

「あああ、気が付いたようねえ」

と、そうする間に目が覚めたようだ。

『よっ、おはようさん。一応、お仲間には俺のインカムで連絡入れたいぞ。へおい、伊丹の目え覚めたぜ』

「ああ、ありがとよエボル。へすまん、ちよつと気絶してた。これから現状を確認するから、待機しててくれ」

『へ了解』

手早くトランシーバーで連絡を入れる伊丹。そして打ち付けた顎をさすりながら誰かに現状説明を求めるが・・・

「妾・・・？」

全員が一斉にピニヤの方を向く。どうやら、満場一致のようだ。

(惣司サイド)

『成る程？つまり、首輪が外れた余所の犬共に喰い殺されそうになっ

てるのか』

一人納得しながら、俺はレレイに自衛隊が着けている暗視スコープの簡単な仕組みを教える。

「ま、そういう事だな。にしても、斥候来てるなく。後ろに本隊もいるし……」

『数は……663人って所か』

「うへえよく見えるな……で、狙いはこの南門かな？」

『今の所はそう見えるが……気紛れで幾らでも軌道変更が効く相手さんの方が有利だな。それに、エボルや自衛隊俺が下がれば士気にも大きく響く。だから退けねえな。ま、戦えば戦うで、俺らに戦いを挑んで滅びるより、お友達になった方が良いと判るだろ』

「お前、俺の考えることを悉く当ててくるよな」

壁にもたれ掛かる俺に対して、肩を竦める伊丹。なんかメットにスコープ着けんの難儀してるなく。と、思ったらロウリイがメット持つてくれて着けられたようだ。

「ま、単純に……この住人を護りたいってのもあるがな」

『元々、自衛隊ってのはそういうモンだしな。じゃ、頑張れよヒーロー君。俺は念の為、守りの薄い東門に回つとくぜ。お前らが居れば、士気も大丈夫だろうしな』

【エボル・コブラア〜！フツハツハツハツハツハツハ！】

そう言っただ俺はエボル・コブラに変身し、コブラみたいなスライディング移動で東門に向かう。これ名前何てつけたけなあく。と、8秒たつかどうかで東門に到着。

「え、エボル様！」

『オイオイ、様付けされるほど偉くはねえぞ？それと、念の為俺はこっちに就く。南門は緑の人で足りるし、俺はあそこまで行くのに10数えるかどうかだからな。一緒に頑張ろうぜ♪』

俺は見張りと肩を組み、胸甲をカンカンツと叩く。これで、此方も恐らく大丈夫だろう。さて……

『利用させてもらうぜ、下等生物盗賊共』

恐らく今、俺は原点エボルトのような悪い顔をしているのだろう。

ああ、夜が楽しみだ♪

(6時間後)

『お疲れさん。ほれ、ココア飲むかい?』

「おお、有り難い」

俺はウトウトしている見張りにココアを差し入れする。チョコには疲労回復効果があるからな。身体も温まるし、丁度良いだろ……!

『お前らア!伏セルオ!』

【亀!ライダーシステム!クリエイション!】

俺が叫ぶと全員が壁の下に伏せた。聞き分けの良い子は大好きだ

♪

—テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン!ヴィチュン!—

【READY GO!亀・フィニッシュ!Ciao♪】

そして俺は大気圏突入時に使ったバリアを最大出力で展開し、半径15mの超巨大ゴウラシルデュオを創った。そして次の瞬間……

—カンツ!カコン!コカガガガガガガガッ!—

降り始める矢の豪雨。だがそれらはゴウラシルデュオに弾かれ、此方の兵士を穿つ事は無い。持つて良かつたぜ、タートルボトル!『ピニャに伝令!敵さんらはこっちに来た!俺が食い止めるから早くしろ!』

「わ、分かった!」

俺の命令に直ぐに従ってくる兵士。ありがとよ!お前ら大好きだぜ!

『俺が先陣を切る!お前らは弩で援護しろ!俺にその程度の攻撃は通らんから存分に撃てよ!』

簡潔に伝えた俺は城壁から飛び降り、まず奴等の持つ梯子を粉碎、その衝撃波で周りの盗賊を肉塊に変える。そして敵の中心に飛び込めば、俺がどんな動きをしても骨が砕け、人が空を飛ぶ。さて、いい加減温まってきたし……

『さあ、実験を始めようか』

俺はコブラエボルボトルをドライバーから引き抜き、そこにウサギ

の造形があるエボルボトル——ラビットエボルボトルを装填する。

【ラビット！ライダーシステム！エヴォリューション！】

そして俺はハンドルを回し、ボトルの中の未知の物質を抽出。

——テ〜レテテレ〜レ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！——

【ARE YOU READY?】

『エボル・アップ！』

そして、出現したEVBHライダーが俺を挟み込み、リングが高速回転、変身アクション中に攻撃しようとした不粋な輩の武器を弾く。そして……

【ラビット！ラビットオ！エボル・ラビットオ〜！フツハツハツハツハツハツハ！！】

——ガラララララララッガチンツ！——

胸のアーミリアクターが回転、固定し、ウサギの横顔を象った紅い複眼がキラリと輝いた。これで……

『エボル・フェーズ3、完了だア』

変身完了した俺は、右手の人指し指と中指で複眼をシュツと撫でる。

「やれ！畳み掛ける！」

と、何か数で押しや勝てると思ったのか盗賊共が一斉に攻め立ててきた。無駄な事を……

「当たらなければ、どうという事はない」

俺はその攻撃を全て避ける。この程度、速度と脚力に振ったラビットエボルにとつちやただの静止画だ。

『さて、お前らには役に立って貰うぜ？』

そう言っただ俺が^{アーマリーオブパンドラ}パンドラの武器庫から10本のボトルを取り出した。それは上下の蓋が茶色で、容器は紫色。エレメントが彫り込まれた部分とキャップは銀色のフルボトル……ロストボトルだ。

「おりやくッ！」

丁度突っ込んでくる馬鹿が居たので、何度かロストボトルを振って……

【キャッスル！】

ソイツの腕に突き立てた。すると男は呻きながら黒っぽい霧に包まれ……

「ウガアアアアツ!?」

―ブシユウウウ―

消滅した。

『チツ、一瞬たりともハードスマッシュにならなかったか。まあ良い。ブラックボトルになったしな』

そう言っただけは、男が消滅した所に落ちているロストボトルを拾い上げる。うん、完璧に真つ黒だな。じゃ、この調子で……

「クワガタ!」

「フクロウ!」

「シマウマ!」

「バアツト!」

「コオブラ!」

「ハンマー!」

「ハサミ!」

「CD!」

「スパナ!」

つと、あつと言う間に全部ぶっさして消滅!

『いや、これどうやって創ろうか唸ってた所なんだよ。ありがとな♪俺の為に死んでくれて』

そしてちやっちやとブラックボトルを回収し、後ろを振り向く。

『ロウリイ! 獲物は残しといたぜ! 選手交代だあ!』

「ウフフフフ!」

やっぱり来てるよなあロウリイ。門の内側に進入してる奴もいないし、自衛隊にタッチするとしますか。

『伊丹、地球の科学力の恐さ、敵と姫さんに見せてやりな』

『りよ、りよーかい……』

通信で伝え終わると、俺は自慢のジャンプ力で壁の上までひとつ跳びする。見てみれば、そこそこ負傷者も居るようだ。

『お前ら! 傷に矢とか刺さってる奴は抜いとけ! すぐに治療してやる

「からな！」

そしてパンドラ^{アーマリーオブパンドラ}の武器庫からトランスチームガンを出し、続けて四コマ忍法刀も取り出した。

「フル・ボトル！」

そしてスチームガンにドクターボトルを装填する。そしてここで一工夫。

【分身の術！】

四コマ忍法刀の機能で8人に分身し、それぞれ離れてスチームガンを放つ。そうすれば……

【スチームアタック！】

癒しの効果がある緑の霧を広域散布出来るって訳だ♪

ーデ〜ンデ〜デ〜ン♪デ〜デデ〜デ〜ン♪デ〜デデ〜ン♪ー

『何だこの音楽……おつとお』

聞こえ始めた音楽に驚いて振り返ってみれば、戦闘ヘリが機関銃やらミサイルやら色々ぶっ放している光景が目飛び込んで来た……これは、うん。この言葉を使う時だろう。

『やる事が派手だねえ〜……』

もう、これしか言えねえや……

その後、盗賊は大部分があのに世に渡り、残りも捕虜になったのでした。めでたしめでたし……いや、めでたくはねえか。

ベルばら騎士団

(惣司サイド)

一つ言える事、女怖い。あの後、ロウリイが突っ込んでイイ顔しながら100%にくんげん♪挽き肉作ったり、栗林とかいうバトルジャンキーっぽい女が突っ込んで一緒に超・キョーリヨクプレーで盗賊共に地獄を楽しませたり、しまいにや戦闘ヘリのマシンガンやらミサイルやらで粉々にしたりと、かくなくり派手なやり方で自衛隊が勝った。因みに俺はブラックボトルが造れてホクホクだ♪

ードバチンツ！ー

「はあああ~~~~ツ！」

・・・何か伊丹の情け無い声が聞こえた。振り返ってみれば、ロウリイを横抱きした伊丹の左頬に立派な紅葉が・・・あっ(察し)

「伊丹、お前勇気あるな・・・蛮勇だが。よくもまあロウリイの胸を触れたもんだ」

よく見れば、伊丹の左手がロウリイの胸を横から鷲掴みでた。そら紅葉されるわ。

「はく・・・さて、どうなるかな？」

(2時間後)

「あの子と、あの子、あと、頭に羽が付いてるあのファンタジーな子取り敢えず、ピニヤさんとの和平協定は無事成功した。なんかピニヤさんは目え丸くしてたが、どうしたんだろうな？で、今は伊丹が連れて帰る奴を選んでるらしいが、何かやたら女が多い・・・つか、男一人だけだな。

「さて、じゃあ行くか」

「あいよ」

伊丹の言葉に従い、俺はバイクに跨がった。

「で、伊丹？これからどうするっ？」

「取り敢えず、カトーさんのお友達の所行こうか。一緒に来てくれるなっ。」

「あいよ」

伊丹の指示を聞き、エヴオリユダーを発進する。俺達土地勘無いから先頭の車両にのったカトーさんに案内して貰いながら走る事になった。ま、偶にはゆっくり走るのも良いかもな。

(ピニャサイド)

「・・・疲れた・・・」

平和に済む事になって良かったが・・・正直、エボル・・・いや、マスターの威圧感がとてつもなかった。例えるならば、大蛇にキツく巻き付かれながら、更に龍の舌の上で転がされているような・・・まあ、和平協定も結べて、尚且つ彼等が一応だが敵対相手では無くなったのだから良しとしよう。

「・・・マスターに教えられた、究極の秘技とやら・・・ジエイタイ相手に使う事が無ければ良いのだが・・・にしても、んっんっんっ・・・っああ。肩が凝ったな」

鎧を着たまま緊張しっぱなしだったからだろう。一つ風呂浴びたい所だが、ボーゼス達もまだ来ていないし・・・ん？ボーゼス達？

「・・・あ」

・・・まさかボーゼス達、ジエイタイに攻撃したり・・・あ、有り得る！騎士団にはこの事は伝わっていない筈だ！

「・・・さて、謝罪の練習でもしておこうか」

「姫様!」

ああ、頭が可笑しくなったと思われるだろう。だが、妾の頭一つで、もしかしたらこの町が滅ぶかどうかが変わるかも知れんだ。止めてくれるなよ・・・

(惣司サイド)

「べ〜ル〜ナジユ〜にハアカ〜イさ〜れた〜♪ドオラ〜イバーが今は輝く〜♪」

現在、また車の屋根の上で歌いながら寝そべっている。やつぱり、車に揺られるつてもイイねえ・・・ああ、何だか眠く・・・

『おいマスター！前方にベルばら騎士団発見！』

「ナニイ!」

伊丹からの無線を聞き即座に跳ね上がって前方を見る！つとお

」

「うへえ別嬪さんばあつかり・・・」

『生の縦ロールとか始めてみたよ俺達・・・』

「Me too」

某飯マズなメズール声のファンネルスナイパーなら知ってるが、リアルじゃ俺も見た事ねえや。と言うか・・・

「十中八九アレだよな、ピニヤさんが言ってた騎士団って・・・ん？そう言えば・・・」

騎士団の皆さん、俺らの事知らなくね？そして、一応日本と帝国は敵対関係・・・オツオオウ、これは・・・

「ヤツベクイ、マジ・ヤツベクイ・・・」

『マスターどつたの？』

「どうもこうもねえの。取り敢えず、出来るだけ穏便に済ませようぜ？」

『当然』

伊丹の指示で、全員が銃口を下ろす。まあ敵対行動をするわけにやいかんからな。

「貴様達、どこから来た？」

恐らく副リーダー格であろうシヨートヘアの女が先頭車両の運転手に問い掛けた。

「えーと、私達、イタリカから、帰る」

「何処へ？」

おおつと、こりや雲行きが怪しくなってきたぞお・・・

「・・・アルヌス・ウルウ」

「なんだと!？」

「異世界の敵か!!」

あくらま、やっぱりこうなるか・・・

「もう一度、言ってごらんさい」

そう言い、リーダーっぽい金髪ロールが運転手の胸倉を掴み揚げた。

「まあまあ落ち着いて、部下が何か失礼でも？」

すかさず伊丹が宥めに入るが・・・

「降伏しなさい!」

ショートヘアにレイピアを突き付けられる。少し手首を振るえば、伊丹の頭は胴体と永遠に泣き別れする事になるだろう。

「待って! 話せば分かる!」

「聞く耳持たん!」

某五・一五事件で死んだ首相みたいな事を言う伊丹だが、ショートの方も聞いちゃくれない。あれ、伊丹死なないか? コレ・・・

「ええい! お黙りなさい!!」

ーバシッー

「へぶっ!」

と、ロールが伊丹をおもつきしビンタしたあ! やべえぞどうする!? 俺出て行った方が良いか!?

「逃げる! 今は逃げる! GOGOGO!!」

「ッ! 聞いたな! フルスロットルでずらかるぞ!」

伊丹と俺の叫びを聞き、各車両の運転手はギアを入れて走り出した。

「伊丹! 後で迎えに行くからなあ!」

「頼むぞお!」

口約束を交わした俺は素早く窓から車内に飛び込むのだった。

(ピニャサイド)

「何ということをしてくれたんだ!!」

妾は叫び、杯をボーゼスに投げつける。杯は一直線に飛んでボーゼスの額に命中。少々の出血を起こす。

「姫様! 私たちが何をしたら?! 戦いに間に合わなかったとは言え、敵の指揮官を捕虜にしたのですよ!」

パナシユが自失となり座り込んだボーゼスの額にハンカチを当てる。

「・・・結んだ当日に協定破り・・・しかも、寄りによって浚ってきたのが・・・」

「イタミ殿! イタミ殿!」

マスター
エボルと親しいイタミ殿とは……

「……メイド長、イタミ殿を寝室に」

「畏まりました」

さて、イタミ殿の手当ではメイド達に任せるとして……

「貴ツ様らしくッ！イタミ殿に何をした！」

「ひっ」

2人とも縮こまってしまった。だが聞き出さねば……

「い、いつも通り連行して……」

ボーゼス達のいつも通り……馬で引き回し、更に鎧で蹴りつけながら連行するというアレだ。

「そうか……そうかあ……」

取り敢えず、うん。2人には、マスターから教わったアレをさせよう。

「2人とも……セイザしろ」

(惣司サイド)

え、現在、夜になったので戦鬪狂、特地娘3人、ケモナー、料理人、クラーの7人、あ俺も入れて8人か。8人でイタリカの城門に潜入中だ。因みにラビットフォームで。途中で伊丹がレンジャー訓練突破者だって言われて驚いたなあ。

「あんなのがレンジャー……嘘……ナニカの間違い……」

『大型連休潰す、とでも言われたんじゃねえか？ヲタクは好きな事の為なら、冴えないヤローからバケモノにだってなれちまうんだからよ。いや、マジで』

ブツクサこぼし続ける栗林に返す。実際、世界を裏側から回してんのはヲタクだからな。

『と、城門は普通に潜れたが……上の帝国兵は……よしレレイ、よく見とけよ』

俺は素早く階段を上り、右手の周りの気体を圧縮、更にモーフィングっぽい変質能力で組み換えて……

『よっ』

ーブシューーー

城壁の上に散布した。すると見張りはバツタバツタと次々に倒れる。

「マスター、今のは？」

『前に、人間は酸素を取り込んで呼吸してるってのは教えたよな。俺が散布したのは、酸素濃度が全体の50分の3以下の空気、無酸素ガスだ。人間は無酸素ガスを1吸引でもすれば、急速に意識を失うんだよ』

ま、逆に過剰供給された酸素は身体を破壊するけどな・・・

『さて、屋敷が見えたな。お前等は伊丹の所に行け。俺はピニヤさんの所に行ってくるからよ』

「了解っす」

ケモナーの返事を聞き、俺はピニヤさんが居るであろう屋敷の屋根に飛び上がった。

『さてさて、様子はどうかなく？』

ラビットフォームの強化聴覚で盗み聞きしてみるか。

——そもそも、敵対する意思があればすぐに武器を向けていた筈だろう？もう二度とこんな事は起こしてくれるなよ？——

成る程、ピニヤさんはお説教中らしいな。だったら・・・

『よー！』

俺はバルコニーに降りて、気さくに挨拶をする。

「ま・・・マスター・・・？」

ピニヤさんはオイルの切れたロボみたいにぎこちなく顔を此方に向けた。つか俺が教えた正座させて説教してたのか、なんて事を考えながら俺はバルコニーの手摺に凭れて、ピラピラと手を振って見せる。

「・・・」

と、ピニヤさんがスクツと立ち上がってこつちに歩いて来た。それから段々勢いをつけて・・・

「妾の身内が！大変申し訳無い事をしてしまった!!済まない!!」

「姫様!?!」

と、重心を下げて物凄く綺麗に俺が教えた謝罪の最終奥義——ス

ライディング土下座を決めた・・・うん。

『・・・プククク・・・はっはっはっはっはっはっは！10点中9点！慣れればもつとスムーズになるぞ！いやあく、これだから人間は面白い！』

俺は笑いながら採点する。初めてにしては本当に綺麗な土下座だ。

『コレなら、自衛隊も許してくれるだろうさ。ああ安心しろ。自衛隊は元より、この国をどうこうしようってつもりは無い。弱味見せたって・・・いや、寧ろ見せた方が信用されるぞ？因みに今、伊丹の居るであろう部屋には自衛隊の仲間が向かったが・・・』

「今すぐ土下座して来よう！行くぞ、2人共!!」

「は、はい・・・ッ!？」

「あ、脚の・・・感覚が・・・」

お、痺れてるなく♪

『どうしたどうしたwほれほれツンツンw』

「アアアアアアッ！止めて！やめて下さい！」

『ウヘヒヒヒヒヒヒヒw』

その後、ピニヤさん達は伊丹の居る部屋に突撃。土下座して自衛官達をドン引きさせたのであった。

交流／暗躍

(惣司サイド)

「いやはや、まさかスライディング土下座に到達するとはなあ」

「ゴ機嫌で眩きながらミュイの屋敷の屋根の上に寝転がる俺。因みに教えたのは普通の土下座だけだ。」

「・・・さて、と・・・そろそろ、探り探りを入れた方が良さそうだな・・・」

俺はよっこらせつと立ち上がり、右手にトランスチームガン、左手にスチームブレードを召喚する。そしてブレードを分割して、スチームガンに合体。

—ガチンツ—

「ライフル・モード!」

仕上げに空いた左手で俺の遺伝子を流し込んで、空に撃ち放つ。

「スチーム・ショット!」

銃口から発射された赤黒いエネルギー弾は一直線に夜闇の中を突き進み、やがて見えなくなった。

『これで良いだろう。複製品も創ったしな』

そしてパンドラアーマリーオブパンドラの武器庫にスチームガンを投げ込んで返却つと。

「さてと、そろそろ戻るか」

俺は体細胞の結合を分解して赤黒いスライムになり、猛スピードで這いずる。なかなかの速度が出るようで、3秒後にはもう伊丹達が居る部屋だ。ドアの下の隙間をすり抜けて、シユバツと人間態に戻る。

「ただいま♪」

「うおっマスター!?!」

真っ先に反応したのはベッドにいる伊丹だ。古田は真剣にコツチの食い物を頬張っている。料理人なら、味は知っておきたいわな。つか、ロウリイがメイド長に捕まってやがる・・・助け船出すか。

「Heyメイド長、一旦ロウリイを休ませてやりな。ロウリイもお菓子ぐらい食いたいだろうしな」

「ありがと〜ソウジ〜」

「これは失礼しました!」

うっし、これで大丈夫だろ。

「マスター。この前の授業の続きをお願いしたい」

お、レレイは勉強熱心だなあ♪

「よしーそれじゃ今回の授業は、前半は音速突破と衝撃波、後半はDN Aによる遺伝の授業だ！」

いやはや、こういう事を教え込むのは楽しいねえ♪

その後、無理して帰る必要性も無いと判断し、皆はこの屋敷で1泊した。その際、面白い事が聞けたな。何でもこここのメイドの内、ヴォーリアバニ首狩り兎と言うウサ耳種族2人の話だ。それによると、何でも彼女達の住処に帝国が奴隷狩りに来た時、彼女等の女王のテューレって奴が敵に寝返ったらしい。統率力も高く、仲間思いだったが、最後は己の身可愛さで同族を売り渡したと言っていた。証拠として帝国兵に女王の鎧を見せられたらしいが・・・恐らく、帝国側の都合の良いように捻じ曲げられた情報を植え付けられてるな。大方、女王には『お前が降伏すれば一族は助けてやる』とでも吹き込んで、鎧を取り上げたんだろう。手垢まみれのありふれ過ぎたやり口だが、ピンチで精神的にこの上無く追い詰められていた兎達には効果が絶大だったと見える。

『・・・これは、使えそうだな』

そう一言だけ呟いて、俺は眠りに落ちるのだった。

(?・サイド)

『・・・と、ハニっぽいな』

そう言い俺は着ている黒い革ジャンのジッパを下ろしながら、目の前の城門を見上げる。全く、流石は皇帝陛下の城だなあ。無駄に馬鹿デカ過ぎる。

『さて・・・じゃ、行くか』

俺は革ジャンの右内ポケットから掌サイズのボトルを取り出した。それは鍍鉄色の上下蓋に紫色のクリアパーツ、そして銀色のキャップと同色のコブラを象ったレリーフのあるフルボトル——コブラロストフルボトルだ。それを手首のスナップで3回程振り、キャップを正面に合わせて弁を開放、右手に持った変わった銃——トランス

チームガンに装填する。

—ガキヤコンツビイチコンツ！—

【コオブラ・・・】

するとスチームガンからどこことなくダーティな雰囲気の待機音が鳴り始めた。俺はそのままスチームガンを上に掲げ・・・トリガーを引く。

『蒸血♪』

【ミスト・マアツチ・・・】

その瞬間、銃口から真つ黒な煙が発生し、瞬く間に俺の身体を包み込んだ。

【・・・ココツ・コオブラ・・・コオブラ・・・】

そして煙の中で赤いスパークが走り、映るシルエットが変化する。

【ファイヤー!!】

—ドパ〜ンツ！ピュルルルルパンツパパン！—

最後に頭部から金と銀の紙吹雪のような花火が上がり、黒い煙が霧散した。

『・・・やっぱ、しつくりくるな』

——鮮やかな赤色の装甲——

——関節や指の装甲はブラッドレッドとでも形容すべき暗い赤色をした、どこか宇宙服にも似たスーツ——

——コブラを模したトルマリン色のバイザーと胸部装甲——

——首にマフラーのように巻かれて、そのまま胸部のサイドに下ろされた、汚染水を垂れ流す工場を連想させる下向きのパイプ——

その名は——

『《ブラッドスターク》、装着完了』

そして俺はそのまま足音を殺し、中にスルスルと潜入する。あのスライディング移動・・・もうコブラスライドで良いや。コブラスライドなども駆使して、俺はあつと言う間にある部屋に辿り着いた。

『さて・・・普通に入っても、何ら面白く無いよな。よし』

俺はもう一本ボトルを取り出す。それは白色のオバケのレリーフが入った、オバケボトルだ。これを数回振って活性化し、キャップを

開けてコブラと入れ替えるようにスチームガンに装填する。

「フル・ボトル！スチームアタック！」

すると俺の身体は霊体化し壁をすり抜けた。そして部屋の中を見れば思った通り、ベッドの上には白い毛並みのヴオーリアバニーが寝ころんでいる。俺はその兎の横にスタツと降りた。

『オイ、起きろ』

「ツ!？」

つと、寝起きで中々鋭い蹴りをお見舞いして来た。だが・・・

『オイオイ、随分とまあ物騒な挨拶だな。落ち着けよ。俺は、お前さんの手助けをしに来たんだ。テューレって、お前さんだろ？真っ白の毛並みってのはそうそういねえからな』

「・・・手助け？」

当然、この程度の情報じゃ警戒は解けない。だが・・・

『前に、アンタと同じようなヴオーリアバニーに会ってな。ソイツはお前さんの事を「裏切り者」だのと罵ってたが・・・』

「・・・ギリツ」

この様子だと、ビンゴっぽいな・・・

『どうやら、違うらしいなあその顔は。勘違いとか擦れ違いとか、そんなんがあるかも知れん』

「・・・あなた、名前は？」

『お、聞いてくれる気にはなってくれたか？』

警戒そのものは解けてないが、会話なら出来るだろう。

『んっんん・・・俺の名は、ブラッドスターク。ま、意味はへんび寄る血<って所だな。以後、お見知り置きを♪』

さて、自己紹介も済んだ事だし・・・

『さて、話してくれないか？お前さんに・・・いや、お前さん達に何があったのか』

「・・・わかったわ」

『ありがとよ。あくそれと・・・その犬、出て来い』

俺はベッドに向かって話し掛ける。いや、正確には・・・

「いやはや、見破られておりましたか・・・」

ベッドの下にいたコボルトに、だな。

『悪いなテューレ。話をたのむ』

「ええ」

テューレの話を纏めると、やはり彼女は同族の為に生け贄になっただらしい。ここのアホな自己中気違い皇太子ゾルザルの慰み者にされて毎度毎度下っ手糞なナニに付き合わされ、更に救った筈の同族からは裏切り者として命を狙われる。こう言うのをく何だ、踏んだり蹴つたりって言うのか？今は復讐の為にナニ中に洗脳じみた事をしてるらしいが・・・そしてやはりと言うべきか。

『俺の聞いた話と、食い違いがあるな』

「・・・どう聞いたのかしら？」

話して聞かせてくれたんだ。今度は、こっちが喋らなきゃな。

『簡単に言うと、自が身可愛さで同族を裏切って帝国に服従した、って所だったな。そいつ等は証拠としてお前さんの鎧を見せられたらしいが・・・全く、何の捻りもありやしねえナンセンスな、それでいて追い詰められて心に余裕が無い奴には効果覿面な、実に質の悪いやり方だぜ』

「・・・成る程ね。大体分かったわ。どうやら私たちヴオーリアバニーは、それぞれが騙されていたようね」

『まだ証拠はねえから、取り敢えず頭に置いといてくれ』

俺はコメカミをトントンと指で叩いて追加する。

「ええ。分かってる」

『なら良いんだ。それじゃ今夜はこの辺で。チャオ♪』

俺は扉を開けて部屋を出る。

「・・・チャオって？」

あ、そうか。知らないんだったな。

『んくまあ、へこんにちは』にもへさようなら』にも使える便利な言葉
『や』

「そう・・・じゃあ、チャオ。スターク」

おお、意外とノリ良いんだなテューレって。

『・・・気イ付けるよ』

そう言い、ちよつと嬉しくなりながら扉を閉めた。

『さて、すぐ帰っても良いが・・・適当に散策して行くか』

俺は適当にその辺をぶらぶら歩く。どうもこの見張りは徹夜慣れして無いっぽい。簡単に探検出来た。

『ふくん、ここが奴隷部屋・・・ん？あの奴隷・・・まさか!』

適当に部屋を覗いていると、一人の少女が目に入った。黒髪だし、骨格的にも・・・

『おい、おい!』

「ん・・・ッ!?だ、誰!?!」

やっぱりなッ!

『日本人か』

「え・・・日本語?」

キョトンとする少女。恐らく高校生くらいだろう。

『俺は、ブラッドスターク。よろしくな、お嬢ちゃん。それで、お嬢ちゃんの名前は?』

俺は少女の頭を撫で、同時に少しだが怪我も治した。

「の、紀子・・・です」

ノリコちゃんか。覚えてたぜ。

『安心しろ、俺は君の味方だ。君以外に、日本人は居るか?』

「いえ、ここには・・・でも、ここに連れて来られた時、友達も2人いたんです!男と女の!」

成る程、有力情報ゲットだ。

『ありがとな。そうだ、確かあったはず・・・あった。少ないが、食うかい?』

俺はパンと水筒を取り出し、ノリコちゃんに渡す。かなり窶れてるからな。きつと碌なモン食ってないんだろう。

「あ、ありがとうございます!」

おおおお、あつと言う間に食っちゃまったよ。

『済まない。今日の所は、お別れだ。明日の夜、また来るぜ。チャオ』

♪

「あ、わかりました！」

そう言ってノリコちゃんは笑顔を見せてくれた。これだから、エゴ活動とは言え人助けは好きなんだ。

そして俺は霧ワープで、その場から消えた。

ブラツクホール

(惣司サイド)

「え、帰るの?」

ピニヤの所で一晩世話になった俺は、伊丹たちの言葉にちよつと驚いた。

「まあ、国会から報告求められてるツスからねえ」

ケモナーの説明によると、ドラゴンによる被害の原因は自衛隊の力不足にあるんじゃないのか、とか言われてるらしい。そういや難民の4分の1死んじまったんだっけ・・・まあ確かに、現代日本でファンタジーの産物は想像し難いか。だが・・・もしかしたら、特^ク地の資源を狙ってる他国のスパイが居るかも知れんな。何せ、特^ク地は未開発で公害・汚染も無し。更に、未知の鉱産資源もたんまり在ると来たもんだ。今のカツカツな地球人からしたら、正に砂漠のオアシスだろう。そして人間は、餓えて渴いた時に目の前に現れた物を、直ぐに独占しようとするらしい理由で正当化して潰し合う。そしてその血が、オアシスを阿鼻叫喚の色に染め上げるんだ・・・ああ全く、止めだ止め。人間の屑々しい部分なんぞ、考えれば考えるだけ出て来ちまうからな。

「妾も、同行させていたきたい!」

・・・ん? ゴメンちよつと話聞いてなかった。何があつたの?

(スタークサイド)

「え? 危険すぎるんじゃない?」

テューレはポカンとしている。確かに危険だろう。人間ならば、な。

『大丈夫さ。この世界の人間にも人外にも、俺を殺す事なんて出来やしない』

俺は椅子にドカツと座り込みながらテューレに向かって手をピラピラ振って見せた。何時もの仕草だ。

「全く、ゾルザルの道化になりたい、だなんて言うとは思わなかったわ」

そう、今さつき俺が申し出たのはこういう事だ。俺なら奇術もお茶の子さいさいだし、何よりこの飄々としたキャラに合ってる。それに、影から引つ掻き回せそうだしな♪

『頼むよ〜紹介してくれよ〜。お前、ある程度は歩き回れるんだろ？城内を散歩中に、偶々見かけて声を掛けたって事で良いじゃねえか。それに・・・俺が近くにいれば、お前にかなり強力な武器を融通出来るぜ?』

「っ!」

ハハッ、復讐者^{リベンジャー}としては、やっぱり武器は魅力的か?

「・・・ハア、分かったわよ。その代わり、ゾルザルの前ではなるべく私に関わらないで頂戴。良いわね?」

『ありがとよ、テューレ。その武器を使うには、お前の身体を慣らさなきゃいけない。悪いが、ちつとばかり時間がかかるぜ』

さあてと、あのアホを陥れるのが楽しみになってきたなあ・・・

(惣司サイド)

「凄い事になったな〜」

あの後、結局ピニヤとボーゼスも着いて行くことになった。理由としては、自衛隊の基地を見たいとか、日本のお偉方と話がしたいとか・・・まあ良いか。で、今は屋敷の屋根で胡座をかきながら車待ち中。

「・・・そういや俺、ハザードレベル幾つなんだ?」

思い出してみれば、今まで一回も測った事が無かったな・・・この際だし、測ってみるか。

「・・・はあッ!?!・・・ハザードレベル・・・7, 5?」

・・・うん、驚く程でも無かったかな。ウーン、正直微妙な数値・・・エボルトリガー使えたっけ?

「・・・せつかくだし、この際使っちゃうか。そうでもしねえと、使わずにお蔵入りしちまいそうだしなくこの世界だと」

そう言っただけで空間を指で撫で、^{アーマリーオブパンドラ}パンドラの武器庫を開いてエボルトリガーを取り出す。ついでにパンドラボックスも出しとくか。

『さて、この際だからブラックパネルも創っちゃおう』

—ガギユルルツギユツギユン—

【オーバー・ザ・エヴォリューションツ!!】

ボタンを押してエボルトリガーを機動状態にし、パンドラボックスに放り込んだ。すると、見る見る内にパンドラボックスからエネルギーが放出され始める。そして数秒後にそのエネルギーはボックスの上でマテリアライズし、真つ黒な1枚のパネルという形をとった。

『意外とあっさり出来るモンなんだなあ・・・拍子抜けと言うか、何と
言うか・・・』

俺はそのパネル——ブラックパンドラパネルを外し、手に持って
見てみる。成る程、エネルギーは完全に結晶化してらしいな。全く
外に漏れてない。

『さてと、いよいよ本命♪』

アーマリーオブパンドラ
パンドラの武器庫から追加でエボルドライバーを取り出し、腰に装
着。

【エボル・ドライバー!】

『よし、やるか』

さて、覚悟は決まったでえ!

—ガギユルルツギユツギユン—

【オーバー・ザ・エヴォリューションツ!!】

俺はエボルトリガーを起動してエボルドライバーにセットする。
やっぱり、緊張するなあ・・・

【コブラ!ライダーシステム!レボウルーツションツ!!】

ボトルをベルトに装填すると、いつもとは違う認識音声
が鳴った。さて、記念すべき初ブラックホールだ!・・・初
ブラックホールって何?

—デッデーデ♪デレデレデレレーレーデン♪ヴウンヴウン!
ヴィチュン—

【ARE YOU READY?】

『超変身ツ!!』

俺はクツソ下らん事を考えながら変身シークエンスを起動。

【ブラックホール！】

俺を中心として銀色に変色したEV―BHライドビルダーが現れ、その周りをパンドラボックスのような立方体が黒い竜巻に乗って飛び交う。

【ブラックホールッ！】

そしてその立方体が俺の身体を覆うように合体して、柱のような状態になり……

【ブラックホークルッ！】

次の瞬間、俺の視界が完全にブラックアウト。多分、あの消えるシーンだろうなア。

【レボルウション！フハハハハハハハハハア……】

そして衝撃波と共に一気に視界が弾けるように開けた。俺は自分の身体を見渡す。

―胸部のアーミリアクターが変化したカタストロフィリアクター―

―針状の軸が長く延びたEVOアナイアレイシヨルダー―

―腰に追加されたローブマント、EVOベクターローブ―

よし、間違いないな。これで漸く……

『エボル、フェーズ4、完了!!』

念願のブラックホールフォームだ！

『ん〜っと、身体は……別に、問題無さそうだな』

身体を捻ったりしてみるが、別に痛みやだるさなんかも殆ど無い。

――ブロロロロロロロ――

『と、来たらしいな』

俺は遠くから走ってくる車を見ながらそう呟いた。

(Noサイド)

「あれ？そう言やマスターは？」

ピニヤとボーゼスの2人を含めた全員を車に乗せたタイミングで、伊丹が呟く。

「そう言えば居ませんね。どこ行ったんだかあの宇宙人……」

呆れ顔でボヤク栗林。すると、その背後に白黒の影が音もなく着地

した。当然、栗林は気付いていない。

『ハイ宇宙人ですが』

「ひよあああああつ!？」

その影・・・エボルが囁くと、栗林は驚きすぎて腰を抜かしてしまった。なかなか良い趣味をしたら宇宙人である。

『H A H A H A ! チャオ♪』

「マスター!?!しかも白黒!?!」

驚く自衛隊御一行。因みに降りる時は、EVOベクターロープで体重を5gにしていた。故に何の音もしなかつたのだ。星間航行用装備のこの上無き無駄使いである。

『おう。この姿は、ブラックホールフォームだ。今の所、最強形態だな』

そう言つて右手の指でシュツと複眼を撫でるエボル。

「えくつと・・・取り敢えず、これから帰るから」

もう受け流す事に徹すると決めた伊丹。懸命な判断だろう。

『了解♪』

そう言つてエボルはEVOベクターロープの機能で空中に浮かぶ。

当然、その他のメンバーは目が真ん丸になる程に驚いた。

「惣司い!飛べるなんてえ、私聞いてないわよお!」

『そりや言つてねえからな』

「か、風の精霊の加護でも無い!?!」

「一体、どんな理を使って・・・」

反応するのは特地女子。当然だろう。魔法でも精霊の加護でも無い、謎としか言いようの無い未知の力で浮かんでいるのだから。

『あくスマン、俺は一足先に戻ってるぜ。伊丹!レイには、重力操作浮遊について教えてやってくれ!それと、これ持つててくれよ!チャオ!』

そう言つてエボルは『答えは聞いてない』と言わんばかりに背後にワームホールを作り上げ、伊丹にお守り袋を投げ渡すと同時にその中に飛び込んだ。そして、丸投げされたこの男は・・・

「か・・・勘弁してくれ」

この後、車内ピニヤとボーゼスも含めた5人から質問責めにされた。伊丹は一言、「のど飴下しやい・・・」と呟いたと言う。

(惣司サイド)

『ふう・・・ちつとばかし、疲れるな。ハアアア、つと・・・』

部屋の中に転移した俺は、ボフツとベッドに飛び込む。やつぱし負荷は掛かるよなあ・・・

『よっ、と・・・』

気だるさを何とか振り払って、ドライバーからエボルトリガーを引き抜く。すると、重い荷物を一気に降ろした時にも似た解放感を感じた。

『フウウ、だいぶマシ・・・』

そしてパパツとコーヒーを入れ、口に流し込む。

『・・・っあくうめえな・・・ちよつと待てよ？今俺どうやって飲んだ？』

何となく飲んじまったが、まだ俺は変身解除していない。つまりコブラフォームのまま、コーヒーを作って口に流し込んだって事になる・・・うわっシユール。

『まあ良い。それより、ハザードレベルの測定だ』

俺はもうわかんねえ事を放置し、胸に手を当ててハザードレベルを測定する。何か、どこことなく懺悔してるみたいだ。これまたシユールな絵面だなあ・・・

『・・・ふあっ!?ハザードレベル10,0!?限界値じゃねえか!!』

いや、大して苦戦して無いよね？変身しただけでコレ?・・・はあく無いわ・・・

『・・・ま、良いか。上がっちゃったもんは仕方無いな』

どっかの帝国の糞大臣みたいな事を言いながら、俺はパンドラボックスとハザードトリガーを取り出す。

『何気にビルドドライバーも入ってたし・・・本当、どうなってるんだ？この中・・・』

そう言っつてハザードトリガーをパンドラボックスに放り込んだ。すると、今度は白いエネルギーがマテリアライズしてパネルを創る。

真っ白なパンドラパネル——ホワイトパンドラパネルだ。これで、新世界に関わる2つのパネルが出来た。

『後は、この白と黒のパネルを・・・』

俺は右手にブラックパネル、左手にホワイトパネルをそれぞれ持ち、内包エネルギーを操作してオーバーフローを起こさせる。

『ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・むんっ!』

そして反発し合うエネルギーを無理矢理統合して混ぜ合わせて結合させた。そうすれば・・・白と黒が螺旋状に混ざり合ったパネル——カオスパンドラパネルの完成だ!

『さて、これで準備は整った!』

x y z 軸の移動を司るブラックパネルと、平行世界に干渉するホワイトパネル・・・この2つが融合した混沌カオスの力ならば・・・

『平行世界に、旅行に行けるな♪』

さて、書き置きをして・・・っと。

『じゃ・・・行つて来ます』

俺はカオスパネルのエネルギーを解放して特殊なワームホール：ギヤレオリアロードを精製し、その中に勢い良く飛び込んだ。

『どこに行き着くか、楽しみだぜ♪』

(伊丹サイド)

「マスター、只今〜」

俺はのど飴を舂めながら、マスターが居るであろう部屋の扉を開く。だが・・・

「・・・あれ、マスター何処?」

居ない。部屋をグルツと見渡し、ベッドも見てみたが、見付からない。

「ん?何だこのメモ・・・ンンツ!」

・・・おいおいマスター・・・あんた・・・

「ふざけんなアアアアア!!」

俺が握り潰して投げ捨てた紙には、へちよつと異世界行ってくる。明日には戻るつもりだから〜と書いてあった。

コラボ・戦姫絶唱エボリューション！

戦姫絶唱エボリューション！／3人のE（+5人）

①

ここは、『僕のヒーローアカデミア』Eの暗号』の世界。時間軸は、出久がスパイデイ化した日の放課後。

「かつちゃんの身体能力、ホントにスゲエよな」

「当たり前だろ？俺だぜ？」

「いやいや、見ただけであれを盗むとか・・・」

「才能だよね〜勝己！」

「いや〜格好良かったよ〜ばくごー君！」

だべりながら校門から出て来る出久達。メンバーは出久、爆豪、三奈、フラン、麗日だ。

「・・・へっ、当然・・・／／／」

麗日の言葉に返すも、照れ臭くなって顔を逸らす爆豪。何故くっ付かないのだろうか。因みに出久・三奈・フランは、その様を一步退きながら見てニヤニヤしている。

「・・・ッ!?何か来る！」
『!?』

出久の言葉で、全員が一気に戦闘体制に入った。三奈は、出久との特訓で培われた直感が、フランは、持って生まれた個性により持ち合わせる闘争本能がそうさせる。爆豪と麗日も、バトルヒーロー『ガンヘッド』の元で積んだ経験により、素早く最適なファイティングポーズを取った。

（これは、重力異常・・・それだけじゃない！空間湾曲・・・恐らくレポートゲート・・・黒霧？いや、アイツの個性では此処まで大きな空間異常は起こらなかつた。黒霧の時の湾曲具合からして、この規模の空間湾曲は・・・）

出久が注意深く湾曲した空間を睨み付けると、その真ん中に黒と白が入り混じった穴が出来た。それは拳ほどのサイズから見ると

に直径2 m程にまで広がり、開通が完了する。

(まさか・・・ESウインドウみたいなのなのか?)

出久が思い浮かべたのは、大昔のアニメに登場した、超長距離移動を可能とする別次元への窓。それならば、此処まで大きな重力・空間の異常も納得できる。

「気を付けろよ。こんなにデカイ空間湾曲・・・ただ者じゃ無い筈だ」

出久は警告すると同時にロストドライバーを装着し、メモリを構える。三奈とフランもそれに習って、ドライバーを装着しながらメモリを取り出した。

「さあ・・・何が来る・・・?」

警戒心MAXの出久達の前に、遂にそれは現れた。

―ベちっ―

『あだっ』

・・・とても格好悪く、背中から落下して・・・

(惣司サイド)

『・・・オウマイバック・・・アアッ、オウマイバアック・・・』

いって腰打った・・・フンッ!

―パキペキッ―

『っあく・・・ふう、治った』

あく痛かった・・・

「「「「・・・え?」」」」

『え?』

・・・おおっと、早速見つかった!どうしよう・・・

『あく・・・チャオ?』

俺が腰をさすりながら挨拶すると、真ん中の男以外は脱力した・・・ってロストドライバーとエターナルメモリ!?それにあの金髪、あれヒロアカの爆豪!そんなでもってピンクの子は芦戸三奈!

「・・・何故、貴様がここにいる・・・星を喰らい滅ぼす悪魔・・・エボルトツ!!」

・・・なあんて知られてるの(エコー&ハ〇ケ感)?と云うか、それはオリジナルのエボルトであって俺じゃねえから!

「エターナル!」

いやいやヤバイヤバイヤバイ! 流石にエターナルは苦戦しかねん!

『ま、待ってくれ! 別に危害に危害を加えを加えたりはしねえよ! ほら!』

俺はドライバーからボトルを引き抜き、変身解除する。そして、そのままボトルをエターナルの男に投げ渡し、手を頭の後ろで組んだ。これで無敵意だと判ってくれば良いが・・・

「・・・貴様、どういうつもりだ? 何故、下等生物だと思っている人間俺にコレを渡す?」

「いや、俺が下等生物だと思うのは人殺しの覚悟も無く他の選択肢を蹴って犯罪者に墜ちるような屑だけだぞ?」

「・・・ねえ出久、エボルトって? それに星を喰らうってどういう事?」
「・・・出久!? え、デク君なの君!? 髪色とソバカス以外に面影無いじゃん! 背も伸びてるし・・・何より、殺しを経験した目をしてるつつうか・・・」

「・・・簡単に言うと、ブラックホールを操ることで星を呑み込んで進化し続ける怪物みたいな仮面ライダーだ」

「え!? え〜と、ブラックホールって事はつまり・・・」

「・・・宇宙空間で活動可能になって、個性出力も跳ね上がった13号先生」

「あ〜!」

え〜とと麗日さんだったか。麗日さんは納得したように頷いた。

「つーか、仮面ライダーって沢山いるモンなのか? 俺は出久以外知らねえんだが・・・」

あれ? デク呼びじゃ無い・・・改心したのか?

「そう言えば、アタシもデップーと出久以外知らないな〜」

待って、デップーってデッドプールの事? え、何? ここマーベルとも混ざってるの?

「私は出久に教えて貰った! クウガからエグゼイドまで!」

平成ライダーフルコンプだどん! って・・・フランドール・スカール
レットオ!? 東方かよ!

「はろ〜♪」

「え、今度は何?」

もういっぱいになった俺は、電信柱の上から聞こえてきた声に反応して見上げる。するとそこから飛び降りて来たのは……

—ズドンツ—

「……あくクソクソクソんくんっ実践向きじゃないっ」と

恐らく今のスーパーヒーロー着地で膝を痛めたであろう、糞無責任なメタ野郎デッドプールだった。つうか俺もやったなくあれ。そして同じく膝を痛めた。

「オイオイ糞作者、まだ本編入ってねえのにもう2200文字越えてどういう事だ?もつとちやっちやと行かないと、画面の前のお友達も前置きなげくよとか思っちやうからだめだよね〜という事で!」

——キング・クリムゾン!5人に説明をして互いに自己紹介を終え、同行するかと質問するという時間は消し飛び、『着いて来る事になった』とい(以下略)——

「で、良いのか?まあ帰ってくるのはこっちじゃ1時間後程度だが……」

俺の質問に対して、真っ先に返答したのは出久だった。

「まあ、平行世界なら新しいメモリも創れるだろうからな。最近どうも焦臭いし、戦力は多いに越した事は無い」

うん、成る程。まあ握手の時に測ったらハザードレベルが5、5だったし、大丈夫だろ。因みに三奈が4、6、フランは4、5、爆豪は4、2で、麗日は3、5だった。お前等のハザードレベル高くね?「アタシ海外旅行とか行った事無いし、楽しそうだからね!何より、出久が行くんだから!」

「私も〜♪」

そうそう。驚いたのが、出久の腕に抱き付いているフランと三奈が2人共出久の彼女という事だ。何でも、最近構ってあげられて無いと言うのも出久の参加理由なんだとか。因みに異形型の三奈は、ダメージメモリの力で1日だけガワを普通の人間にするそうだ。

「まあ、何事も経験つつうしな(麗日行くし……)」

「異世界とか面白そうやん！」

意外と抵抗無いのな。

「じゃあ、始めてくれ」

「子安さんのイケヴオだから無性に腹立つな。何でお前が仕切ってるだよ……」

【コオブラア……コオブラア！エボル・コオブラア！！】

ブツクサ言いながら俺は変身し、混沌カオスパネルを両手で構えて呪文を詠唱する。

『ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……』

「やっぱガオガイガー好きなのか」

「作者がガガガ信者だしね、仕方無いね」

『ウイータツ!!』

だべっている出久とデッドプールを余所に、俺はギャレオリアロードを開いた。さてと、準備完了。

「行クゾ！俺二続ケ！」

「彼二続ケ！行クゾ！」

「わあ〜！」

万能ボイスを叫びながら飛び込むデップーと、それに乗っかる出久。そして更に、ノリの良い彼女2人も続いた。

「元氣やね〜」

「だるそうより良いだろ。っと……ホラ／／／」

「……！／／／」

スツと手を出す爆豪。一瞬キョトンとするが、意味を察して麗日は少し顔を赤らめる。だが……

「……はい！お願いね、ばくごー君！／／／」

「っ！お、おう！／／／（指やらけえ！）」

出された手をしつかりと握った。その手を握り返し、爆豪と麗日は一緒に飛び込む。え、何で見えてるかって？俺がまだ入ってなかったからですが？

——大変お待たせ致しました！ここからが本編です！——
デップーが何か言ってる……

(NOサイド)

ここは、カフエ《nascita》の地下エリア、その一角に設けられた特殊訓練室。そこには4人の少女と1人の青年が居た。4人は赤い結晶のような首飾りを掴み、青年は赤、青、金で装飾されたベルト——惣司と同じ、エボルドライバー（風鳴）を着用して、それぞれが構える。そして、モニタールームでは赤毛のマツチヨマン（弦十郎）と白衣を着た金髪のようなj・・・少女——エルフナインが、その成り行きを見守っている。

「行くよ、仁君！」

「来い！響、翼、奏、クリス！」

名前を呼ばれた少女達は、それぞれが歌を紡ぐ。

——Balwisyall Nescell gungnir
tron

——Imyuteus amenohabakirir tron
♪——

——Croitzalronzell Gungnir zi
zzl

——Killter Ichaiival tron

すると、その手の中に握られたクリスタルが眩い光を放った。その光は彼女達を包み、その身に鎧を、手には武器を与える。

——北欧の主神オーディンが使ったとされる、必中必殺の槍、ガン
グニール——

——須佐之男命が八岐大蛇を討ち取る際に用いた（ツルギ）剣、天羽々斬——

——北欧の狩猟神ウルによってイチイの木から造られた、
イチイ（イバル）の弓——

その鎧は、聖遺物の欠片から創られた《シンフォギアシステム》。太古の昔より、人間を襲い続けてきた超古代殺戮兵器《ノイズ》に唯一立ち向かう事が出来る、隠された人類の希望。

【コブラーライダーシステム！エヴォリューションッ!!】

——テレテテテレレ♪ヴウンヴウン！ヴィチュン！——

【ARE YOU READY?】

『変身!』

「エボル・コオブラア〜!!フツハツハツハツハツハツハ!」

対して、青年——石動仁が纏うは、星を滅ぼして喰らい進化し続ける、絶望の象徴……仮面ライダーE^エV^ボL。最も、本人にその気は無いため地球は滅ぼされる事はない。

「今回こそ、^{コブラフォーム}フエーズ1には勝って見せる!」

『それは楽しみだな!』

拳を構える少女、響の言葉に、エボルはワクワクするという様子で答えた。

『では、訓練開s……!?!え?!空間湾曲反応!?!』

『何だと!?!』

訓練開始直前にトラブルが発生した。空間湾曲は、ノイズが異空間から現れるときに発生する現象だ。故に、奏者達も敵襲かと身構える。だが、エボルだけは依然として脱力したままだ。

『この感じ……平行世界から誰か来るな』

それは、何度も平行世界旅行を行っている彼だからこそ分かったものだ。ノイズとは明らかに出力が違う上に、ノイズには無い生体反応もある。

——ヴオオオオオン——

そして遂に、異次元からの窓が開いた。その時空異変により空間が軋み、周りのコンクリートが粉塵レベルまで分解される。

(こういう所は、俺のと違うんだな)

舞い上がる塵を見ながらそんな事を考える仁。仁の場合、此処まで周りに影響は与えないからだ。

——ズドンツ——

そして、窓の中から7つの人影が出て来た。というかその内3つは勢い良く飛び出し、スーパーヒーロー着地を決めた。

——デデンツデデンツ♪デデンツデデンツ♪デデンツ♪デデンツデデンツ♪
デデンツ♪——

『(BGMターミネーターかよ……っかネタで返した方が良いか? 取り敢えず此処は……) 誰だお前はツ!?!』

「地獄からの使者！デッドプールッ！」

「蒼く燃えるは狂気の焰・・・仮面ライダー！エターナル！B―X!!」
『逆さまの愛と、^{LOVE}破滅への進化！仮面ライダーエボル！』

3人はそれぞれが名乗り、デッドプールは東映スパイダーマンのポーズ、エターナルは右手のエターナルエッジを右下に振り抜き、左手をベルトに当てるポーズ、そしてエボルは、左足を引いて右手を前に突き出すポーズをとった。コイツ等、ノリノリである。

「……………」

奏者達はこの急展開に脳の処理が追い付かず、古いパソコンのようにフリーズ。ある意味、当然の反応と言えよう。

「わぁ〜凄い！カツコイイ！」

「オイオイオイオイ、この馬鹿マジか」

一方、名乗り方がウケたのか響は3人に拍手を送る。これにはクリスもビツクリ。

『おう、ありがとな！』

「つて、またエボルが居るよ・・・」

響の拍手に惣司エボルは手を振り、エターナルはエターナルエッジからミュージックメモリを引き抜いた。ターミネーターのBGMの正体はこれだ。

「ウツヒョー!!何だそのスク水ニーソみたいなけしからん格好は！興奮しちゃうj」黙れ。一応彼女持ちだろうがお前は」―シユパアンツ！―アアアアアツイッタイ背中アアアアツ!!」

そして、セクハラ発言から流れるようにお仕置きされるデアップー。コイツもう分かんねえな。

「さつき何かコソコソ話してたのこれかよ出久」

「カツコイイと思う！」

「でも、狂気はもう大丈夫でしょ？」

後ろにいた爆豪、フラン、三奈も会話に入ってきた。因みに三奈はダミーメモリの能力で角と目の色、肌色を誤魔化している。

「そうだな。だが、蒼炎超越態の起爆剤になる感情だから入れた」
ブルーフレアエクストリーム

そう言つて、出久は変身を解除。その髪の蒼いメッシュも地毛の緑

に戻った。

(え、緑谷出久!?!それにあの金髪は爆豪!え、何?そっちはヒロアカの世界なのか?)

出久達を見て混乱する仁。まあ平行世界では自分が憑依した原作主人公だからね。仕方無いね。

『あくスマン、今説明する』

——DP「小説って便利だね、こんな風にカット出来るから。じゃあOTONAとエルフナインたんも説明聞いたって事で、はいりスタート」——

(惣司サイド)

「成る程。概ね理解した!」

『ありがとよ』

赤毛の親父っさん、風鳴弦十郎の言葉に、俺はそう返した。いやはや、まさかヒロアカの次がシンフォギアとはねえ。しかも、どちらもライダーが存在するifワールド・・・面白い。

『ようこそ、平行世界のエボルト。俺はこの世界のエボルト、石動仁だ』

『こりゃ(丁寧に)どうも。俺は石動惣司だ』

俺達は握手する。何気に凄い光景だな。エボルコブラ同士が握手って・・・

「ふむ、平行世界の仮面ライダー、か・・・」

「・・・世界滅ぼせるんじゃないか?」

まあそう思うわなあクリスちゃん。

「まあやる気があるか否かはともかく、実際世界を滅ぼすなんて容易いだろうからな。特に、俺の世界なら・・・」

そう言えば、エターナルレクイエムは敵の能力を永久凍結させるんだっけか・・・ん?ヒロアカ世界・・・あ(察し)

「所でアタシの姿、もう戻しても良くない?」

「ん、そうだな」

三奈ちゃん言葉に答え、メモリとエッジを取り出す。

【ダミー!マキシマムドライブ!】

そしてそのエッジのマキシマムスロットにダミーメモリを装填し、刃の腹の部分で三奈ちゃんをそつと撫でた。するとダミーによつて施された擬態が解かれ、彼女は本来の姿に戻る。

「!!?!」

「えへへ、ビックリした？アタシ異形型だからさ、こうしないと皆驚いちやうなつて事で」

「成る程。それ「あ、あの！」ん、どうした？エルフナイン君」

「えつと、失礼とは思いますが・・・皆さんのDNAを解析させていただけないでしょうか!？」

ああ、一応錬金術としては気になるわな。

「どうする?」

「私は別にええよ」

「悪用しないなら良いぜ」

「アタシも良いよ」

「私も!」

『・・・良かったなエルフナインちゃん。良いつてよ』

「ありがとうございます!」

はっはっは、元気で宜しい!さてと・・・本題だ。

『所でお前ら・・・突然だが、俺達と戦って見ないか?』

「俺ちゃんマジ空気(´・ω・｀) ショボーン・・・②に続く!」

戦姫絶唱エボリューション！／3人のE（＋5人）

②

（惣司サイド）

『突然だが、俺達と戦って見ないか？』

「「「・・・ハアツ!」」」

俺の言葉に、装者達は驚く。まあ当然だわな。取り敢えず変身解除しとくか。

「オイ惣司、端折りすぎだ。ああ・・・取り敢えず説明する。俺達が平行世界旅行をするのと決めた理由は、元々戦力の増量だ。だから、平行世界の戦士と戦ってその力を解析する必要がある。だから戦おうと言ったんだコイツは」

「おう出久！説明とおも！」

まあ俺の場合は9割方、ただの興味だがな。

「と言う事だ。誰か戦ってくれないか？戦闘経験も積めるだろうし、特に出久は戦場経験者だから動きが違うぞ」

「・・・戦場・・・」

おっと、クリスちゃんにはアウトだったかな？

「まだ高校生の子供が・・・」

「子供扱いは止していただきたい。まあ確かに、この中じゃ年下だが」
少々ムツとする出久。まあアイツだけじゃ無いだろうが、今の自分にプライドがあるだろうからな。

——DP「え〜つと、こつからちよつとばかし雑談が始まるからさ。
こ→こ←、カットね。読みたい人はロギアさん所にGO!」——
さてと、話してみても分かった。このエボルヤバ過ぎイ！何でハザードレベルが10超えてるんだよ！

ええつと、皆の方は・・・

「えつと、複数人でのチーム戦って感じで良いか？」

「良いとも奏さん。じゃあ・・・上限は③！人にしようか」

「おいダテヤーナザン」

やっぱネタに反応してくれるよなく出久は。

「じゃあ、チーム決めようぜ！あ、人材の使い回しアリな」

——3分後——

「どうも〜！俺ちゃんデッドプールです！今回はこのモニタールームにて、解説役もさせて頂きます！では司会の惣司さん！バトンパス！」

「はい、アナタのそばに這い寄る破滅！エボルトホテプです！」

「はい尺が惜しいんで早速いこう！」

メタいなあやつぱり。

「シンフォギアコーナー！姉妹の間に挟まれる鏡！ガングニール姉妹&神獣鏡チーム！」

「燃えてきた！」

「あたしらが姉妹か。言い得て妙だね♪」

「そして私は挟まれるんだ・・・」

済まんなあ393。これはデップーが勝手にやつてる事なんだ。

「続いてパラレルコーナー！狂火を燃やして、光となる！緑谷出久！」

「 그리스 と オーブ か？ まあ間違っちゃいねえな」

出久ウルトラマンも知ってるのか。

「そして、身体能力と酸液の溶解度共に凄く、高いです。芦戸三奈！」

「ねえ、その紹介文何とかならなかったの？」

くそみそネタを使うなよデップー・・・

「さあらに！我らがアイドルヴァンパイア！ですがまだ吸血経験は御座いません！フランドール・スカーレットオ!!」

「何で知ってるのさ!?!」

おい・・・もう疲れた。

「ここからは出久に視点変更します！画面の前の皆、やったね！戦闘シーンだよ！あ、因みに他のメンバーは全員見学室的な所にいます。あとゴメンね、解説は出来そうにない」

最後までメタたっぷりなデップーだった。

(出久サイド)

「まあたデップーは第4の壁の向こう側の住人に・・・」

まあいいか取り敢えず、さっきの時間でストレッチも終わらせた。フランがペターソンと股割りしたのには驚いたなあ。因みにドライバーは装着済みだ。

「出久、ね。改めまして、あたしは天羽奏。今回は宜しくな！」

「此方こそ、楽ませて貰う」

ああ、こんなにワクワクするのは何時ぶりだ？きつと今、俺は口角が釣り上がってるんだろいなあ。

『では双方、武装！』

——Balwisyall Nescell gungnir
tronzall

——Croitzall ronzell Gungnir zi
zzll

【エターナル！】【タブー！】【ジョーカー！】

【AWAKENING！NEO CLOSS—Z DORAGON！
Are You Ready？】

【「変身ッ！！」】

【エターナル！】

【ジョーカー！】

【タブー！】

【WAKE UP INFESLNO！GET NEO CLOSS
—ZDORAGON！イエエエエエエー！】

「さて、踊るぞ。死神のパーティータイムだ」

「コンティニューは、させないよ？」

「私の切り札、引き出せるかな？」

それぞれ決め台詞を言い、変身完了。因みに全員がアドリブだ。

「今の私達は・・・負ける気がしない！！」

「ココロがたぎる・・・魂が叫ぶ！・・・あたしの槍がッ！風を斬る！！」
「えつと・・・皆が居てくれるから・・・私は戦う！」

あ、響はアドリブ苦手なのか？そして、少し調べてみたが・・・胸糞悪いな。俺の過去と良い勝負だ。そのせいで、人格が五代さんと映司さんのハーフみたいな事になってやがる・・・

『では第1試合！開始イ!!』

「先手必勝！行くぞ響！」

「はいっ！」

と、ガングニール姉妹か。しかも、後ろに居るのは火力特化の仮面ライダークローズの発展型・・・ならば！

「2人共！姉妹は任せた！ゴセパ サギザザ ゾ ダダブ！」

「Yes！」

グロンギ語教えて正解だった！

【ゾーン！マキシマムドライブ！】

俺はネオクローズの上にテレポートする。

「消えた!?!」

そこから、脚に蒼炎を纏って踵落とす！

「ッ！そこオ！」

ーガチンッー

「成る程、ドラゴン系は感覚が鋭いらしいな」

「て、テレポートドスツグハツ!?!」

「奏さん！ーガッーぎっ!?!」

と、油断した姉妹を2人が襲う！奏は腹に三奈のパンチ、響はフランのハイキックがモロに入ったようだ。

「響！奏さん！くっ、ウオオオオオオツ!!」

ーヴァン！ー

ほう？万丈は使わなかったブレイズアップモードか。面白い！

「フウウ、ハッ！」

気合いを入れたネオクローズは、取り出した大剣と銀色のビートクローザーの二刀流で斬り掛かって来た。取り敢えず・・・

【クイーン！マキシマムドライブ！】

「どの程度か、見せて頂こう！」

これ調べにクイーンで受け止めーバキッーは!?!

「クイーンを、斬り裂いた!?!」

「チエエエイ！」

くっ、マズい。一応避けられるが、この炎熱・・・スリップダメー

ジが地味に痛いな。ここは、一旦引くか！

「ほっと」

2〜3回バックステップを繰り返して距離を稼ぎ、相手を観察する。よく見るとブレイズアップモードは解除されているな。消耗が激しいようだ。厄介なのは、クイーンを破ったあの力だ。防御破壊ならまだ良いが・・・試すか。

【エンチャント！マキシマムドライブ！】

【トリガー！マキシマムドライブ！】

「喰らえ！『多弾・トリガーマルチバースト』!!」

俺は腰のスロットにエンチャント、エッジにトリガーを装填し、4色の光弾を放った。それぞれが違う属性のエネルギーが圧縮された属性炸裂弾だ。これの対応で、相手の能力が分かる筈。

「フツハツタツハアツ！」

「斬った、か・・・読めたぜ。ならば！」

俺は勝負を決める為のメモリを2つ取り出す。対してネオクローズは、使わせまいと突っ込んできた。まあ、想定済みだ。

「ハッ！」

俺は思考加速を発動して、取り出したメモリを上投げた。そしてネオクローズの斬撃をスウエーバックで躲し、その懐に潜り込んで掌底でぶっ飛ばす。そしてエターナルエッジを逆手持ちにして前に突き出し・・・

『アイスエイジ！マキシマムドライブ！』

落ちてきたメモリを落下のままに装填、マキシマムドライブを発動する。それにより周りの気温が一気に低下し、コンクリートに霜が降り始めた。

「くっ・・・でも、これぐらいなら！」

「いいや、お前は終わりだ」

——ヒート！マキシマムドライブ！——

俺の言葉と同時に、ネオクローズの後ろで何かが光る。

「ツ！響！伏せろオ!!」

奏は気付いたようだ。俺は地面にエッジを突き立て、衝撃に備え

る。そして・・・

『禁忌・終焉極大刃炎剣』!!』

——光、衝撃波、爆音、暴風——

それら全てがほぼ同時に俺達を襲った。周りの瓦礫やビルの窓ガラスが吹き飛ぶ。だが俺はエターナルローブのお陰でほぼダメージ無しだ。

「キヤアアアアアッ?!」

一方、ネオクローズは対応出来ずに吹っ飛んだ。そしてビルの壁を2枚ブチ破り、3枚目で止まって変身解除。戦闘不能だ。

『おおっと!大爆発によって未来選手ダウン!見学室に送られます!』

『便利なシステムだなあオイ』

ホントにな。バーチャル空間だから死んでも大丈夫って、雄英にも欲しいわこの訓練室。と、そうだ。

「よく理解してくれたな!」

「当たり前でしょっ?」

フランと三奈が1ジャンプで合流した。フランの手には、ヒートメモリが握られている。

「けっ、やるなあアンタ。まさか、投げ渡すとは」

「いったたたあ・・・」

どうやら、ガングニール姉妹は耐えられたらしい。まあ、正面だったからな。

「ハア、ハア・・・響は、今ので大分キツそうだな・・・ツチイ!どおりやつ!!」

——STARDUST∞FOTON!——

おっと、奏が槍を上投げた・・・しかも分裂してるって事は、恐らくマイクロミサイルだ。どうやらあの槍、ゲイボルグみたいにも使えるらしい。こういうのには・・・これだ!

「三奈!竜巻だ!」

【サイクロン!】

「イエッサー!」

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

久々に使う技だが、大丈夫だ！三奈にサイクロンを投げ渡すと、それを受け取った三奈は腰のマキシマムスロットに装填した。それにより俺達を中心に風のエネルギーが集まって来る。

「竜巻！天国ヘブンズトルネードの旋風!!」

そして、2人で息を合わせてヘブンズトルネードを発動。巨大な竜巻が巻き起こり、降ってくる大量の刃を全て逸らした。それらは周りの地面に突き刺さるが、俺達には全く当たらない。

「嘘……だろ?」

奏が引きつった顔をしてるが、残念ながらこれが現実だ。さてと……

「フィニッシュは必殺技で決まりだ！」

「ユニコーン！サイクロン！マキシマムドライブ！」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

「タブー！マキシマムドライブ！」

「ライダー・ツインマキシマム!!」

三奈とフランが2人でライダーキックを放つ。それは2人が背中を向け合い、エターナルレクイエムに似た特殊なライダーキックを放つという変わった形だ。

「行けるか響！」

「ハイッ！」

と、響は奏の後ろに回った。そして奏は槍の穂先を回転させ、それによって発生した竜巻を前に突き出す。

「オリアアアアアッ!!」

「何!?!」

何と、響がタイミングを合わせて槍の尻を殴った！槍が加速し、エネルギーも増幅……これは！

「ウワアアアアッ!?!」

タイミングがズレ、尚且つ出力も上がった竜巻に、2人は吹っ飛ばされてしまった。そして射線上の俺にも、竜巻は襲いかかる。

「ツチイ、流石だなアガングニール姉妹!だが——」

「——計画通り！」

「えっ!？」

「何だと!？」

俺は腰を落として力を溜め、右拳を構える。すると、ユニコーンによつて右手がドリル状のエネルギーに覆われる。更に、緑色をした風のエフェクトも巻き付いた。

「この暴風、貰ったぜえ!!」

俺の声に呼応するように風はエターナルの純白の装甲に溶け込んで行き、右手の風エネルギーが更に跳ね上がる。

「ま、まさか!」

「これを狙ってッ!？」

「さあな!行くぜエエエエッ!!」

右手のエネルギーは尚も膨張を続け、遂には俺の身長と同程度の直径になった。そしてそのエネルギーを噴出し、敵を貫く必殺の一撃!

「超!疾風千刃シンンッ!!ギイガアアア・・・ドリルウウ・・・ブレイイイクウウッ!!」

「ウアアアアアアアッ!!」

そのドリルは2人を飲み込み、ビルを3つ貫通した。エネルギーが切れてドリルが消滅すると、ガングニール姉妹は揃ってギアが解除されていた。

『けっちやああくッ!勝者!パラレルコーナー第1チイイムツ!!』

デッドプールの審判と同時に、俺達は休憩室に転送。先ずは、勝利をもぎ取る事が出来た・・・

「つ、疲れたああ・・・」

「強かったねえ。保須のゴキ共とは大違いだった・・・」

「いやはや、久し振りに良い戦いが出来たな!」

俺達は見学室に戻り、パートナー達と話す。流星は命懸けの戦いを生き抜いた人達だな。強い強い。

「あんなの勝てる気しねえよ・・・」

「3人共、強過ぎない？」

「凄いよ3人共！」

相手さんは、三者三様なリアクション。まあ当然かな。

「なあ、あの大爆発は何だったんだ？」

と口を開いたのはクリス。確かに気になるよな。

「そこはボクが説明します！」

お、観測係だったエルフナインが手を上げたな。ここは任せるとしよう。

「頼んだ」

「はい！まず出久さんは、アイスエイジメモリと同時にヒートメモリを投げ、フランドルさんに渡しました。その直後に、アイスエイジメモリのマキシマムドライブを発動。これにより、周りの温度は急激に低下しました」

「ああ、急に尋常じゃない程寒くなったよな」

椅子に座った奏が応答する。疲れからか、かなりグデツとしていた。

「実はあの時、地面の氷から超高密度の二酸化炭素が検出されていたんです」

「・・・ええつと、どういう事？」

頭にクエスチョンマークを浮かべる響。化学は苦手かな？

「つまり訓練室のあの一带は、一瞬でドライアイスが出来る程に冷却された・・・って事だろ？」

この世界のエボルト、石動仁が分かり易く要約してくれた。いやはや助かる。

「ハア!？」

「ドライアイスだと!？」

コレには奏と親父っさんもビックリだ、当然だな。

「そういう事です。そしてその直後にフランドルさんが使った、ヒートメモリのマキシマムドライブと終焉極大刃炎剣^{レイヴァー}。その莫大な熱量によって、冷えて収縮していた空気が爆発的に膨張。その結果、あのような大爆発を起こしました。衝撃波が発生していたので、恐ら

く空気の膨張スピードは音速を超えていたと思われます」

「・・・良く無事だったな・・・」

翼が顔を青くして言った。確かに普通の人間なら、まず間違いなくミンチになるだろう。シンフォギアは防御力も優秀らしいな。

「オイ出久、街ではぜってー使うんじゃないぞ」

「分かってるよ、かつちゃん」

かつちゃんに釘刺された。まあ仕方無いわな。

「にしても、えげつない力だよなくそれって・・・」

「・・・なあ出久、少し良いか？」

「ん？どうかしたかな？」

仁が話し掛けてきた。何か質問かな？

「お前・・・人を殺した事、あるんじゃないか？」

・・・やっぱり、修羅場潜った仮面ライダー・・・それもエボルなら、判って当然か・・・

「・・・別に、言いたく無いのなら言わなくてもいいんだが・・・」

「え？仁君、どういう・・・」

「ああ、殺したよ。もう、数えるのが億劫になる程度には、な・・・」

「「「「「ツ!」「」」」」」

その瞬間、三奈、フラン、デップー、惣司、仁以外の目が見開かれた。

「出久・・・」

「良いの・・・？」

三奈とフランが不安そうに俺の袖を掴んだ。その目は暗く、俺を心配してくれているのが見て取れる。

「大丈夫だ。コレは、俺の犯した罪・・・」

そう言っつて、俺は《あの日》の出来事を話した。助けた少女に初めてお礼を言われて、嬉しかった事。その少女から花を貰い、今も持っている事。そして・・・あの層共の事・・・

「それから俺は、一時期ヴィジランテとして敵を殺したりしていた。フランの家にお世話になった事もあったな・・・そんな時に三奈と巡り会って、今の俺が居る」

全員が黙り込んだ。響と未来は声を殺して涙を流し、クリスは拳を握り締め、奏と翼は目を伏せる。かつちゃんは掌から爆発が漏れ、麗日はスカート裾の裾を握り締めていた。そして親父っさんは唇を噛み締める。デッドプール、惣司、仁は大きなリアクションこそ無いものの、その目には確かな怒りが燃えていた。

「・・・こんなのって・・・無いよ・・・こんなの、あんまりだよ・・・」
「ひ、非道い・・・です・・・」

・・・響とエルフナインは、遂に泣き出してしまった。その頭を、未来が泣きながら撫でる。優し過ぎると言える程に優しい響達には、少々キツかったらしい。

「い、出久・・・」

かつちゃんも震える声で俺を呼ぶ。

「でも、今は大丈夫だ」

俺の言葉に、全員が顔を上げた。皆目に涙を溜めており、俺の事を想ってくれているのが判る。

「今の俺には、三奈やフラン・・・他にも、支えてくれる仲間が沢山居るから。それにあの時、三奈は俺をダークサイドから引っぱり上げてくれた。そのお陰で、今は幸せだ」

全員が、息を吐くのが聞こえる。俺は、響に歩み寄った。

「だから、俺みたいな奴が居たら、引っぱり上げてやって欲しい。頼むぜ?」

「・・・うんっ!」

そう言いながら、俺は響に手を差し出した。響はその手を取り、俺達は握手する。

「それで、こっからこう、こうして、こう!」

「!」

そして、弦太郎さんの《ダチの印》を交わした。三奈とかつちゃん、フランは、それを見て少し反応する。

「よし!しみたれた話は終わりだ!こんな空気にした俺が言うのもなんだが、下がった気分は試合で上げようぜ!」

そう言っつて、俺は親指を立ててサムズアップ。

「そう、だな・・・」

「そうだ」

それに吊られ、皆に笑顔が戻った。

「なあ、そのダチの印、俺にもしてくれねえか？」

「俺も頼む」

と、惣司と仁が出てきた。

「喜んで」

俺は2人ともダチの印を交わし、互いに笑顔を見せ合う。

「さて！第2試合の時間が迫って参りましたア！チームの方々は、控え室にてお待ちください！」

デップーが元気よく宣言した。

「・・・フハハッ！やっぱりシリアスブレイクは、お前の専売特許だな！」

俺は笑い、皆も笑顔になった。さて、次の試合が楽しみだな！

戦姫絶唱エボリユーシヨン！／3人のE（＋5人）

③

（出久サイド）

「お互い、散々だったなア・・・」

「全くだよ」

俺の言葉にぐでつとした体勢で返す惣司。今し方、この世界のエボルと試合した所だ。だが、結果は惨敗。現在休憩室で反省中だ。俺達の持ち味である「馬鹿みたいに多い手数」を使う前にやられちまったよ。畜生・・・

「ロケットで波状攻撃仕掛けたら変わってたかも・・・」

「ああ、確かにな。俺のメモリにもあるぜ、ロケット。フォーゼ先輩のロケットモジュールみたいに使って大空を舞うもよし、相手さんに暖かけえマイクロミサイルのシャワーをプレゼントするも良しの優れモノだ」

「ヒュッ、そりや暖かそうだ」

にしても、まさか終わり無き地獄を真つ向から撃ち破られるとは思わなかったな。初めてで手加減出来なかったのに、その上でだ。あれが、過剰進化したエボルの力・・・

「だが、思わぬ収穫もあったぜ」

「ん？収穫？」

俺が振り向くと、惣司は自分の腹に手を突っ込んでいた。俺は資料で見た事があるから驚かない。そして間もなく、惣司は手を引っこ抜いた。その手には、一本のボトルが握られている。

「新しいボトルか？」

「ああ。これは、アイツが使った【ワード】のエネルギーを吸収して創ったボトルだ。言霊を受けた時、ブラックホールフォームに変身してて良かったぜ。ま、出来てクリエイション止まりだがな」

ははっ、転んでもタダじゃ起きねえなくコイツ・・・

「さてと、次の試合だな」

「じゃ、戻るか」

(惣司サイド)

「え、そつちにもブラッドスターク居んの？マジで？」

「マジマジ。顔も今のお前ソツクリだ。カフエ《n a s c i t a》のマスターもやってる」

異世界の奴に先越されてたか・・・よし！

「出久、これそのマスターに渡してくれる？」

俺は出久に小箱を渡す。真つ黒な地に、牙を剥くブラッドレッドのコブラがプリントされた箱だ。出久も一目見て、中身を察したらしい。

「良いのか？貴重品なんじゃ・・・」

「複製出来るようになったから大丈夫さ」

「・・・じゃ、コレは渡しとくよ」

【ボーダー！マキシマムドライブ！】

出久はスキマを開き、その中に小箱を投げ込んだ。

「俺のハンドラアーマリーオブバンドラの武器庫に似てるな」

「ああ、確かに・・・そう言えば、ビルドドライバーやスクールアアツシユドオライバァー！はあるのか？」

「何でそんなに声真似上手なんだよ」

マジで完璧な若本ボイスだったぞ。

「あく、それなんだがな。どういう訳か、スクラッシュだけが無いんだ。ビルドドライバーもエボルドライバーも、ハザードトリガーもエボルトリガーもある。フルボトルも、レジエンドベストマッチもあるんだ。なのに何でだろうな？」

「そりゃわかんねえな」

ウーン、と2人で考えてみるが・・・

「やくめた。わっかんね」

全く同時に諦めて、俺達は見学室に戻った。

「出久〜！」

「フンヌイ！」

と、同時にフランちゃんのロケットタックル。慣れているのか、出

久は腹筋で受け止めた。流石は彼氏だねえ。

「大丈夫だった!？」

「今大丈夫じゃ無くなる所だった」

訂正、ダメージはあつたらしい。まあ吸血鬼だからね。仕方無いね。

「あ、ごめんなさい・・・」

「良いんだ。もう慣れちゃった」

「やっぱ慣れてるんだ。」

「よう！良い試合だったな！」

と、仁が歩いて来た。わあ嬉しそうな足取り。

「よく言うぜ。俺らの本領発揮する前にさっさと倒しやがって・・・まあ、戦闘じや正しい判断か・・・」

「出久が負けるの初めて見たよ、アタシ・・・」

「ああ。今までは、あつて精々相打ち寄りの撃破だったからな。あんな風に一方的に負けたのは、兄さん達以来だ」

流石に、星の記憶では星狩りに勝てんか。

「そう言えば仁、お前スクラツシユドライバー持ってる？」

「ん？持ってるけど・・・」

「やっぱり持ってるよな。」

「いやなに、俺のバンドラアーマリーオブバンドラの武器庫には、何故かスクラツシユだけ入ってないからな。気になっただけだ」

「使ったブラッド族が居なかったからじゃねえの？」

「・・・それや」

「なあるほどね・・・確かに、ビルドドライバーとハザードトリガーは仮面ライダーブラッドが使うわ。」

「・・・なあ仁、スクラツシユドライバーを2つ、今すぐ用意出来るか？」

「ん、出せるぞ？ホレ」

「そうやって仁はスクラツシユドライバーを2つ取り出し、出久に渡す。」

「どうした？出久」

爆豪の質問に、出久はドライバーに向けていた視線を上げた。

「・・・この先、もしかしたらライダーシステムを使う敵が現れるかも知れない」

「ツ！」

「・・・まあ確かに、俺みたいな平行世界移動能力を持った奴なんていくらでも居るからな。」

「ライダーシステムに勝てるのはライダーシステムだけ・・・なら、抑止力が多い方が良いと思ってるな」

「・・・出久、まさか・・・」

三奈ちゃんは気付いたらしいな。

「・・・かつちゃん、麗日・・・ライダーシステムの保有者になつてくれないか？」

「ツ！」

「やっぱりな。2人共ハザードレベルはそこそこ高いから、ライダーシステムも使えるだろう。」

「待ってくれ、緑谷君。流石に危険だ」

「分かってる。だから、やるかどうかは2人に任せるさ。それに狂暴化の副作用も、システムをグレードダウンすれば問題無い」

見れば、仁は出久の持っているスクラツシユドライバーをブラッド族の能力で弄っていた。

「・・・やる」

「・・・うん、私も！」

「なっ！良いのか!?!」

まあ、親父っさんからしたら子供が戦い方・・・それも対人戦のやり方を学ぶって時点で、言いたい所があるだろう。

「何時までも出久達3人じゃ、その内手が足りなくなんだろ」

「それに、身を守る力もあつた方が良いし！」

「・・・」

「親父っさん、諦めてくれ。こっちじゃ、こんな風に歪んでもいなきや生きられないんだ。俺だって、ヒーローも敵も無くなれば万々歳なんだけどな・・・そんな時代は、当分訪れそうも無い。と言うか、それ

で無くとも人口飽和で奪い合いになってるんだ。人口削減でもしない限り、平和には成らない」

「そう言い、出久は肩を竦めた。」

「・・・分かった。そもそも、平行世界の常識に口を挟むべきでも無かったな」

折れてくれたようだ。さて、今戦ってないメンバーは爆豪、麗日、デッドプール、翼、弦十郎、クリスちゃんだな。じゃ、決まったも同然だ。

「じゃ、次の試合で馴らしをしようか。丁度、人数も合ってるしな」「ヒヤッホウ！ようやく俺ちゃんの出番だぜいベイビー！」

デップーのテンションが跳ね上がった。まあ今まで空気だったからな。

「かつちゃん。ソイツは怪我しても5秒あれば復活するから、盾にしても問題ねえぞ」

「了解」

「いや出久！俺ちゃんの扱いヒドくない!?!」

「お前にやコレが丁度良い」

「ははは、愉快だねえコイツ等は・・・」

(勝己サイド)

「画面の前のお友達諸君！待たせたな！今回の主役、デッドプールだッ！」

「いや喧しいなプール」

「まったく、何言ってるかわかんねえわ。」

「あ、因みに今は更衣室ね。ほら、出久達って今まで雄英の制服のままだったからさ。弦ちゃんがジャージ貸してくれたってワケ。因みに糞作者は書いてないけど、出久達もしっかり着替えて戦ってたよ」

「もう無視に限るなコレ」

マトモに取り合っているとコッチが頭可笑しくなりそうさ。今だってタダの壁にノリノリでポーズ決めてやがる・・・

「さて・・・」

「ガチャッ」

俺は、出久に渡されたバツクルを眺める。水色のボディカラーに、黄色いレンチとプレスが付いたバツクル。持っていると、何だか言いようの無い重みが伝わってくるような感じがする。

「コレが、力の重み・・・か」

・・・思い返せば、俺の力は簡単に人間を殺せるモンだ。そんなに強く意識した事は無かったが・・・出久は、こんな重いモンを背負って、振るってたんだな。

「・・・ツシ、行くか！」

俺は立ち上がり、訓練室に向かった。

「・・・いよいよ私達だね、バクゴー君」

「ああ・・・」

訓練室に入り、麗日と並び立つ。ああ、流石に緊張するな・・・

「俺ちゃんが居るから大丈夫さー！」

「・・・」

まあ、実際強いからな。

「準備は良いかね？」

弦十郎のおっさんが聞いてくる。翼の姉さんとクリスの姉さんも、準備万端らしい。

「行くぞ・・・お茶子」

「ッ！・・・うん！」

【スクルアアアツシユ・ドオライバーツ!!】

・・・中々癖の強い音声だな。

「フウウウ・・・」

「グルルルルツ・・・」

—ピキピキピキッ—

【デンジャー・・・】

—デンデンデン♪デンデンデン♪—

俺はゼリーパックの、お茶子は紫色のボトルのキャップを正面に合わせた。お茶子のボトルからはクラック音が鳴り、おどろおどろしい音声で鳴り響く。そして俺達は、それぞれが手に持ったアイテムをべ

ルトのスロットに装填。

【ロボット・ゼアリー！】

【クウロコツダイルツ!!】

—ガコンガカコンツプシュー！ガコンガカコンツプシュー—

待機音が鳴り響く中、俺はレンチレバーに右手をかけて左手で相手を指差し・・・叫ぶ。

【変身ツ!!】

—バリインッ！ピシッ！ピシッ！ピシッ！—
—ガコンツ！プシューツ！—

そして、さしていた指を上に向け、クイクイツと招いた。

【潰レルツ!!】

すると俺達の周りに大きなビーカーが現れ、それぞれクリアブラツクと紫のゼリーがその容器を満たした。

【ナアガレエルツ!!】

更にお茶子の容器の横には大きなワニの顎が現れ、俺の容器は捻れて身体に密着してスーツに変わる。

【溢レツ出ルツ!!】

—バキインツ!!—

最後に俺のスーツの頭から噴出したゼリーがアーマーを形成、お茶子のビーカーは出現した顎に砕かれてスーツに変化。更にスーツの顎に付いていたワニの顔がお茶子の顔を覆うブラツクのクリアバイザーを噛み砕いて罅を入れ、模様を造った。その衝撃で、胸を覆う黒いアーマーにも稲妻のような白いビキビキ模様が入る。

【ロボット・イイン・グウリツスウ!!】

【クロコダイル・イン・ローグ・・・】

【ブルルラアアアツ!!】

—キヤアアアアアツ!—

女の悲鳴が響き、俺達はライダーシステムの鎧を纏った。

「仮面ライダー・・・《グリス・ライト》・・・」

「仮面ライダー、《ローグ・ライト》・・・」

「ワオツ！2人共カッケー！」

デッド、雰囲気ブツ壊しやがったな・・・まあ良い。

「心火を燃やして、ぶっ潰す！」

『訓練開始！』

出久のアナウンスを聞き、俺達は走り出した。

(NOサイド)

「オラアッ！」

—BBBBBOOM!!—

爆豪：…否、グリスは開幕と同時に弦十郎に飛び込んだ。爆速ターボはライダーシステムによって出力が底上げされ、10m以上あった距離を一瞬で詰め切る。

「うおっ!？」

流石のOTONAも反応しきれなかったらしく、ほんの少しだがバランスを崩した。

「おおらよッ!!」

—BOM!!—

その隙を見逃さず、爆豪は弦十郎の腹を思いっ切り爆破して大きく吹っ飛ばす。

「なっダンナ!？」

「司令!？」

この事態に、2人の装者は弦十郎の吹っ飛ばされた方向を振り向いた。そう——

「こんな状況で余所見……」

「何で赤色か気になるでしょ!？」

——振り向いて、しまった。

「何!？」

「しまった!？」

2人は正面に向き直るが、その時には2人は攻撃の射程範囲にまで近付いている。

「フッ!？」

「血が出てもバレないからだよくん!？」

麗日はクリスの胸部を狙ったパンチを、デッドプールは翼の顔面を狙ったドロップキックを繰り出した。装者はそれぞれバックステッ

プとハンドスプリングで何とか避け、距離を稼ぐ。

一方グリスは・・・

「オラオラ！爆速ジェットオ!!」

「くっ！何という反射神経・・・」

空中でヒット&アウェイ戦法を使い、飛行能力を持たない弦十郎に對して有利な戦い方を展開していた。度々弦十郎が蹴飛ばしたり投げってくる瓦礫も、見てから避けるか爆破で粉碎している。

見学室は・・・

「^{ダンナ}師匠を押してる!!」

「あの人間かどうか疑わしいレベルの強さを持つ弦十郎さんを!」

「^二ヒデエ言われ様だ・・・」^二↑出&三&惣

当然と言うべきか、こうなっていた。

「クッソ！コレでも喰らいやがれ!!」

クリスは目の前の2人に向けて、6門ガトリング2丁を乱れ撃つ。

「フッフーン、来いよ」

だが、デッドプールの勢いは慌てずに背負っていた日本刀を両方抜き放ち・・・

—キインツ—

弾丸を斬り落とした。

「フンフンフンフンツ！貧弱貧弱ウ！W R E E E E Y!!」

—カンキャンキンキツカキンツチインツ—

デッドプールの勢いは止まらず、弾丸の雨霰を中の人ネタを叫びながら弾く。そして・・・

「ウリヤアアアツ!!」

—パキインツ!—

最後の一発を、斬り落とした。

「フウウウ・・・」

「ば、馬鹿なツ・・・」

「嘘、だろ?」

翼は目を見開き、クリスは口元を引き痺らせる。当然だろう。あの銃弾を全て防いだ様に見えたのだから。しかし・・・

「あく……早いな、めっちゃ撃たれた」

「……は？」

その雰囲気をブチ殺してくれるのがデッドプールだ。よく見れば、彼のコスチュームには穴が開いており、出血もしているのが見える。

「ね？血い出てもバレ難いっしょ？それと作者さあ。俺ちゃんに映画と同じ弾斬りやらせたかったただけだろ？」

メタ発言も欠かさないデッドプール。そんな事言ってる間があれば変身したらどうなのだろうか。

「ああハイハイ」ガッチョーン

ーキュ。ピーンツー

【デンジャラス・ゾンビィ！】

「変しいん！」

【ガツシャットウ！】

【ピロンツバ・グ・ル・アアップ！デンジャラアスゾンビィ！

ウオオオオオオ！】

「うっそだろオイ!？」

「え、仁君？どうしてそんなに驚いてるの？」

驚く仁に響が訊ねる。知らない人からしたら分からないだろうが、知ってる人が見れば分かる。アレがどれだけヤバいのか。

「……不死身なんだよ、アイツ」

「……え？」

「しかもデッドプールが変身者だから……うん、お前ら全員の必殺技を一齐に喰らって、何事も無く起き上がるぞ多分」

「……ええ？」

「アレ作ったの俺な」

「何てモン作ってんだよ出久……」

混乱する装者。そして出久のカミングアウトに、惣司が突っ込みを入れるのだった……

「さて、行くぜエ〜！」

レベルXに変身したデッドプールは、重心が安定しないグニヤグニヤした足取りで走った。上半身はグワングワン揺れるし足取りも

覚束無い上にステップもランダムだしで、クリスマスも中々照準が合わないようだ。

「ハッ！」

—ギヤリンツ！—

ゾンビゲーマーのバイザー部分を斬りつける翼。だが・・・

「利くか〜ん〜ぞお〜？」

「ぴいつ!？」

一旦海老反りになってから、有り得ない動きでゲナムが復帰した。その逆再生のような不気味な動きと光るオッドアイに睨まれ、クリスマスが涙目になる。

「何だコイツは!？」

「ヴェエハハハハハハハッ!だあれが教えるかアツ！」

変身して言動が神寄りになってしまっているデッドプール。こうなると最早手が着けられない。

「くっ!ハアアアアッ！」

—千ノ落涙—

本来この技は広範囲に剣の雨を降らせるモノだが、今回はその剣を一点に収束させ、ゲナムに降り注がせた。

—ズガガガガガガガガガッ!—

「・・・流石に、少しは利いてくれたか？」

少々の期待を込めて、土埃の舞う空間を凝視する翼。だが・・・

—ピュルルアアアアン!ピュルルアアアアン!—

「!?!」

その期待を裏切るように土埃の中から響く、無慈悲で危険なアラート音。そして2人が慌ててアームドギアを向けた時・・・

「クウリティカアルツデアッ?ドゥ!!」

「ピギヤアアアアアアアアッ?!?!」

ゾンビゲーマーの大群が現れた。纏まらない動きの癖して恐ろしい程の猛スピードで距離を詰めて来るゾンビ達に、堪らずクリスマスは大乱射。

『ヴォアアアアアア』

「ツ~~~~~~~~!!」

だが無意味だ。

弾丸など全く意に介さず、ゾンビゲーマーの群れはにじり寄ってくる。その恐怖から、仕舞には声にならない声を上げて号泣し始めてしまったクリス。

「くっ！雪音！しっかりしろ！」

ゾンビゲーマーを斬り伏せながら叱咤する翼。しかし、右から来たゾンビを蹴飛ばした時に気付いた。このゾンビ達が・・・

ーピ・・・ピ・・・ピ・・・ピ・・・ピ・・・ピ・・・

赤く明滅している事に。

「ツ!!拙い逃げるぞ雪n——」

ードカアアアアンツ!!——

「グアアアアアツ！」

「もうやだああああ!!」

結局逃げられずに2人共戦闘不能。仲良く見学室に送られた。

『・・・えぐっ』

『それ、作ったお前が言うことか?』

『あれ?そう言や麗日ちゃんは?』

千ノ落涙辺りからもうグリスの方に向かってたぞ。

「ウゾダドンドコドオーン！」

『デツプー、急に冷やし土下座しないの』

「ぬう・・・ハッ！」

ードゴンツー

弦十郎は足元を踏み抜き、その隆起でライダー達を攻撃するが・・・

「オラアツ！」——BOM——

「タアツ!!」——バゴンツー

グリスには爆破で、ローグにはパンチで碎かれる。流石の弦十郎も息が切れてきた。

「喰ウらえや!!」

「ハアッ！」

(くっ・・・この2人、それぞれの攻撃の裏側から追撃して来るッ!)
そう。ローグとグリスは、片方が左に行けばもう片方は右に、上を攻めれば下からと、息のあった嫌らしい戦い方をしていたのだ。しかもローグは、いくら殴ろうと装甲の白い罅を増やして防御力を上げてしまうだけ。弦十郎の疲労の原因はコレらが大きいだろう。

「決めるぞお茶子オ!!」

「了解ッ!!」

(来るかッ!)

—ガコンツプシューツグチュク〜!—

「スクラップ・フィニッシュウツ!!」

レンチレバーを叩き下ろしてスクラッシュゼリーを潰し、グリスは両肩のマシンパックシヨルダーと背中からヴァリアブルゼリーを噴射して飛翔。

「オリアアアアアアアアアッ!!」

そして弦十郎に右足を突き出して、ライダーキックを放った。

「その程度ならば・・・ムンツ!!」

—ガチッ—

弦十郎は腕をクロスする事でそのキックを受け止める。だが同時に、弦十郎は大きな違和感に襲われた。

(!?か、軽いッ!?)

「判ってんだよオんな事は!!」

—BOM!—

グリスはもう一度、今度は爆破によって上空に舞い上がった。そしてそのまま弦十郎に向かって回転しながら落下し、掌を向けて・・・
強化・榴弾砲着弾ッ!!

—DGOOOOOOOOM!!—

大爆発を噴射した。しかも真上からなので、弦十郎が明後日の方向に吹っ飛ばされる事も無い。しかし・・・

「ハアアアアッ!!」

コレで倒れないのがこのOTONA。何と爆破の衝撃を発動で5

割程掻き消したのだ。

「あ、危な——」

「バリイン！ビシツビシツビシツ！——
「ッ!？」」

背後からの音に振り返った弦十郎が見たのは……

「クラック・アップ・フィニツシユツ!!」

「ダアアアアアツ!!」

巨大な紫色の鰐の顎門アギトを象ったエネルギーで覆った足を、弦十郎を噛み砕かんと大きく開くローグだった。

「ぐあああッ!!」

ローグはその顎門で弦十郎を挟み込み、ガチンガチンと何度も噛み付く。そして最後に腰を捻り、鰐がデスロールで肉を喰い千切るが如く弾き飛ばした。

「ガハツ……」

流石の弦十郎も気絶し、見学室に送られる。

『パラレルチーム！ウィイイイン!!』

「ツシヤア!!」

「ヤッター!!」

出久のアナウンスで2人は喜んでジャンプ。その後「イエエイ!」とばかりにハイタッチした。

「ねえ俺ちゃん置いてか!」

(出久サイド)

「凄いコンビネーションだった」

「師匠が……」

「負けた……」

「だどっ!？」

俺は2人に賞賛の言葉を贈り、腕を組んだ。響、未来、奏はポカーンとしている。

「ひっぐ、えっぐ……」

「デップー、土下座」

「大変！申し訳御座いませんでしたッ!!」

泣いているクリスマスと土下座するデップー、そして土下座を命令しつつクリスを宥める三奈。うん、安定のカオスだ。

「つと……」

「ふ……」

麗日とかつちゃんは変身解除し、大きく息を吐いた。

「流石に、疲れたな」

「そうやね〜」

やっぱりある程度負荷が掛かるらしい。だが、拒絶反応とかは無さそうだな。良かった良かった。

この日、新たな同士が誕生した。その名は仮面ライダーグリス・ライトと仮面ライダーグ・ライト……祝おう。新たなライダーシステム保有者の誕生を……

「HAPPY BIRTHDAY♪グリス&グ……」

「あ、画面の前の皆。次回からお遊びのゲーム回だぜ☆乞うご期待！」

「分かる？この罪の重さ……謝ろうよ」

「スンマセンシタ」

戦姫絶唱エボリユーション！／3人のE（＋5人）

④

「・・・」

——ドン！——

「・・・」

——ドン！——

「|||||」

——ドドンツ！——

ここはカフェ『nascita』の店内。扉には『貸切』の看板が下がっており、ブラインドも閉まっている。

店内の中心には4つの四角いテーブルがくつつけられて置いてあり、チョコケーキ、ショートケーキ、チーズケーキが皿に盛られて乗っていた。そしてそのテーブルを挟み、デッドプールと出久が無言で睨み合っている。その重々しい雰囲気、装者達やヒロアカ組は勿論の事、あの惣司と仁さえもが黙り込んでしまっていた（因みにエルフィンには実験室でDNA解析中、親父っさんは仕事に戻った）。そんな中、遂にデッドプールが口を開く。

「・・・王様ゲームしたいと思いますツ!!」

「死んで下さいやがれツ!!」

そして、出久に0、1秒で暴言を投げ返された。

(出久サイド)

「え〜？何で〜？」

グネグネと身体をくねらせながらゴネるデッドプール。見れば右手に割り箸12本、左手に赤ペンと黒ボールペンが入った小振りな壺を持っており、もう準備万端。おっそろしい手際だ事・・・

「お前に王様ゲームなんぞさせたら碌でもない事にならない筈が無いからだよ！」

質の悪い事に、デッドプールが持つてる運命を味方に付けるナニカのせいで、大体コイツの都合の良い方向に進んじまう。そしてコイツは初

対面の人間の武装状態で興奮するような、見事なまでの見境無し糞野郎・・・やらかす。確実に、ナニカやらかす！やらかしやがるッ！

「えく？それってヒドくね？」

「イヤ！ヒドくないね！」

「王様ゲームやりたい人！手く上げた!!」

「オイデツプウウ!!」

コイツ多数決に・・・まあ、こんな事に手え上げる奴なんて・・・

「ハイイ！」（^^）／（響・奏・エボルト×2・彼女2人・麗日の計7人）

・・・ええ？

「だって面白そうだし！」by響

「翼もこういうゲーム経験した方が絶対良いぜ！」by奏

「面白い事になりそうなので」byエボルト×2

「やった事無いけど・・・」by三奈

「楽しくなりそうだしね！」byフラン

・・・嘘だ・・・

「ヴゾダドンドゴドオオオアツ!!」

「「「「「「王様だくれだ！」「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

結局、やることになった。フランはルール知らなかったから俺が教えたよ・・・よし、こうなりや自棄だ！トコトン楽しんでやる！

「あ、俺ちゃん王様!!」

「ナニイツテンダ！フジャケルナツ!!」

「ふざけてなんかいませくんw」

クツソ！寄りによってコイツが最初かよ!!せめてソフトなヤツに・・・

「じゃあ、全員コスプレして！あ、衣装は惣司君にお任せね！」

「・・・惣司、露出過多のヤツとか出したら・・・死ぬ寸前まで痛めつけるからな？」

「わ、判ってるって・・・（おお恐っ。ロウリイよりも恐え）」

俺の圧を受けながら、惣司はブラッド・モーフィング（適当に命名）

で俺達のジャージをコスチュームに変えた。内容は・・・

俺・茶色いコンバーターリングが付いた暗緑色のアサルトベスト
(どう見ても4号)

かつちゃん・カズミンのモッズコート

麗日・ローグカラーのライダースーツ

三奈・ライダー少女クウガ

フラン・ライダー少女キバ

惣司・コート、マフラー、マゼンタのトイカメラ（おのれデイケイ
ド）

仁・鷹山さんコス（つか、こっちのジンとだだ被りだな）

響・ライダー少女カイザ

未来・ライダー少女クロノス

奏・ライダー少女響鬼

翼・ライダー少女剣

クリス・ライダー少女ギャレン

という感じになった。露出も少ないし、まあ問題ないだろう。

「良くやってくれた惣司。グツジョブ」

「感謝の極み」

確かヘルシングだっけか？そのネタ・・・

「ウンウン、良きかな良きかな」

デップーは腕を組んで頷いている。腹立つな・・・

「ほら、次行こー！せーの！」

「「「「「王様だ〜れだ！」「「「「「「」」」」」」」」

俺は・・・③！さつきダデイのネタ使ったからか!?

「あ、俺だ」

今度は惣司か。まだまともそうだが・・・

「1番から7番までの全員、俺の作ったコーヒーを飲め」

・・・ウエイツ!?

「ウエイツ!?!」

おっと声に出ちまった・・・ってそんな事あどうでも良い!

「おいッ！俺達にまさかア、アレを飲ませようとしてるのかッ!?!」

「・・・ハハツ・・・」

おつとオ？仁から諦めたような声か！コレは引いてしまったのか？1〜7のどれかを！

「まって、俺ちゃん4番なんだけど・・・」

あ、デツプーは早々にツケが回って来たな。ア〜アご愁傷様（建て前）地獄を楽しみなア！（本音）

「えっと、私は9番だったけど、響は？」

「私11！助かった！クリスちゃんは・・・」

「・・・（チーン）」

「クリイイスツ！安心しろ！寂しい思いはさせねえからな!!」

「あ奏さんも当たったっぽいねコレ」

わあお。この見事な阿鼻叫喚よ。

「・・・なあ出久。今から飲まされるのつて、コーヒー・・・だよな？」

「劇物とかや無い・・・よね？よね？」

「あくああ、かっちゃんも麗日も当たっちまったか・・・」

「出久（君）ツ!?!」

さてと・・・当たったのは俺、仁、デツプー、クリス、奏、かっちゃん、麗日の7人だな・・・シンフォギア組はともかく、ウチの2人はヤバくねえか？もしかっちゃんの個性が暴発したり、麗日の狂気が復活したりしたら・・・

「あく、当たっちまった皆。何かまるでこの世の終わりみたいな顔してるけど、俺は普通にコーヒー煎られるからな？」

「「「は？」」」」

・・・何・・・だと・・・!?!

「エボルトが・・・普通のコーヒー・・・（ツヘーイ）？う・・・嘘だ・・・フツ・・・俺を騙そうとしてる・・・ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「で、宝生エムウ！は満足したか？」

「うん、満足」

「「「いや、今の何だよ!!」」」
なのさ!!

やってみたかったんだよ、宝生エムウ。

「まあ、完全ノーリスクなんて面白くも何とも無いので・・・7杯中2杯は、俺の弟子・・・と言うか生徒から『人が死ぬ』認定を貰った、このおっそろしいエボルトコーヒーにしようと思います」

「・・・」

「・・・デスヨネー（泣）」

「ホラホラ、グイツと一気に」

もう煎れてあるし・・・

「ハアツ・・・ハアツ・・・うつく・・・」

「オオイ、だ、だいじょじょうぶかあクリスううううう」

「奏、声が震えてるぜ」

きつと奏も、エボルトコーヒーの餌食になった事があるんだろうな・・・

「よし！皆、せーので逝くぞ！答えは聞いてないっ！」

「ちよっ字が違っ」

「せーの！」

—ゴクツ—

・・・ん！

「お！美味しい！俺のは当たりだ！」

良かった〜・・・ん？皆まだ飲んでなかったのか？

「・・・もう1人ずつ飲むかい？」

「・・・ツシャ！女は度胸だ！」

「奏先輩逝く気か!?な、ならアタシもだ！」

「なら、俺も飲ませて貰おうか」

つと、遂にシンフォギア組の2人が自棄を起こしやがった。

「逝くぞ・・・」

「「せーのっ！」」

—ゴクツ—

「・・・ぷはあ・・・ヨシ！当たりだ！」

「はあああ・・・良かった・・・」

「こんなハハラハラしながら他人のコーヒー飲んだのは初めてだ」

どうやら、3人も当たりだったらしい。クリスは顔面蒼白だが、こ

れは緊張からだろう。

「・・・ツシ、逝くか」

―ゴクツ―

「お、かつちゃん逝ったか」

果たして結果は・・・？

「・・・美味え」

「・・・と、」

「言うことは・・・？」

ギ、ギ、ギ、と錆び付いたロボットのよう顔を見合わせるデツプーと麗日・・・おっと・・・コレは・・・

「・・・ピリツタイム！」

ホイッスルを鳴らすデツプ待てそれ今どつから出した？見間違いじゃなければズボンの中・・・それも前から出したよな？

「却下。王様も命令は？」

「クツ・・・絶対！」

「・・・バクゴー君。お願いがあるんやけど・・・」

「ど、どうした？お茶子・・・」

何か光の無い目になってるぞ麗日・・・

「コレ、飲めたらさ・・・名前呼び、させてくれるかな？」

「・・・ハッ!？」

おおっと想像の斜め上に行くお願いだな。コレは・・・上手く行けば、くっ付くかもしれない。

「ダメ、かな・・・？」

「・・・カツキって呼べ」

「!・・・よしっ!頑張るぞお！」

「糞手抜き脚本作者乙」

「第4の壁の向こう側の人達にしか分からんような事を口走る暇があれば早よ飲まんかい！」

ったく、デツプーの一言でいい雰囲気無しだよ。

「じゃあデツプーさん!一気に逝くよ！」

「・・・よしっ!ここでやらなきや男が廃るな！」

そう言つてマスクを勢い良く外すデッポー。目は珍しくド真剣だ。
「せーのっ!」

「Let's ガンギマリッ!!」
ーグビッー

おう、音が違つたぞオイ……

「かjふえbふbdyfhfgsnしdbd!」

「ツ……ほえ?美味しい?」

「は?」

コレは……一体どういう?デッポーは

「あれっ?おつかしいなく……」

どうやら惣司も分からないようだ。

「……お茶子、チョイ貸せ」

「え?うん。はい」

受け取つたかつちゃんはマグカップを傾け、口に一滴分程含んだ

「ゴベバツ!」

「か、カツキ君!」

……分かつた。分かつちまつたぞオイ……

「大丈夫か?かつちゃん」

「エエツフエフツ……ああ、何とか……」

……絶対あのメモリクトウルフメモリのせいだああ!!

あれの狂気は『異常食』……一応回復はしたが、そうか……味覚に異常が出たか……

「お茶子……ホントに大丈夫なのか?」

「うん。普通に美味しいよ?まあブラツクやからチョット苦いけど」

そう言つてまたくびつと飲む麗日。それを見てかつちゃんは見事に戦慄している。見渡せば、シンフォオギア組とエボルト2人も漏れなく引きつった顔をしていた。うん、まあ、そりやな……

「まあ、良かったんじゃないか?麗日にああは成つて欲しく無いだろ?」

そう言つて俺が視線を向けて顎でしゃくつたのは、あの殺人兵器エボルトコピーをカップ一杯一気飲みして、見事にガンギマつちまつたデッポー。白目

を向いて泡を吹いており、手足はビクンビクンツ！と痙攣している。

「・・・確かに」

「じゃあデツプーの分抜いて、次行こうか」

「切り替え早いのかな仁」

「今回出番少ないからな」

コイツまでデツプーみたいな事言い始めやがったぞオイ・・・

「じゃあ次行くぞ。せーの！」

「」「」「」「王様だくれだ！」「」「」「」

「あ、私だ」

未来か。さてさて、命令は？

「えくつと・・・(そう言えばこのショートケーキ、桜桃が乗ってる・・・あ、そうだ！)じゃあ、7番と4番と2番の人は、桜桃のヘタを口の中で方結びして下さい！」

「あ、俺4番だわ」

「私7番だったよ」

「あ！出久と三奈ちゃんもなんだ！」

ワオ！まさかの俺のハーレムか・・・よし。

「まずは、ケーキ食わないとな」

「何気に全く触ってなかったからなお前ら。折角作ったのに・・・」

「何か、ゴメン。今から食うからさ」

仁に謝りつつ、俺達3人はショートケーキを口に運ぶ。お、これは・・・

「んくつ！これ美味しい！」

「本当！すごい美味しいよ！」

「流石は喫茶店のマスターだな」

ホントに美味しい。特にこのクリーム・・・

「柚子の皮だな、この香りは」

「あ、分かった？隠し味にちびっと入れたんだけど」

うんうん、いい仕事してるね。

「さて、桜桃も食ったし、やりですか」

俺達はヘタをパクツと口に放り込んだ。さて、まずは堅い繊維を軽

く噛んで少し柔らかくしよう。前歯で全体的に万遍なく、肉叩きみた
いなイメージだ。

「ん〜?」

「むく・・・んむ」

2人は苦戦してゐるらしいな。だが進もう。今度はリングを作る。
歯茎なんかに押し当てて・・・よし出来た。後は、そのリングの端を
舌で円に押し込めば・・・

「・・・んぺ」

よしでけた。

「早っ!」

「出久スゴいっ!」

「俺、人外レベルで器用だからさ」

メモリーメモリ様々だな。

「ウ〜ン・・・」

「モニユモニユモニユモニユ・・・」

おっと、思ったよりも苦戦するな。やっぱり俺が異常なんだな。

「・・・!出来た!」

「私も!」

2人揃ってぺつと舌を出す。その上には、方結び出来た桜桃のヘタ
が乗っていた。

「よし、3人共クリア!」

「「イエ〜イ!」」

3人で飛び上がってハイタッチ。

「これ良いね。口ん中鍛えられそう」

三奈の言う通りだな。口の中のスペースの使い方が分かるという
か・・・

「因みにそれ出来る奴はディープキスが上手いって言われてるな」

—ピシッ—

惣司の言葉に、2人は凍り付いた。

「・・・え?マジで?」

「まあ都市伝説みたいなものだが・・・」

「……ッ」

あらら、顔真っ赤にしちゃって。

「出久は動じないんだな」

「別段恥ずかしがるべき事とも思えないからな」

そう答え、肩を竦めてウインクしながらペロツと舌を出してみせる。ハニートラップとかも経験済みだからな。本気で愛してくれる三奈やフランに比べりゃ、億分の1程の魅力も感じなかったし心も動かなかったが……

「よし、じゃあ次行ってみよう！」

「……………王様だくれだ！……………」

「ってデッブー復帰したんか」

「えーりん先生の人体実験新薬のバイトで磨き上げられた薬物耐性が無いと危なかった。あと感染力皆無に改良された新型のTウイルス」

「お前Tの保有者かよ……で？王様は？」

さて、今度は誰かn

「俺 ち ゃ ん だ わ ！ 」

「く た ば り や が れ 糞 ウ エ イ ド ！ 」

「言っちゃう!?ここで本名言っちゃう!?マジで!？」

いつ以来だろうか。こんなに心から本気で「くたばりやがれ」なんて言ったのは……

「ハアアア……何でお前2回目なんだよ……」

「ご 都 合 主 義 ♡ 」

「ド突きたい、このニヤケ顔」

こおれはまたドギツいのが来るのを覚悟した方が良いかな。

「では5番！1番を、自分が持つてる力を使ってマッサージ！」

「あ、良かった。まだまとm」

「そして1番！喘げ！」

……コイツ今、何つつった？

「え？？」

……まさかの麗爆かいな……

「オイこら糞プール！どういう意味だよアアン!？」

「あ、喘げって・・・喘げって・・・／＼／＼」

あ、コレは麗日が1番だな。

「いやだって、君らさつき素直になつたのにイチャイチャしねえんだもん。きつと画面の前の皆もさあ、もつと吐糖しそうな程甘々なイチャイチャが見たいと思うんだよね。喜べ画面の前の麗爆♥信者共！俺ちゃんが素ン晴らしイ〜シチュエーションを用意してやったぞ！野郎共！鼻血でティツシユ箱を空にする準備は良いか!？」

「誰に向けて話してんだカス!!」

「画面の向こうのお友達です〜!」

「ふざけんなア!!」

「ふざけてなんかいませくんw」

お〜お〜煽るねデツプー。知らないぞ〜?後でデカイツケが廻つて来ても・・・

「ホラホラホラホラホラホラ、王様の命令は〜?」

「クツ・・・絶・・・対・・・」

苦虫を噛み潰したような声音と、爆発しそうな程に真っ赤になった顔で、かつちゃんは渋々承諾した。

「あく、その・・・お茶子・・・痛かったら言ってくれ／＼／＼」

「う、うん／＼／＼」

そう言つて麗日の後ろに回るかつちゃん。覚悟でも決めたんだろう。目がキリツとしてるね。相変わらず真っ赤っかだけど。

「ではこっから3人称視点です!彼等の脳内まで、じ〜っくりとお楽しみ下さ〜い!描写下手だったら許してね☆覚悟は決めてもコカインはキメるなよ!」

デツプーがまた第4の壁^{お友達}の向^達こう側^やの住人^らに話掛けているが、無視を決め込むと決意した俺だった。

——NOサイド——

爆豪はモッズコートを脱いで椅子を持ち、麗日の背後に回る。お互いに顔は真っ赤。

「じゃあ、行くぞ・・・(爆発抑えねえと・・・)／＼／＼」

「う、うん。お願いね・・・(ひゃーっ!緊張するう!)／＼／＼」

そして爆豪は麗日の肩にゆっくりと手を当てた。

「ひゃっ！」

すると、驚いたのか麗日の身体が小さく跳ねた。それに対し、爆豪の脈も跳ね上がる。

「い、痛かったか？」

「う、ううん、大丈夫！チョットびっくりしただけやから！」

「・・・なら良かった」

爆豪は大きく息を吐き、肩に当てた指を慎重に動かして、モニュモニュとマッサージを開始した。

（結構、凝ってんだな・・・そう言やコイツ胸大きいから、その重量が肩に・・・ヤベエ、自然に邪念が入って来やがった・・・）

「（そ、そうや、喘がな・・・えつとくえつとく・・・）んっ／＼・・・んあっ／＼」

「ツツツツツ〜?!?!?!」

麗日のやけにリアルな色っぽい喘ぎ声に、爆豪は石像の如く硬直する。元々、麗日は演技の才能があつた。その才能が、この環境下で無意識の内に働いてしまったのだ。しかも今の麗日はパツツパツのライダースーツ。ボデイラインがそのまま出るので、それがエロさに一層拍車を掛けている。

「・・・あの、えつと・・・ば・・・カツキ、君?／＼」

「っ！す、スマンっ!?!／＼」

目を逸らして何とか落ち着いて向き直った爆豪の視界に、肩越しの潤みかけた麗日の瞳が飛び込んできた。益々頭部に血が集まり、早くも命の危険を感じ始める爆豪。

「・・・スマン、続ける／＼（そう言えば、『力』使うって・・・この場合、個性で良いよな?だったら・・・）」

—ポポポポポッ—

爆豪は限界まで威力を絞った爆破で掌の温度を上げ、血行促進と同時に振動マッサージを試みる。

「あ・・・暖かい・・・♥ハア、気持ち良い♥」

「そりや、良かった・・・／＼」

どうやら上手く行ったらしいと一息吐く爆豪。そしてまた肩の上に指を這わせ、強張った筋肉を揉み解し始めた。温熱マッサージの陰で、さつきまで緊張していた麗日もリラックス出来たらしい。

「ハア、ハア／＼．．．んっ！そこっ、イイ！／＼」

「．．．ここ、だな。分かった（ツク！エロい！）」

歯を食いしばって平常心を保つ爆豪。他のメンバーも一言も発さず、固唾を飲んで見守っている。だが、この2人にはそんな事を気にする余裕は無かった。

「ひっ／＼．．．あっ、ああっ／＼．．．あんっ♥」

「．．．．．」

最早爆豪は思考を停止し、半ばゾーンのような状態になってマッサージを続行している。指先の感触と視覚情報にリソースを全て割いているせいで、その顔は一周廻って能面のような無表情に成って居舞っていた。

（．．．ん？何だコレ？）

その時、爆豪は微かな、しかしハッキリとした違和感を覚える。

（コレは．．．赤い、ライン？）

そう。彼の視界に突如、赤みを帯びたラインのようなものが現れたのだ。それは麗日の背中に走っており、幅は指の直径2つつ分だろうか。

（肩から項に掛けて．．．それと、背骨に沿うような形で肩甲骨の間から腰まである。それに、肩甲骨の縁の真ん中辺りがやけに濃い？．．．まさか．．．）

試しに爆豪は、そのラインの上を親指の腹で圧迫しながら撫で下ろした。

「ひっ!? あっあんあっ／＼／＼はあんっ!?／＼／＼」

すると麗日は大きく反応し、その背筋を仰げ反らせる。その反応に、爆豪は『やっぱりか．．．』と納得した。

「見つけた」

「へ?．．．か、カツキ君?何?」

「スマン、ちっと勝手に動くぞ」

「えっ？ひゃあっ!!」

そう言つて爆豪は麗日の背中を押し、机にうつ伏せになるように倒し込んだ。更に腰に手を回して上半身を完全にテーブルに乗せ、麗日の膝は椅子に乗せる。

「・・・ふっ」

「ツッ!? あ、ああっ／＼!? あっあっ、はうん!?／＼」

すると、さっきまでの恐る恐るといった手付きとは打って変わって、強く揉み始めた。特に背筋は、右手の中指を左手の親指に巻き付け、第2関節をピンポイントで押し込んでいる。

「何っ、急につひゃんっ♥!? 上手く♥なつて、んおおっ♥!?」

「何か、見えるようになった」

爆豪は一旦手を離し、先程色が濃く見えたポイントに両肘を当てた。そして・・・

—BBBBBOOOM!!—

「っ♥!? ああああああああ♥!?」

掌を細かく連続で爆破する。その衝撃は肘からダイレクトに伝わり、削岩機のように筋肉を刺激した。余りの刺激に絶叫する麗日。その目は既に焦点が合っており、口の端からは涎が垂れている。

「・・・もつと・・・もつとだ・・・」

「はい! かつちゃんが変なスイツチ入りかけてるんで終了ッ!!」

—パンツ!—

出久が手を強く叩いてストップコールを掛ける。この時、爆豪も完全にイっちゃった目をしていたので。

「・・・ツ／＼／!?」ボンッ

—バタッ—

そして出久の手の音で正気に戻った爆豪は、一気に顔を真っ赤に染め上げてぶっ倒れた。自分のやった事を鮮明に覚えていたのだから仕方が無いだろう。

「・・・えく、色々と收拾が付かなくなりそうなので・・・今回の王様ゲームは、これにてお開きにしたいと思います」

「「「「「賛成」」」」」」

惣司の言葉に麗日と爆豪以外の全員が従い、このゲームは無事(?)
お開きとなった。

——感想——

三奈「・・・めっちゃエロかった」

フラン「永遠亭でマツサージうけた三奈ちゃんみたいだった」

デブプー「あれ絶対感z」——(首の骨が折れる音)——

奏「は、激しかったな・・・」

翼「・・・(ノーコメント)」

クリス「あたしもやられたら・・・あ、あんな風になっちゃうの
かな／＼/?」

響「・・・怖さ半分、興味半分、かな／＼」

未来「・・・ツ／＼」ボンツ↑ああなる自分を想像した

エボルト「・・・ノーコメントで」

爆豪「・・・スマンお茶子・・・」

麗日「・・・気持ちよかったから・・・ええよ?／＼」

出久「あれ、途中から催眠状態だったよな麗日・・・」

——余談——

偶然nascitaの前を通りかかったマリアが麗日の嬌声を聴
いてしまい、弦十郎に報告。仁が誤解を解くために1時間ぶつ通しで
説明し続けたんだとか。

戦姫絶唱エボリユーシヨン！／3人のE（＋5人）

⑤

（出久サイド）

「人狼ゲーム？」

響の提案に聞き返す俺。ルール自体は知っているが、王様ゲーム同様にやった事は無かったな。

「カード一式持つてるからな。12枚あるぜ」

そう言つて仁がカードを取り出す。絵柄は『人狼』『人間』『占い師』『狩人』『狂人』『霊媒師』で、人狼が3枚、村人が5枚、あとはそれぞれ1枚ずつだ。

「あれ？そう言えば人数はポツキリだけど、ゲゲルラグダダはどうするんだ？」

「あ……」

考えてなかったのか……こういう所が原点エボルトと違うというか、何というか。

「ザダダサ、ゴセグゲゲルラグダダゾギジョグ。リントンのカードをパパンラギブベ」

流暢なグロンギ語で立候補したのは、もう1人のエボルトである惣司だ。

「ギギロバ？ゴラゲパボグギグゲゲルググギザドゴロダダンザガ」

このノリに乗って、俺もグロンギ語で返してみた。三奈とフランクが困った顔をしているな。まだすんなりとは耳に入らないんだろう。

『ギギンザジヨ。ダラビパ、ゴグギグボロゴロギソギザソ』

声変えると凄みがあるなあオイ。

「バサダロンザ。さて皆、人狼ゲームをしよう」

——10分後——

（NOサイド）

『じゃあ全員、カードを引け』

ルール説明も終わり、全員が惣司の指示に従ってカードを引く。因

みに惣司は雰囲気を出すため、スライム状態で天井にへばり付いていた。シヨゴス気取りか。

『よし、引いたな。じゃ、アイマスク着けろ』

指示通り、全員が支給されたアイマスクを着けた。

『人狼はマスクを外して、お仲間さんにご対面だ』

マスクを外したのはフラン、未来、出久だった。何故か納得できしてしまうメンバーなのは気のせいだろうか。

(あ、出久も人狼なんだ)

(人狼で良かったぜ。パッシブスキルに虚偽無効があるからな。人間側だと、すぐに人狼が分かかって面白く無い)

(へえ、このメンバーなんだ・・・)

『ハハハッ！ピツタリだな！じゃあそれぞれ、喰いたい奴を指差してマスクを着けろ』

フランは三奈、未来は奏、出久は麗日を目指す。

『成る程。じゃ、次は狩人と占い師。それぞれ、カードを俺に見えるように持って、占いたい奴と護りたい奴を指せ』

狩人は爆豪で麗日を、占い師は翼で奏をそれぞれ指差す。すると惣司はシンビオートのように天井から伸び、翼のアイマスクを外して奏の役職を見せた。そのカードは人間だ。

〔コクリ〕

『よし、1日目の朝、スタート！全員、アイマスクを外せ！』

指示通り、全員がアイマスクを外した。出久は大きな欠伸をし、周りの顔色を窺う。皆、少々落ち着かない様子だ。

『まず喰われたのは、三奈ちゃんと奏だ。あつちの退場者テーブルに移れ』

『ありやりや、早速私か』

「奏・・・」

「いやはや、食べられちゃったい」

奏と三奈が頭を掻き、苦笑いしながら退場者テーブルに移る。翼が少しシユンとし、爆豪はフウツと軽く息を吐いた・・・吐いてしまった。

(へえ、成る程・・・俺は麗日を喰えなかった。そして、かつちゃんは安堵の溜め息。かつちゃんが狩人って事か)

この観察眼お化けの前で、ヒントを作ってしまったのだ。

『じゃ、処刑会議の時間だ。話し合ってくれ』

メンバーは少しざわつくが、誰も手を上げようとはしない。切り込み隊長気質の奏と三奈が初っ端から居なくなったからか、もしくは警戒してか。あのデップーでさえ、口を開こうとしない。

「なあ」

その時、仁が手を上げた。その声に、全員の視線が集まる。

「俺、実は占い師なんだ。で、占ったんだが・・・人狼だったぜ、翼」

(！へえ・・・)

(成る程、ね・・・)

(仁の奴、狂人か。面白い奴だぜ)

「な、何?!」

仁の言葉で、完全に察した人狼チーム。対して、自分が呼ばれると思っていなかったであろう翼は、大きく狼狽えてしまった。このゲームにおいて、こういったリアクションは致命的である。

「お？凶星か」

「い、いや違う。私が占い師だ。私は奏を占っていたが、奏は人間だった」

何とか冷静になった翼。しかしここに、新たな爆弾を投下する者がいた。

「待って。占い師は私だよ」

未来だ。人狼である未来自らが、混乱を更に掻き回す。

「占いによると、人狼は・・・仁君だったよ?」

「なっ！ち、違うぞ!」

ふむ。どうやら、自分を捨て駒にする作戦に気付いてくれたらしいな。

『じゃあ投票だ。さあ、誰を処刑する?』

仁↑翼、出久、フラン、デップー

翼↑仁、爆豪

未来↑響、麗日、クリス

という結果になった。

『では、仁を処刑。退場者テーブルに行こうか』

「あゝ畜生！最っ悪だ・・・」

仁は頭の毛をワシヤワシヤ掻き回す。

(名演技ありがとよ。さて・・・次だな、問題は・・・)

『さて、これより夜時間だ。アイマスク装着しろ』

妙に間延びした惣司の声が響いた。全員がアイマスクを着け、指示を待つ。

『まず、占い師。占う対象を決めろ』

翼が指差したのは、未来。惣司はそれに従い、人狼のカードを見せる。

「！（コクリ）」

翼は驚きながらも、頷いた。

『じゃ、次だ。霊媒師には、仁の役職を教える』

と言いつつ、降りる事はしない惣司。つまり、霊媒師はもう喰われたのだ。

『よし、それじゃあ狩人な。護りたい奴を選べ』

爆豪は出久を指差した。

『成る程。じゃ、人狼のターンだぜ。マスク外しな』

人狼チームはマスクを外し、目配せする。そして、出久が手を挙げて口を動かした。

「(人狼は任意で、食わないでいる事は出来るのか?)」

読唇術で意を察した惣司は、身体の色を変化させ、電光掲示板のように返事をする。

『(可能だ。1日ならな)』

出久は頷き、今度は仲間にジエスチャーを送った。

「(2人は、今回は喰うな。俺がかっちゃんを喰う)」

「(OK。分かったよ)」

「(考えが有るんでしょ？従うよ)」

他の2人も、快くそれに従って目を隠す。最後に出久がアイマスク

を着け、腕を組んだ。

『よし、2日目の朝だぜ』

言われるまでも無く、全員がアイマスクを外す。

『今回の犠牲者だが、誰だと思う？・・・爆豪だ』

「俺か・・・」

爆豪は素直にテーブルを移動した。しかし、その眉間には皺が寄っている。

（人狼は3匹の筈・・・俺が出久1人を護ったとして、他の2匹はどうした？何で2人喰われてねエ？・・・処刑した仁が人狼？・・・クツソ、判んねエ・・・）

『じゃ、処刑会議だな』

2回目の処刑会議が始まった。喰われた事で爆豪が人狼では無い事が分かり、麗日が若干ションボリしている。

「もうカップルで良いんじゃないかな？この2人」

「デップー、こういうのは急かすモンじゃ無いんだよ？」

「三奈の言う通りだぞ。じっくり進んで行きや良いんだ。さてと、誰か報告は？」

「じゃあ私から」

出久の質問に対し、手を上げたのはフランだ。

「私、霊媒師なんだよね。調べた所・・・人狼だったよ、仁君」

フランのカミングアウトは勿論ハツタリだ。しかし、本物の霊媒師は口出ししない。否、出来ない。何故なら、もう既に喰われてしまったからだ。故に、これが嘘と判るのは残りの人狼2人だけだった。

「さて、1人はかっちゃんを賭して護ったんだろう。そして、犠牲者は1人だ。つまり、仁が人狼だったのは間違いないだろうな。そしてそれは、未来が占い師である証拠だ。と、言うことは・・・」

全員の視線が、翼に集まる。これで、翼が人狼であるという状況証拠が揃ってしまったからだ。

「ま、待て！本当に私は違『さてさてさーて！お待ちかねのオク・・・投票タァ〜イム！』そ、そんな・・・」

無慈悲過ぎて、最早涙目になりかけている翼。そして、投票が始

まった。結果は・・・

翼↑出久、未来、フラン、麗日、響、クリス

出久↑翼、デップー

となった。

『じゃ、翼は処刑だな。退場者テーブルに移動だ』

「くっ・・・」

苦い顔で移動する翼。当然だろう。翼は本当に占い師で、人狼の罠に見事に嵌められてしまったのだから。そして、残った人間は麗日、デップー、響、クリスだ。最早摘みゲーである。

『さて、夜だな。狩人、護りたい奴を選べ』

勿論、誰も動かない。しかし、人間陣営にその事を知る術は無かった。

『じゃあ、次は占い師な。対象を選べ・・・よし、見たな。じゃ、次は霊媒師だ。翼の役職を教えよう』

動かすのは口だけな惣司。その役職が居ないからだ。

『よし、最後に人狼チーム。喰いたい奴を選びな』

出久はデップーを、未来は響を、フランはクリスを指差した。ゲームセットの瞬間だ。

『よし、朝だぜ』

アイマスクを外し、それぞれが顔を見合わせる。

『じゃあ、喰われた奴を発表する・・・デップー、響、クリス。喰われたぜ、お前ら』

「「「ええっ!?!」」」

目を真ん丸にする人間陣営。まあ、人狼は後1匹だと思っていたタイミングで一気に3人喰われたのだから仕方無いだろう。

『残りが麗日だけになったから・・・このゲーム、人狼チームの勝ちだな』

「あ、私生き残ったんや」

「まあ、ゲームとしては負けたけどね」

キョトンとする麗日に三奈が突っ込みを入れた。

「成る程なア、お前らが人狼か・・・あくああ」

そう言い納得する爆豪。その表情は険しく、かなり悔しそうだ。

「え!?じゃあ仁君は!?!」

「狂人だろ。周りを引つ掻き回して、処刑されるように仕向けたんだろオナ」

混乱する響に解説を入れる爆豪。それを聞き、他のメンバーも

『ああ』と納得した。

「フッフゥン、乗せられちゃった?」

「ありがとよ、仁」

こうして、楽しい人狼ゲームは幕を閉じるのだった。

「・・・あれ?ねえ作者、俺ちゃんの順番は?」

仁に迷惑を掛けたペナルティだ。諦めろ。

(出久サイド)

「で、どうだった?俺のGM、しっかり出来てた?」

「バツチりだったぜ」

天井から降りて来た惣司の質問に俺は答える。にしても画期的な伝え方だったな。まさか体色を変えて電光掲示板みたいに答えてくるとは・・・

「なあ、もう4時なんだけど、今夜どうすんの?どっか泊まるアテあんの?」

「「「「「あ・・・」」」」」」

「考え無しね。そんなことだろうと思つたよ全く」

しまった、もうそんな時間か・・・さてどうしよう。俺と三奈、あとデップーは恐らく野宿でも良いけど、それ以外がなあ・・・

「オイお前ら。ここ、泊まっていけ」

・・・え?

「良いの!?!」

「ホントに!?!」

「良いの良いの、今回楽しかったし」

おお、仁の太っ腹に感謝だな。

「そんでき、ウチ、風呂あるんだけど・・・入る？」

「「「「入る！」「」」」」

「うおっ凄い食い付き」

訓練の疲れもあるからな。風呂は有り難い。

「もう沸いてるよ。ちよつとした銭湯・・・よりは小さいと思うけど、男女それぞれ全員が入ってくつろげると思うぜ」

「何から何まですげえな、この世界の n a s c i t a は・・・」

「惣司に同感」

「フウく極楽極楽く・・・」

「出久、ジジクセエぞ」

湯船に浸かった俺の言葉に、かつちゃんが反応する。良いじゃねえかよ、爺臭くても・・・

「にしても、出久の筋肉って凄いよな。密度が」

—ゴグリツ—

「痛つてえ!？」

「フツw」

突っついてくる惣司の指を脇腹の筋肉で完全にガード。それなりに力を込めていたらしく、突き指して悶絶し始めた。愉快愉快w

「ねえ、今回さあ、俺ちゃんの台詞少なすぎない？」

「メメター！」

やっぱり第4の壁を認識出来るんだなく仁は。まあ今回は分かんなくもない。デブプー、今回は2言喋ったかなって位だったし。

「所でかつちゃん」

「ん？」

「どうだった？ライダーシステムは」

感想は大事だからな。それに、勧めた責任もあるし。

「・・・強え。ただただ、強え。それしか言えねえな。あの力を敵が振るう様なんぞ、正直想像したくもねえ」

・・・成る程ね。

「だが、受け取ったモンだ。いぎつて時にや使わせてもらうぜ。中々

良い着心地だったしな。快感」

「おう、それが良い」

これで、一応は安心かな？と言うか、その台詞はオトーヤン……え、待って？かつちゃん死なないよね？麗日に膝枕されて死なないよね？……多分、恐らく、きつと、大丈夫だ。そう思うことにしよう。あ、そうだ。

「そう言えばデップー」

「ホイホイ何じやらゴキブリホイホイ？」

「文やんとの調子はどうよ？」

ーピキッー

瞬間、デップーは凍り付いた。それは最早色付きの彫刻と言われても信じてしまえる程に、完璧な硬直だった。

「え、何？何があつたの？」

惣司も戸惑いを隠せない様子。まあお調子者のデップーが硬直すれば、そりやな。

「……いや、問題は無いんだよ。問題は……強いて言うなら……セツ〇ス中に身体が保たなくなつて、決まつて気絶しちゃうぐらいかな！H A H A H A!!」

「回復因子持ちの身体にガタが来るつて、妖怪系個性の性欲つてヤバいな」

「……出久……金髪とは、気を付けろよ」

……そう言えば、フランも妖怪・怪物系の吸血鬼だ。ヴァンパイアコレは搾り取られるかな。俺の血諸共……

「まあ、俺は人外みたいな身体だから大丈夫だろう。そうじゃなかったら、そんな時やそんな時だ」

「何でこんな躊躇無く下ネタの話が出来るのかねえ」

「女子組が居ないからかなだろ」

「ええ……」

もう理解することを諦めた惣司。コイツの場合、体型と精神構造が男寄りだから体格もそうしてるだけで、実は性別が無いのだ。だから仕方無いだろうな。

「まあ、この問題だつて童貞捨てた時よりやマシだけどさ」

「どんだけ酷い状況だつたんだよ」

身体にガタが来て気絶するつてのより酷いつて・・・正直、想像付かないな。

「あん時やホントにキツかった。15の頃にハマつて女傭兵団に捕まつてな」

「あ・・・(察し)」

「それまた異形型が多いから性欲も凄いし、仕事柄何時死んでもおかしく無えつて事が更にその性欲に拍車掛けてんのよ。もう嫌だつた。全裸に猿轡と手錠でベッドに固定されて、24時間強制○ツクスだつたぜ。それに比べりや、気絶したらちやんと止めて、後から謝つてくれる文の方が億倍マシよ」

「・・・」

言葉を失う俺達。まあ、何だ、ウン・・・凄まじいな。

「と言うか、尺取っちゃつたね。作者く！ちよつとカット入れてく！」

—10分後—

「良い湯だつたな。凄いぜこ」

俺達は仁が用意してくれた浴衣を着て、カフェスペースの椅子に座っている。因みに装者組は帰った。

「おし、じゃあそれぞれの鍵渡すからな」

そう言つて仁は俺達にキーを渡す。と言うか・・・

「何で男だけ？」

「デッブー以外は女の子と同室で頼む。部屋がそれだけしかなかつたんだ(棒読)。なので、出久は三奈&フランと、爆豪は麗日と寝てくれ。あ、手は出すなよ?」

・・・大体分かつた。全く、お節介な奴だよ。

「なつ!?」

動揺するかつちゃん。まあ、そんなに強く割り切れて無いからな。でも、新しい力を得た者同士、いいタイミングかも知れない。

「じゃ、それぞれ解散」

「あく、かつちゃん。存分に、気持ち伝えると良い」

「ッ!!」

さてと、俺は卓球でもしますかな。

(勝己サイド)

「イヤ、かつちゃん強いな」

そう言つて卓球ラケットを手の中でクルクルと回す出久。思考加
速を縛らせて、漸く26―24でギリギリ勝てた。

「さてと、もうそろそろ良い時間だ。部屋に行こうぜ」

ニヤつきながら提案する出久。何か腹立つな・・・

「行こっか、出久」

「私、旅行ではホテルでしか泊まったこと無かったから、なんか楽しみ
！」

「おお、そうなのか。じゃあ行こう」

2人の要望通り、出久は部屋を探しに行った。両腕に2人をくつつ
かせながら。

「じゃ、俺ちゃんも行くわ。GOOD RACK」

俺の肩をポンツと叩き、デッドプールも部屋に向かった。何気にイ
ケボ・決め顔・サムズアップのイケメンコンボが成立してたのがムカ
つく。マスクしてんのに・・・

「・・・俺らも、行くか・・・お茶子」

「う、うん・・・」

そつと麗日の手を取り、ほんの少し力を込めて握る。心臓が踊る
な・・・落ち着けや俺の心臓!

「・・・ん」

「!!」

ちよつと握り返してきた! くつ、スゲーな出久達は・・・

「・・・よし」

そして、俺は鍵に書かれた番号の掛かった部屋を探して歩き出し
た。手の中の温もりを感じながら、ゆっくりと。

「よいしょ、つと・・・」

そう言つてポストとベッドに座るお茶子。ベッドが2つあってマ

ジで安心した事は、墓まで持って行こうと思う。

「……」

「……」

「……何て話しゃ良いんだ!？」

「あ、あのさー!」

「お、おう!」

向こうから振ってくれた。やっぱり、気まずいのは嫌だよな……

「今日の訓練、上手く行ったね!」

「あ、ああ。お前が、上手く合わせてくれたからな」

「ううん、合わせてくれとったんはカツキ君やん」

「いや、あれはお前のフオローが良かったから勝てたんだよ。オツサ

ンのパンチ受け止めてくれたり……」

「そ、それ言うたらカツキ君も、攻撃がキレッキレでスゴかったし!」

「イヤイヤお茶子が!」

「イヤイヤカツキ君が!」

「……なんだこのやり取り……でも何か、ホツとするな……」

「……なんだこのやり取り……でも何か、ホツとするな……」

「ガキかよ俺ら」

「んふふつ、ホンマやね〜」

ハア、漸くお互いの緊張が解れたな。

「……ねえ、カツキ君」

「どうした?お茶子」

お茶子の少し沈んだ声に、俺はそつちを見る。目に入ったお茶子の顔は、今さっきとは打って変わって少し不安気だ。

「……今日、さ。私達も、仮面ライダーの端くれ……に、なったやん?」

「……おう」

「……変身して、カツキ君と一緒に戦った時……と言うか、目の前に出て来た岩を、反射的に殴った時……砕けたんよね、簡単に……」
「まあ、ライダーのスペックは基本的に1単位つて出久も言ってたか

らな・・・」

本当にスゲエよな、ライダーシステムって。

「でき、そんな時・・・殴ったのが、もし・・・もしも、人やったら、つて思ってた・・・」

「!!」

「正直、怖い。もし、この力で誰かを傷つけてしまったら、とか、もし、それが皆やったら、とか・・・」

「・・・そうか・・・」

そう、だよな。お茶子の個性は、対象を無重力化させるだけだ。俺の爆破とは違って、直接的な攻撃力はほぼ無エ。そんな奴が、急に人を簡単に殺せる力を入れたら・・・怖いに決まってる。

「・・・あはは、やっぱり私には無理なんかな、仮面ライダーって・・・こんな臆病じゃ——」

「違う」

「・・・え？」

思わず、口が動いた。本当に反射的に、俺の意識と関係無く・・・いや、違う。関係無くなんか無エ!

「力を持つなら、お前くらい臆病な方が良いんだよ!」

「え?か、カツキ君?」

もうこの際、勢いで言っちゃおう。

「昔、馬鹿なガキがいた。派手な個性を振り回して、ちやほやされたから、いい気になって威張り散らして・・・挙げ句、自分を『カツコイイ』なんて言ってる。慕ってくれた幼馴染みを、無個性だって理由で・・・虐めた」

「っ!」

・・・察したか。

「ソイツは、殴ったり、蹴ったり、仕舞いにや、個性を使って痛めつけたりもした。それで、偽物の強さに酔っていたかったんだ・・・なあお茶子・・・お前は、その馬鹿とは違う。ちゃんと、力が他人に与える痛みを考えられるんだ。だからソイツと・・・俺と同じ間違いは、しねえよ」

「カツキ君・・・」

「万が一、お前が誰かを傷つけそうになったり、落ち込んだりしたら・・・そんな時や、俺が・・・助けてやる!」

「!!」

言い切った俺は、お茶子の頭を撫でた。そしてその手を頬に下ろし、親指で軽く擦る。

「俺だけじゃねえ。出久も、芦戸も、スカーレットも・・・デッドプールもだ。俺らの先輩として、助けてくれる。だから・・・心配いらねえよ」

「・・・ぷっ、アハハハハハ!」

「オイコラ!ここ笑う所じゃねえだろ!」

「いや、慰めてくれたのがさ?何か意外で・・・ふふっ」

「・・・ったく・・・」

(・・・まあ、さつきみたく惜げた面してねえから、良しとすつか)

そう思っ頬から手を離そうとした。が・・・

「ねえ、まっつて?」

その手にお茶子の手を重ねられ、止まる。

「っ!?!」

一瞬ギョツとしたけど、次の行動にも驚かされた。お茶子は、俺の掌に頬擦りしたんだ。

「カツキ君・・・好きです」

「・・・ツツツ!?!」

い、今、何て・・・!?

「・・・あはは、言っちゃった／＼・・・ちよつと乱暴で、口悪い時もあった、でも、根っこは今みたいに優しく・・・そんなカツキ君が、私は好きなんです／＼／＼♥」

「・・・」

・・・ヤベエ、頭が回らねえ・・・

「・・・れも・・・」

「え?」

「俺もだよ!」

ああ、クソツ・・・お茶子に先越されちゃったな・・・

「喧しいぐらい元気で、いつも美味そうに飯食って・・・たまに芯が強え所もあって、泣くほど悔しい事があってもすぐ立ち直って・・・そんなお前に・・・ほ、惚れたんだよ俺も!!／＼／」

「ツ!!」

言った・・・言っちゃまった・・・でも、自分の気持ち隠してウジウジしてるなんざ、俺じゃねえ!

「・・・やっぱり、両思いやったんやね／＼／」

「・・・そうみてえだな／＼／」

だったら、言う事は一つだ。

「お茶子・・・」

「カツキ君・・・」

「俺の、恋人になつてくれ!」ください

・・・これが・・・ああ、そうか。

「喜んで!」

これが、恋か・・・

「・・・何か、嬉し過ぎて実感湧かねえな」

「あはは、そうやね・・・だったら、さ」

「ん?」

照れ臭くて外した視線を、お茶子の目に向け直す。するとお茶子は視線を合わせた後、ゆっくりと目を閉じた。

「ツ!」

この仕草は、流石に俺でも知ってる。俺に向かって少し顎を上げているから、求めているモノは、きつとアレで間違い無いだろう。

「・・・カツキ君、お願い・・・」

「ツ!!あ、ああ!」

俺は覚悟を決め、お茶子の顎を指で支えた。そして、お茶子の顔に自分の顔を近付ける。少しずつ、ゆっくりと・・・

「・・・」

「・・・」

互いの吐息の音が聞こえる程に近付いた。そしてそのまま、その距

離は・・・
「ん・・・」
0 になった。

戦姫絶唱エボリューション！／3人のE（＋5人） 終

仁から爆豪と麗日に渡された2本のクラックボトル。それを使い、2人はメガロドンのローグダークとフェニックスのグリスセイヴァーにそれぞれ変身。そして、仁からの警告と説明を受け、変身を解除しようとドライバーに手を伸ばした時だった。

―バチチチチチチチチチチツツ！―

「ぐあああああつかかかかかっ!？」

何の前触れも無くボトルからスパークが走り、変身が強制解除してしまっただのだ。

「お、おいつー！大丈夫か!？」

「爆豪！麗日!」

「勝己君ツ！お茶子ちゃんツ!」

慌ててデップー、三奈、フランが駆け寄り、助け起こす。

「仁君？コレは、どういう事かな?」

「説明・・・出来るよな?」

「は・・・ひゃい・・・」

一方仁は、闇そのものを押し固めたような目をした出久と未来に詰りめ寄られて顔面蒼白で正座・・・否、土下座した。因みに2人共ライダールベルトを装着しており、出久はエターナルメモリを、未来はNEOクロードドラゴンとシエンシヨウジンボトルを構え、何時でも変身して仁に一撃を叩き込む準備が出来ている。片や戦場を駆け、一時期裏の世界で『蒼炎の死神』と呼ばれた化け物。片や友達の為ならば何でも出来る、怒らせたらヤベー!393。その2人のほぼ本気の殺気に挟まれたのだ。気絶していないだけ奇跡である。

「え、えくつとそのくですね・・・こ、古代生物のボトルを扱うのは何分初めてなもので・・・」

「なあお前、エボルダイナソーって知らないのか?」

「え、何それは?」

「あれ本当に知らない奴だ（まあ、確かに玩具化はされてない劇中未使用のボトルだけどさあ・・・）」

2人を抱え起こしながら惣司は溜め息を吐いた。頭の中はメタメタである。

「おッ!？」

「ん？どうした惣司」

奇声を上げた惣司に出久が訊ねた。

「2人共、ハザードレベルが6，0になってやがる・・・麗日なんて、昨日までだった3，5だったのに！」

「何!？」

思いも寄らない返答に叫んでしまう出久と仁。

「ああッ・・・おいお茶子、大丈夫か？」

「んく、何とか・・・あれ？何か身体が軽い気が・・・？」

「・・・言われてみりや、確かに・・・」

「ああ、ハザードレベルの上昇は、それに比例して身体能力も上がるらしいからな。多分それだろ」

「ああ〜」

出久の説明に納得した麗日と爆豪。

「・・・良かったな仁、無駄な失敗じゃ無かった分、許してやるよ。未来も、勘弁してやってくれ」

「・・・ハア、了解」

「あ、ありがてえ・・・」

こうして、何とか出久達の折檻から逃れる事が出来た仁なのであった。

（出久サイド）

―バンッ―

「皆さんッ!!」

「ゴフッ!？」

「ウェイッ!？」

「ひゃっ!？」

扉を叩き開ける音に、思わず変な声が出てしまった。見れば、かつ

ちゃんも水が変な所に入ったらしく激しく咽せている。今さつき響が起きてきて、折角美味しい朝食だったのに……

「あく、エルフナイン？取り敢えず落ち着けよ。こちとら朝飯中だ」

「あ……ごめんなさい……」

仁に咎められ、素直に詫びるエルフナイン。良い子だな。

「別に良いさ。それより、俺達のDNA調べてたんだろ？何か見つかったかい？」

かっちゃんの背中をさすりながら問い掛ける。かっちゃんの方も、何とか持ち直してきたようだ。

「そ、そうなんですっ！実は皆さんのDNAを観察した結果、凄い事が分かって……」

「で、興奮しちまってn a s c i t aまで走って来た……テレポトジエム使えば良かったんじゃねえのか？」

「……あ」

仁の言葉に固まるエルフナイン。しかし、テレポトジエムか……ジエムは宝石って意味だから……大方、転移術式を封入した人工水晶体って所だろうな。興味深い……

「取り敢えず、先に飯食わせろ。それが終わってからだ」

「ハイ……」

復帰したかっちゃんの言葉に従うエルフナイン。確かに、今は飯優先だな。

「所で、エルフナイン……お前徹夜したろ？」

「え？あっはい。でも、どうして？」

やっぱりな。そんなこつたらうと思った。

「まず、足元がふらついている。平衡感覚の異常は、寝不足に有りがちな症状の一つだ。更に、さつきから瞬きの度に眉間に必要以上に力が入ってるし、何より白眼を剥きかけてる。閉じたまままじようとする身体の反応を、無理矢理無視して目を開けてる証拠だ。と言うか、その濃い隈を見れば分かる」

「凄い観察眼ですね……実は、もうそろそろ限界で……ふあくっ……」
そう言ってエルフナインは大きな欠伸をした。疲れ、溜め込み過ぎ

だろ。

「何か、何時かの出久を見てみたい」

「そうか？」

「そうだよ。会ってすぐの頃、ネットで調べてみたんだけどさ。アツプされてた動画のエターナル出久、見るからに疲れた様子だったよ？」

・・・三奈の指摘も頷けるな。特にあの頃は・・・

「確かにな。当時、悪夢を避けるためにほぼ眠らなかつた。平均睡眠時間は10分かそこらだったな」

「え？・・・大丈夫だったの？」

「フィジカル的には大丈夫だったが、メンタル的にはキツかつた」

ホント、三奈と会わなかつたら発狂してたな。

「あ、今は寝てるぞ？」

「無茶しないでね出久。それと仁君、エルフナインちゃんに私達の借りてた部屋のベッド、使わせてあげても良い？」

「良いぞ。エルフナイン、確か廊下の突き当たりだ」

「ふあいく・・・」

仁の言葉に呂律の回らない言葉で返し、エルフナインは廊下の奥に歩いて行つた。

「・・・ん？そう言やデップー、お前今日ヤケに静かだな」

「ああ、今の今まで糞作者が俺ちやんの事忘れてやがったからね、仕方無いね。ハくあの作者ホンマつかえ。止めたら？この仕事」

「メタ発言と淫夢語録が混ざってエライ事になってるぞ」

もうコイツ更に頭可笑しくなってるよ。ぶっ飛んできてやがる。

「って、何時の間にか食い終わったな。エルフナインは当分起きてこないだろうし、それまで何して時間潰す？」

俺の言葉に、デップーと三奈とフランがnascitaの店内を見回す。すると、お客柄がカラオケマシンが置いてあつた。丁度良いな。

「良いの見つけた。仁、あのカラオケマシンって使えるか？」

「おう響達も使うからな。歌好きか？」

「好きだし、それ所かツベにうpもしてる。最近出来てないけどな」

最近歌えてないよな。

「よし、じゃあ歌うか！ここ防音カンペキだし」

仁も乗り気だな。さあ、ショータイムだ♪

——ダイジエスト——

「スーパノヴァ♪」

「うわあ〜三奈ちゃんもフランちゃんもカッコイイ！」

まず始めに、俺の恋人2人がスーパノヴァをデュエットする。響
テンションがかなり上がった。

「かあぜくをく切れく♪声をく枯くらくしてく♪」

「デップー上手いなオイ」

「そしてチョイスがarmour zoneと言うね」

仁がデップーの歌声に舌を巻く。そうなんだよ、コイツ歌上手いんだよ。意外だろ？

「・・・なあ出久。俺、何を歌えば良いんだ？」

「ああ、かつちゃん経験無しか・・・(ニヤリ)じゃあ、ゴニヨゴニヨ・・・」

「ツ!?!・・・わかった・・・」

「衝く撃度♪さく大のく♪出く来事がく奇く跡く呼ぶく♪君を愛する自分をく止めくられくない♥」

「(マジか)」

「やつぱ、おとーやんだよな」

／／／

「愛を叫んでるねく♪叫びまくってるねく♪」

デップーと三奈とフランは啞然とし、惣司はニヨニヨしてる。新しい恋人達を祝福するには、コレが最適だろうな。

「よくし！俺ちゃんの超弩級のテポドンで祝砲あげてやー(首の骨が折れる音)ーチーン」

「こんな時に何やってんだ貴様は」

デップーがエグい事しようとしたんで、草カイザの如くへし折っ

た。まあ秒で復活されたが・・・

「WHITE LINEを追いかけろオ〜♪」

惣司はまさかのデルタだった。しかも『声の仕事が得意』という自称が許されるレベルの歌いっぷり。いやはや、恐ろしいな。

さて、最後は俺だな。じゃあ、この曲で行くか。

「君がく抱き締めて♪いるのは〜♪あの日の〜約束〜♪ひとつ〜♪」

『code〜E〜Eの暗号〜』だ。兄さんが教えてくれた曲だからな。

「やっぱり、出久の歌唱力って凄いよね」

「身体鍛えてるからかな？」

ははっ、俺の恋人達は嬉しいことを言ってくれるねえ。

——ダイジエスト終了——

「ふう〜、ひつさびさに歌った歌った♪」

うん、満足。スッキリしたぜ。

「ふああ〜・・・」

「お？起きたかエルフナイン」

と、仮眠をとっていたエルフナインが起きてきたな。疲れも結構とれたらしい。

「はい！かなり楽になりました！」

「よし！じゃあ早速だが、君は何を伝えにあんなに慌てて飛び込んできたんだ？」

「そ、そうでした！聞いてください！」

またエルフナインのテンションが上がったな。そんなに凄い事なのか。

「惣司さん以外の皆さんのDNAを調べた結果・・・その構造が、三重螺旋だったんです！」

「・・・？」

「それがどうかしたか？」

「え？え？」

「・・・ああく、成る程」

うん、大体分かったわ。

「悪いけどエルフナイン、俺らの世界じゃ、DNAが三重螺旋じゃない人の方が珍しいんだよ」

「・・・え？えええええええつ!？」

「つまり、従来の二重螺旋の他にもう一本、個性を司るゲノムがあるという事ですか？」

「そういう事。だから無個性の奴は、大きく分けて2つ。

①・個性因子が不完全（穴あきなど）な為、個性が上手く発現しなかった

②・DNAが二重螺旋の旧人類。これは足の小指に関節があるか否かで見分けられる

という2パターンだ。①の場合、このタイプの無個性同士の間に出来た子供は、それぞれの穴を補完し合って、新しい個性を持った子供が産まれる可能性がある。一方②の場合は、それ同士が交配しても受け継がれる個性因子その物が無いから、子供に個性が発現する事はほぼ有り得ない。ま、中には突然変異^{ミューテーション}で個性のある子供が産まれる事もあるだろうが・・・」

ざつと説明すると、こんな感じだな。

「注意：コレはあくまでオリジナル設定です。だって原作借りてるだけだもん」

デブプーのメタ発言は無視するとして・・・さて、気になるのは・・・オールフォーワン。奴はこの遺伝子を奪っているんだろう。ならば、奴の体内には複数の遺伝子が混在しているはず・・・つまり、奴は拒絶反応を起こさない体質、と言う事か？いや、《拒絶反応無効（もしくは抑制）》なんて個性もあるだろうからな。それを奪ったと考えるの

が妥当か・・・もう良いや。これ以上続けても、こんがらがるだけだ。

「成る程・・・では、出久さんの個性は何なんですか？」

「ん、俺は無個性だぞ？あ、②の方な」

「「「え、？」」」

「え？」

・・・何？この空気・・・デブプー以外固まっちゃったんだけど・・・

「イヤイヤイヤイヤ！」

「無い無い無い無い！」

「「有り得ないよ!!」」

わお、真つ正面から大否定されたな。

「言つとくが、この人間離れした能力もメモリの力だからな？」

「ええ？・・・どんなメモリなの？」

「メモリーメモリ。《記憶》という概念の記憶を封入したメモリでな。俺の身体と融合してるんだ。言わば今の俺は、《メモリードーパント》と言える状態なんだよ」

「・・・なあ、ガイアメモリの毒素はどうなるんだ？メモリーなんて、かなり強力なメモリだろう。ならその分、毒素もつよくなるはずだ。なのに、何でお前は平気なんだ？」

仁が気になるのもごく尤もだな。説明しよう。

「簡単だ。メモリーメモリが過剰適合者である俺を気に入って、毒素をカットしてくれてるからだよ」

「・・・マジ？」

その答えを聞き、あんどりと口を開ける仁。まあ信じられんわな。というか響は理解を放棄して人狼ゲームのカード使ってカードタワー造り始めたぞ・・・

「生まれ付きなんだが、分析・記憶が大の得意でね。そこが噛み合ったんだろ」

「・・・お前が規格外の権化だって事が分かった」

「お前よりやマシだ。俺は精々地球規模の規格外だが、お前は宇宙規模・・・下手すりゃ時空規模の規格外じゃねえかよ」

かつちゃんや麗日、三奈とかフランに言われるなら良いが、コイツ

の場合は完全にブーメランだ。アレだぞ？鋭角的に曲がって頭に刺さったからな？

「・・・もうギブアップ」

おっと、優秀なマイラバースもキャパが限界か。彼女等までトランプタワー造り始めたわ。

「でも、出久さんのDNAも三重構造でしたよ？」

「それも簡単。もう6年間融合しっぱなしだからな。メモリーメモリのガイアエナジーが、俺の身体に遺伝子レベルで定着してるんだよ」
「ああ、成る程」

エルフナインも納得してくれたらしい。さてと・・・

「惣司！もう帰るんだよな、今日」

「その予定だぜ？長居するのも悪いからな」

「そうか・・・じゃ、その前に・・・仁！奏と翼とクリスを呼んでくれるか？」

ちやつちやと完成させないとな・・・

「で？用って何だ？アタシ達、今から買い物行きたかったんだが・・・」
「まあまあ、そうカツカするな雪音。仁に寄れば、直ぐに済む用事らしい」

「いや、済まん。出久が呼んでくれて言ったもんだからよ。悪かった」

「まあ、あたしや別に構わないよ」

おっとコレは早急に仕上げなければ・・・
「悪いな。ちよつとそこで立っててくれ」

俺はデンデンセンサーに無色透明のボディが特徴的なメモリ・・・
ブランクメモリを装填し、まずは奏に向ける。

「え？な、なに？」

『サーチ・・・アナライズ・・・コンプリート・ガングニール！』

「よし、出来たな」

デンデンセンサーからメモリを引き抜く。オレンジにゴールドのラインが走った、特別な模様のメモリ・・・ガングニール・シンフォ

ニツクメモリが完成していた。

「コレで、俺もシンフォギアを使える」

「・・・何でもありだなオイ」

さて、ボソツと呟いた奏の言葉は無視して、お次は翼だ。

『サーチ・・・アナライズ・・・コンプリート・アメノハバキリ!』

出来上がったのは、クリアブルーにパールホワイトのラインが走ったシンフォニツクメモリ、アメノハバキリメモリだ。須佐之男命が八岐大蛇を討ち取る際に用いた剣とされているからな、切れ味が楽しみだ♪

「現代科学の全力をもつてしても解析出来なかったシンフォギアを、こんなにアツサリとコピーするなんて・・・」

「実際、メモリシステムは結構なオーバートテクノロジーだからな」

最後はクリス。個人的にはかなり使い易そうだな。

『サーチ・・・アナライズ・・・コンプリート・イチイバル!』

イチイバルのシンフォニツクメモリも完成つと。コレはクリアレッドに内側が銀、

「よし、ありがとな。元々コレが欲しくてココに来たんだ」

これで、目標は達成だな。そして、かっちゃんも麗日もライダーシステムを得られた&くっ付いた。かなりの収穫だ。

「さて、そろそろ帰るわ」

バツサリと切り出す惣司。時刻は午後2時だ。

「そっか・・・元気でね!」

「うん!」

「そっちもね!」

響の言葉に、三奈とフランが返す。

「また、会えたら会おうぜ」

「ああ、会えると良いな」

エボルト同士ががちりと握手しているな。本当に凄い光景だ。

「じゃ、開くぜ！ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……」

惣司がヘルアンドヘブンの呪文を唱えると、目の前の空間が歪んで大きなゲートが出来た。

「世話になったな。アデュー！」

最初に飛び込んだのはデッドプー。最後にカッコつけやがったな。

「じゃあ、向こうでも仮面ライダーとして気張るわ」

「頑張ります！ありがとうございます！」

続いて勝茶カップル。彼等はこれから大きな戦力になるだろう。

「さてと、俺達だな」

「そうだね」

「楽しかったよ〜！」

そして、俺達も飛び込んだ。さて、楽しい異世界旅行は、これにて閉幕だ。